

北辰會雜誌

138

第四高等學校文藝部

北辰會雜誌

第百參拾八號

第四高等學校文藝部

北辰會雜誌 第百參拾八號 目次

英國勞働黨の平和理想

ヘンダソン
佐口透譯

映畫隨想

「蒼氓」に關するノート……………谷口陸男……………(一一)

逞しい巴里生活の描寫 等の仲……………黒田五六……………(一九)

フエエデの事など……………樋口幸夫……………

短 卯 月 抄……………佐口透……………(二八)

歌 詠 草……………上春次……………(二九)

俳 句 光 葉……………西野良……………(二九)

五 月 性格の亡靈(手記)……………星野邦彦……………(三三)

四高文化の問題と報告

四高文化事業一覽(第一學期)……………(四六)

校內文化の爲に……………(四七)

雜 記 帳……………(四五)

四高文化の根本問題……………(五七)

雜 錄……………(六〇)

小 奔 流……………古小路隆義……………(六三)

花 ちばな……………谷口陸男……………(九五)

推 移……………佐守信男……………(一〇八)

說 山 峽 から……………樋口幸夫……………

雜報・北辰會收支決算表……………(一四二)

書 評……………(一四八)

後 記……………(一五一)

英國勞働黨の平和理想

アーサー・ヘンダソン

佐 口 透 譯

軍備擴張競争の拍車と増大しつつある戦争の危険の下に勞働黨が久しきに亙つて平和を求めて來た事實は一般に認められてゐる。勞働黨は、世界の永久の平和を計るには世界政府の制度が組織されねばならず而して此れは現代國家の社會的經濟的基礎及び國家の統治權に激烈なる變動を齎らす事を意味すると云ふ事實に直面してゐるのである。併し一度斯くの如き問題に到來した以上更に進んで考究せねばならぬ。もし平和機構が戦争を惹起す無政府の暴力の重壓に抵抗するに足る強力な實體になるならば、それは政府も個人も我々總べてが義務を負ふべき法律を作らねばならぬ。又それは法律を超越して完全に各個人の忠實の精神に浸透しなければならぬ。

世界政府はその權限が及ぶ社會の市民との間に何等かの直接の關係がある時にのみ存在し得るのである。世界政府は一般市民の忠實に對し何等かの直接の權利を要求せねばならぬし又その權利の要求は各々の國家の法律に於て正式に承認されねばならぬ。英國は國際聯盟に加入する事によつて、平和の維持に關して共通の義務を誓約せる諸國家の組織團體の樞要なる一部を占める事になつたのである。従つて勞働黨は聯盟規約を我が國家の憲法の延長たる世界憲法と考ふる事はすべての善良なる市民の道德的政治的義務となつたと云ふ事を主張するものである。我々は政府のみならずその反對黨も又あらゆる個人的市民も聯盟規約の義務を負はねばならぬと主張す

る。我々すべては我が國が聯盟の一員として平和の維持に關して帶びてゐる義務を果す方法について責任を負ふてゐるのである。何となれば我が國の聯盟加入によつて我々は或る意味に於て、他の如何なる公的義務よりも急務たる平和維持の問題に關して聯盟に直接の忠實の義務を有する國際的市民となつたからである。我々は我々の町、州、國家否全英國民聯邦國の構成員であるのみならず、勞働黨の見解では世界協和聯邦の濫觴たるべき世界的な國際聯盟の市民なのである。

勞働黨政府は議會に平和法令を通過させる事によつて此の新しい市民權の觀念を實現させるであらう。此の法令は我々の國際的義務の國民的解釋即ち、聯盟の一員として又ヴェルサイユ平和條約の調印國として大英帝國は決して暴力に訴へずすべての紛争を穩健なる處置に服せしめ戦争なる國際的罪惡を犯す國家に對して全聯盟加入國と共同行動を取る事を嚴肅に誓つたと云ふ事を法令全書に附するだらう。

併し此の集團的平和機構の條約上の義務は非常に物珍しく又遠大なものであり又國際的無秩序の諸條件並びに因襲を完全に斷ち切つてゐるから輿論のみならず政治家や新聞も我々の誓約と一致する完全に忠實な態度で相語り又行動しさへしてゐるのである。英本國に於ては我々の云ふ平和誓約が何を意味してゐるかについて人々は半信半疑の心持であり又外國に於ては我々が危機に際して此等の新しい義務に基いて行動するか否かについて疑惑の念があるやうである。

法律の眞の拘束力はそれが遵奉されるであらうと云ふ一般的信念に存するのである。聯盟の集團防禦組織こそ軍擴競争に専心する惡徳社會を打破し戦争の危險を除く只一つの道であると云ふ信念を全世界に齎らす努力に於ては英國は如何なる國にも敢へて劣らない。我々が集團組織の下に我々の義務を如何に理解するか又如何に我々が此等の義務を英國の世界政策の礎石とし如何なる状態にあつてもそれに基いて行動する事に決心したかを、英

本國並びに外國の輿論に明らかに知らしむべき何等かの手段を講じなければならぬ。

そこで勞働黨政府は平和法令を發布するであらうが、それに於て宣言される事は我國が、戦争や侵略を避ける事により平和を維持すべき嚴肅なる條約上の義務を誓約しすべての紛争を平和的處置に附し此等の義務を無視して武力に訴ふる國家との關係を斷絶する事を誓約した諸國家の世界的團體の一員なるが故に、英國政府は次の如き法律の義務を負ふ事となるだらう。

- (1) 如何なる國家との如何なる紛争も我々が加入してゐる諸條約に規定された平和的解決の諸方法に附托する。
- (2) 政府が自衛の爲武力に訴へざるを得ぬと感じた場合に於ては政府は直ちにその行動とその事態の惹起せし理由を聯盟に報告せねばならぬ。而して平和回復の爲に取らるべき手段に關して相互の義務に基づき理事會又は總會の命令を遵守せねばならぬ。
- (3) 平和を維持すべき誓約を無視して戦争に訴へた國家とのすべての關係を絶つべき聯盟規約第十六條の義務を他の加盟國と共同して直ちに果すに要する經濟的財政的その他の手段の爲に充分の實力を政府に與へる。

此の平和法令の諸方針に沿ふ國家の法律は輿論に對し我々の國際的義務の意義と重要性を理解せしめ我々が他の諸國に對し従ふように論ずる諸例を示すに力を添へるだらう。併し更に進んで戦時に於ける個人に對する國家の權利についての傳統の見解即ち市民の義務や愛國心の本質に極度の變改を齎らすに非ざれば我々は此の集團的

平和機構を實現する事は不可能であると云ふ事實に直面する事は當然である。政治家や街頭の人々の眞の信念が愛國心とは「正邪を判断せずして政府に盲従する事」を意味する限りすべての條約も協定も單なる數片の紙きれになつてしまふだらう。國際的無秩序の状態に於ては自然な愛國心は刺戟されて盲目的な極端な熱狂になつてゐる。と云ふのは市民は彼等の最高の義務は何事が起らうとも、たとへ戦争の如き死活問題についてさへも政府に盲従する事であると教へられてゐるからである。英國や米國に於ては此の様な場合宗教的理由に基いて居る時には良心的な反戦論も事實上許されてゐるのである。併し國家より高次の政治的權威が他に存在しない限り、政府が戦争に訴ふる事が正當か否かについて市民はその個人的判断の行使が許されなかつたのである。反對に（以下二十五字削除）

勞働黨は國際聯盟の成立と英國の加盟とは事態を一變せしめたと云ふ事を斷言するものである。特に此の事は平和の問題について世界の社會への忠實が如何なる國民的義務よりも特に戦時に於ては政府に對する我々の義務よりも立勝る事を意味してゐる。戦争問題について市民が疑惑をさしはさみ得ぬ盲目的服従——依らしむべし、知らしむべからず——を彼等の政府に至す義務は最早要求され得ない。政府が此の最高の問題に關し聯盟の世界的權威に忠實であるか否かについて、直接に世界の平和に忠實ならんが爲國家の平和事業と義務に徴して自己を判断する事は市民の義務なのである。

世界の他の社會に對し、我々を拘束する條約上の義務の制限された性質の爲我々の世界市民權は實際は嚴重に制限される。それ故我々の國際平和に對する忠實は市民權の三個の義務を含むに過ぎぬ。併し此等の義務は善良なる市民のすべての義務の筆頭に位するものである。即ち、

- (1) 仲裁裁判の主張——政府はそのすべての紛争を平和的手段により解決し武力を避ける事を主張する義務。
- (2) 制裁の助力——國際法の規定を回復する唯一の目的を以て、平和の破壊者に對する集團行動にその義務履行の危険と結果を賭したる政府の参加を斷乎として支持すべき義務。
- (3) 戦争反對——政府が自衛の爲武力を行使すると云ふ支持されざる主張不承認の義務。此の政府の主張を世界の社會の判断又は好意ある仲裁の制斷に附托する事を主張する。もし政府が聯盟によつて侵略國と宣告され又は仲裁拒否の後の戦争連累により侵略者と宣告された場合、兵役、國家的重大事業又は納税等の政府に對する奉仕と支持とを拒否する。

此等の義務は我國の聯盟國なる事により既にすべての市民が責任を負ふてゐるものと勞働黨は思量する。最初の二つの義務については議論さるべき箇所は無いやうである。第三番目のものに關して勞働黨の論旨は根本に於て、「國際聯盟の規約を無視してなされた如何なる戦争をも默認するを拒む事は我々の義務である」と宣言した國民協議會によつて既に採用された。一九三〇年ラムベスの教會會議は次の様に宣言した。「諸國家は國際的紛争の平和的解決に際し條約協定に従ふ事を嚴肅に誓約したが、本會議はあらゆる國家のキリスト教會はその國の政府が進んで紛争を仲裁又は和解に服せしめる事を宣言しなかつた如何なる戦争をも拒否すべきである。」と。

勞働黨は諸原則から論理的結論を引き出したに過ぎぬがその正當性がすべての階級に承認されてゐる事は理解されよう。勞働黨は戦争停止の責任は勞働組合運動のみに置かるべきではないと信ずる。平和やその他の勞働運動の部門を要求する市民は皆我國民が拘束される世界市民權の三大義務を追求して戦争を回避或ひは中止せしむる爲になされる如何なる團體的行動の責任をも分擔せねばならぬ。勞働黨は反戰總罷業^{ゼネスト}の種々の意味を充分認識

してゐる。今列舉した此等の三大平和義務が戦時に於て如何に適用されるかにつき組織せる労働者階級や又全市民を指導せんが爲労働組合會議事通則第八條によれば、戦争勃發の危険ある場合には特別會議を召集すべき事を示してゐる。

此の議事通則は次の如くである。

労働組合運動が將來の戦争を回避するに當りその力の及ぶ限りの事を盡す爲、戦争勃發の危険ある時は産業上の行動を決定すべく、出來得れば宣戰布告以前に、特別會議を召集すべし。

労働黨が直ちに盡すべき仕事は此の世界平和の三大義務とそれより生ずる世界平和への忠實の意義と重要性を此の國の輿論特に労働組合員に理解承認せしめる事である。此の事は如何なる政府も聯盟の規約を精神に於ても法文に於ても遵守し、英國政府が平和を守るべき誓約を無視して戦争に訴へんとする如き事態の發生を高度に不可能にする最大の保障を與へるであらう。併しある政府にして戦争に訴へるが如き場合を顧慮し、労働黨政府は國策の手段としての戦争を否認する英國の誓約を他國に充分尊敬せしめる事を決意してゐる点を完全に明らかにせねばならぬ。そしてある政府にしてその誓約を侵犯して英國を戦争に捲き込まうとするならばそれは全労働黨政府の統一された力によつて反對されるであらう。

一見すれば此等の事實は驚くべき革命的な主義にさへ見えよう。併し綿密に検討すれば此等の主義はアングロ・サクソン族の政治的傳統に於て又人道主義的民主主義的國家觀と英語國民に共通な國家の個人に對する關係の觀點に於て明白である事が發見されるだらう。此等の英語國民は常に福利國家を信じ決して權力國家なるもの

を信じなかつたのである。國家は人民の召使であつて決して人民の主人ではないと彼等は斷言する。何となれば國家は人民の爲に存在し人民の共通の幸福に奉仕する爲に人民によつて建設されたからである。

労働黨の國際平和の主義が如何に密接に民主主義的傳統に従つて進んで來たかを示す爲に五十數年前オックスフォード大學道德哲學教授トーマス・ヒル・グリーンが政治的義務の原理に關する連續講義に於て現今古典と見做されてゐる「戦時に於ける國家の個人に對する權利」なる標題の下に次の様な問題を展開したと云ふ事が想起されるのである。

(1) 國家はその管轄權内に於ける人民の共通の福祉に奉仕すべき範圍にその正當なる成立が由來する。國家の目的はその全國民間に於ける權利と機會の完全なる均等を實現する事であらねばならぬ。特權階級とその發展の爲に妨害されてゐる多數の人民を含む國家は不完全でありその不完全は戦争を誘致する軋轢を惹起し他國家に對する危機の根源となるのである。

(四) 本書の最初の章に示されたが如く國家内に社會の貧富の懸隔を増大し、内には社會的不正を起し、外には平和を危険ならしむ市場獲得競争を生む企業の間や獨占形態に進む生産の私利利潤獲得の組織から生ずる「平等への脅威」に我々の主義を適用すると云ふ特殊な点を除けば、グリーン^(三)の主義は今日労働黨の主義と同一である。トーマス・ヒル・グリーンによつて述べられた政治的デモクラシーの方法に於て彼の時代の狀態に適用されたその主義は實に社會主義者^(五)が今日に於て經濟的社會的デモクラシーの方法に於て現代の狀態に適用する主義そのものである。

〔2〕 戦争に参加したすべての國家が等しく責任がある譯ではないとしても戦争は罪惡であり不必要であり有害である。如何なる戦争の場合にも尋ねべき質問は常に——「戦争の責任者は誰であるのか」

現今すべての文明國は、戦争を國際的罪惡と規定し如何なる場合に於ても誰が責任者かを確め平和の侵害に終末を與へる爲適當な行動を取る事を國際社會の義務とする諸條約に拘束されてゐる。

〔3〕 最後にグリーンは國家が他國家への影響を無視してその利害問題の要求するままに肆意に行動する事は正當でないと教へてゐる。もし此等の他國家への影響が悪いならば……それを惹起す政治的行動は究極に於て正當と辯明され得ない。問題は只どの点に罪過が存するかと云ふ事である。不正の責を負ふ國家、他國に對し有害な行動により自國の利益を守る必要ある國家の目的は決して正當ではなく、恐らく眞の國家の存在理由の爲の好機會を持つ他國家によつて一掃され代位されるであらう。

労働黨が爲したすべては英國が、最高の不正と見做される戦争を單に否認するばかりでなくそれを回避し停止する事を誓約する世界的社會の一員である事に此の最後の原則を適用する事である。それこそ労働黨が叛亂者は聯盟規約を無視するが故に國際的無政府主義者であると主張する所以であり、かくの如きは憲法を侵害すると云ふべきである。即ち労働黨は我々がその一員である聯盟の規約を含む世界憲法への忠實を固守するものである。

労働黨がなしたすべては英語國民の民主主義的立憲主義をひるまず現代の諸現實と必要に、特に我々の聯盟加盟の現實にそして戦争を絶滅せんとする必要に適用する事である。

或る方面に於ては労働黨の聯盟規約と平和への頑然たる忠實の誓約は愛國心を破壊するものとして攻撃してゐる。併し此處に又労働黨は英語國民のデモクラシーの最高の傳統に忠實であるのである。即ち、

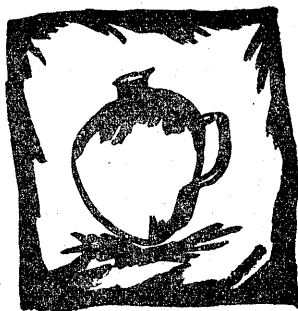
「他國よりも以上に強力なる軍備を誇示せんとする國民の熱望が愛國心の唯一の或は正當なる形式であるかの如くに云ひ觸らす者は全然誤るものである。時々無慾の刺戟を求むる爲には戦争が必要であると云ふ者は彼等自身餘りにも利己的で彼等の周圍に行はれてゐる利他的行爲を認識し得ぬかの如く疑はしむる理由を我々に與るのである。……公共心と區別される特殊な軍事的意義に於て、愛國心は同國人や各國家の市民である人々と相交はる市民氣質ではなく、領土の追従者や或ひは究極に於ては威力に頼つて下層階級に對する權力を意識する特權階級の一員の、或ひは他國家に對する主權を主張する一國家の氣質を云ふのである」と五十數年前トーマス・ヒル・グリーンは云つてゐる。

彼は云ふ、「眞の愛國心は局限された、國民化した人類愛である。そして愛國心の最も熱烈なる人々は毎日他國民に干渉する事なく彼等の自國民に恩恵を與へる善良なる仕事に於てそれを表現してゐる。」更にグリーンは相互依存増進の結果として曰く「正義の觀念が同國人の間のみならずすべての人類間に存在すべき關係として、善良なる市民の行爲を規整する觀念と同じく彼等各個の利害關係と無關係に人々の心に働きかけないと云ふ理由はない。」と

それこそ最も高貴な愛國心の様式である——自國の愛と誇とによつて我々は世界の同胞を愛し正義を愛する様になるのである。我々社會主義者が、我國がその約束した言に忠實に模範を世界に示し人類を貧乏も戦争もない新しきより公正なる文明に向つて導く我々の使命と國際正義に對する忠實をその政策の基礎とせねばならぬと信ずるのは實に我々の愛國心の爲なのである。

譯者註

- (一) 全世界を一國家とする制度。後述の世界協和聯邦の政府を意味してゐる。
 (二) ロンドン南西部の一區。カンタベリ大監督のロンドン邸ラムベス宮殿がある。
 (三) グリーンに就ては河合榮治郎氏著「社會思想家評傳」を参照。特に社會主義者としてのグリーンを認識せねばならぬ。
 (四) Labour's Way to Peace. By Arthur Henderson. London. Methuen.
 (五) 同じく社會主義と稱してもグリーン及びその系統を引く英國労働黨のイデオロギーは理想主義であり辯證法的唯物論をそのものとするマルキシズムとは全然對蹠的地位にあることは注意されねばならぬ。
 餘談であるが本書に示されてゐるが如き世界平和とか國民的福祉等の、馬鹿正直の人の目を眩ます大言壯語が労働者階級の諸現實を糊塗する常套的デマゴギーに終らないかどうかは労働黨のファシズムへの近接問題に取つて重要な證明とならう。



映畫隨想

「蒼氓」に關するノート

谷口陸男

1. 小津——熊谷

半月程の入院が終らうと云ふ日、私は病院の白いベットの所で、新聞の映畫案内を、食う様な眼で眺めまはしてゐた。三月の事なのだ。そして私が拾ひ上げたのは封切りされたばかりの「淑女は何を忘れたか」それから、セカンドの「蒼氓」だった。

翌る日、私は有名な封切館の華麗な特等席に坐つて「淑女は何を忘れたか」を見てゐた。私を取りかこむものは若い戀人達の幸福な溜息と、生活に事欠く事のない階級の人達の樂しげな笑ひとさゞめきと、穏やかな、靜かな春の吐息とであつた。

I drink upon occasion, sometimes no occasion……

キリ、と粹な流行の服を身につけた伊達男達^{ダンディ}は歸りに酒場ドンキホーテで五色の酒をあふるかも知れない。そして、大學の教授や、會社の重役達はゴルフに行く事を止めて、絃歌の賑やかな紅燈の街に足を向ける事もあら

う。それから、俳優や青年達の風評に餘念のない夫人連との間に一寸した波瀾が生れよう。けれども、所詮はそれと池の表のさゞなみに過ぎない。やがては又、喜びも悲しみもないものう日々が続くであらう。全ては穏やかな、静かな春の吐息なのである。

見終つた後で私は「蒼氓」を見ようと思つて直ちに場末の三流館に行つた。何と云ふ激しい變り方であらう。暗い映畫館の中には、勞働者や、女工達、そして肉をひさぐ女達が充ちてゐるのだ。南京豆の袋の音、子供の泣き聲、それから嬌聲——雜然として、物音が黒田記代のセリフも聞えない程、渦巻き、流れてゐるのだ。ドタバタ騒ぎや、惡どいくすぐりが畫面に出て來る度に、子供達はドツと歡聲をあげた。けれども、枯葉の如く吹き寄せられて來た「あをひとくさ」の凡てのものに左様ならの手を振つて、少くとも生活の有る地を求めて去つて行かなければならない悲痛な思ひは誰の胸にも滲み入つたのであらう。私は周圍に啜り泣きの聲の混るのを聞いた。私は周圍の人々から悲しい事に、「新しき土」^{ノイエール}を求めて「人間到處有青山」を謳ふ人々の現實はこれなのだと教へられるやうな氣がした。打ちのめされ、虐げられ、明日も知れない人々の間に立ち混つてゐるのは「蒼氓」を見るに何と適しい雰圍氣であつた事か。

小津が抜き差しならない「一人息子」の境地から、何時の間にか洋書のうづ高く積まれた大學教授の書齋で、靜かに身を横へ、穩やかに眼を細めて、さゝやかな家庭の小事件や、感情の動きなどを撫で樂しんでゐるのに、熊谷久虎は悲痛な面持で、號外の鈴の音に不安を感じ、病葉のやうに吹き寄せられて來た、生活に打ちのめされておどろした人達と一緒になつて、身を震はせて悲しみ、唇を嚙んで憤る。小津の描いた女達は、寄り集つて化粧の話、容貌の話、或は歌舞伎座の休憩室で俳優の話などに打ち興じ、夫のネクタイの撰擇に時を費す。熊谷

久虎は弟のために戀も、青春も抛つて、船艙に啜り鳴く女を描く。家庭教師を前にして試験勉強をする子供達の代りに、我先きに飯びつに蝟集し、唯一つの毬に興する子供達の姿がある。小津の青年は軍艦マーチを口笛に吹くけれ共、熊谷久虎は八木節を歌はせ、「此處は御國の」を歌はせる。

大學教授は手を後に組んで、薄笑ひを浮べながら部屋中を歩きまはるけれど、何物をも打ち捨て、故國を去らなければならぬ姉弟は大聲をあげて泣く。

全くなのだ。小津が暖爐の傍に心弱くも腰を下して新聞を眺めてゐるのに、熊谷久虎は生きよう生きようとの死物狂ひの努力にもかゝはらず、馴れない身にサルマタをはき、帶のない着物をつけ、足のすれる靴を穿き、十字架を胸につけて甲板にバンザイを叫ばなければならぬ人々と一緒に、相擁し、共に肩を打つてなぐさめ、涙を流して運命を悲しみ、地團駄踏んで何物かに憤る。熊谷久虎は「蒼氓」の一人なのだ。その眸に宿る涙には何の作爲も、スタイルもない、その憤りには何の街ひ氣も、ポーズもない。群集を後に從へ、眼に涙して何事かを訴へやうと迫つて來る彼の顔は、その背後の群集の一人々々と同じやうに眞剣であり、素朴であり、誠實である。そして、その涙の故にこそ、その憤りの故にこそ、「蒼氓」は人の心を打つ。その眞剣さの故にこそ、その素朴さの故にこそ、その誠實さの故にこそ、激しく人の心を打つ。彼の心の中を流れてゐる調子は生一本で單純で、市井人情風であり、そして又、その故に直ちに人の心を打つ。

けれ共、小津が、描いてゐる對象に一定の距離を置いて、狎れず、汚れない態度を絶えず持してゐるのに、熊谷久虎は映畫の中に這入り込んで了つた。蒼氓の一人になつて了つた。映畫作家であり、藝術家である事を忘れて了つた。彼は我を忘れて、仲間の悲しい運命に慟哭する餘り、彼の悲しみが感傷の誇張となつて、畫面に浮き出て了つた。不合格になつて悄然と歸り行く一家に降りそゞ雨は、彼の涙である。屋上の物干場で子供に話し

てやるお夏の夢物語を彼は干物の蔭にかくれて、人知れず聞いてゐる。そして、その子供の死に到つて、彼の感傷は頂点に達し、傷心を抱いて、しばらくは去りがてに、邊りを徘徊してゐる。女々しいではないか、熊谷久虎！彼は又、自分達の悲しい運命を憤つて、自分達を斯くあらしめた「社會性」を訴へる事に急な餘り、その「社會性」を映畫にする事を忘れて、觀念のまゝ露出させて了つた。鳴り響く號外の鈴の音は映畫の中で鳴つてゐるのではない。映畫の手前で鳴つてゐるのだ。移民收容所の對ひのホテルで行はれた舞踏會、或は又船出の日、出發の途中で出合ふ金持ちの自動車、之等は借衣のやうで、びつたりと身に合はない。彼は又、彼の鬱憤を事ある毎に、誰かに洩す。可愛さうなのはわれ助監督なのだ。彼は熊谷の鬱憤を一身に引き受けて身のやり場も無い。涙がかわき、憤りが靜まると、その時彼は我に歸る、映畫製作者である自分を顧みる。その時生れて來るのが、あのあくどい、くすぐりなのだ、喧噪なドタドタ騒ぎなのだ。

小津の喜劇に打ち興じから／＼と笑つて、ふと氣が付くと、何處かの片隅で、ぢつと私の笑ひ顔を見てゐる小津の眸を感じるのは、私丈けであらうか。書齋にのび／＼と横になつて顯微鏡を弄ぶ小津の安易な態度こそ、難すべきであつても、此の眸は正しく藝術家の眸なのだ。やがて、シャル・スパークに通じ、ジャック・フェーデに通ずる眸なのだ。眞摯な情熱を持つ若き熊谷久虎に此の眸を持てと望むのは、望蜀の望みと嘲笑されるであらうか。

「小津安二郎氏の作品など、技巧的な完成に對しては非常な敬意を表しますし、あれが興行價值がないと云はれるのは當つてゐないと思ひます。小津氏は常に高い意味の興行價值を持つやうに作つてゐるので、その点でも非常な名手だと思ふのです。唯、描くところが、いつも社會の消極面でしかない、その点で、不満を持つので

す。小津氏が若し人生觀を變へて來たら本當の意味の興行映畫が生れて來ると思ふのです。あの器用さにはとても眞似が出来ませんし、又技術的にも一步譲らなければなりません。しかし積極的なものを目ざすと云ふ点では、少くとも自分の場合、一つの強味だと思つてゐます。」(映畫評論四月號熊谷久虎渡歐座談會)

2. 映畫——「蒼氓」——文字

※待合室と云ふのは倉庫であつた。それがもう人と荷物とで一杯である。金網張りの窓は小さく、中は人の顔もはつきりしない程に暗く、寒く、濕つぽい。

※廊下では子供達が走つたり毬を投げたりしてゐた。

※けれども歡樂は盡きなかつた。落寞としたものを感じれば感ずるほど却つて酒を求め、哀愁が深ければ深いほど猶お互ひに酔つてみたかつた。これは弱い心であつた。孤獨の淋しさに耐へ得ずに、友達と酒にこと寄せて手を握りたい、言はゞ少しく自棄じみた酒であつた。それ故に歡樂はともすれば亂調子な興奮状態に進んで行つた。三浦さんはどうしても八木節を踊るんだと云つてふら／＼と踊り出すと忽ち廊下の窓硝子を叩き壊して了つた。どこかの部屋では若者が廊下に飛び出して角力をとると、行司になる器用な醉漢もあつて、見物がどや／＼と出て來たりした。

※出發。青年達は靴の紐を結び直し、女達は髪ほつれを直し、棚の荷物を下し、それを肩に擔ぎ上げる。そ

して身のまはりを見廻す。

「えい、忘れものは？ 無いか？」

「無かつたら出かけませう。一緒に。」

思ひ思ひの一團になつてぞろ／＼と室々から廊下に流れ出る。それ等の流れは階段で落合つて一杯になつて、玄關にあふれ出る。すると裏の倉庫から彼等が預けた大荷物を満載したトラックがごう／＼とエンヂンを鳴らし、走つて出て坂道を下りて行く。次から次へと、幾台となく下りて行く。彼等はこのトラックに何度か追ひ越されながら荷物の重みに腰をかぐめた群になつて歩いて行く。

※銅鑼を聞くと室に居た移民達はどやどやとデッキに上つて来た。一本の赤いテープが誰かの手から突堤に向つてする／＼と伸びる。それを合圖に我も我もと無数のテープが紫に黄に縦横に亂れて飛んだ。海風はへうへうと船に突き當り、テープの網目をさつと煽り上げる。(※石川達三作「蒼氓」の拔萃)

待合室の薄暗の中にうごめく群集の姿、戯れ興じて走りまはる垢じみた子供達の群、故國に左様ならをする最後の夜のやるせない寂しさを秘めた歡樂の圖、出發の朝、洋服をつけ荷物を背負つて掃き出されるやうに坂道を下つて行くおびたしい人影、それから、狂燥と悲痛と憤りの拔錨の場面——など、之等は何れも映畫「蒼氓」の壓巻であり、最も激しく人の心に迫る場面である。そして何れも群集が登場し、群集が主役なのである。こゝには散漫な文字の表現から受ける事の出来ない具象的な感銘がある。原作を越えた印象がある。卑近な例で云へば、之はニュース映畫の魅力であり、テレビジョンの魅惑である。飛行機の曲乗りを、スリルに富んだ競馬

を、大學リーグ戦を、私達は如何に巧みに新聞で報道されても、ニュース映畫の一卷の印象に勝りはしない。視覺的表現の印象の圓滿さに較ぶべくもないのである。

けれ共、映畫「蒼氓」は、お夏の弟孫市が兵役に就て苦惱し煩悶し、姉のために焦慮する邊り、或は又、お夏の戀人に對する綿々たる戀情と苦悶と、諦め——斯うした個人の内面的なもの、心理や感情の描寫に來ると、もう原作「蒼氓」に敵はない。融通無碍の文字は人間の心理や感情の中にも自由に身を潜ませて行くけれども、外面的なもの、描寫に勝れた映畫は、人間の心理や感情をそのまゝ提示する事が不可能で、何等かの間接的な視覺的表現に頼らなければならないからだ。此處ら邊りに文學の本質と、映畫の本質の分岐点があるのではなからうか。映畫が人間の心理を飽くまで掘り下げて行く難かしさは、今思ひ出せる例で云へばピエール・シュナルの「罪と罰」であらう。ドストイェフスキーのあの深い心理描寫を、ピエール・シュナルはそのまゝ映畫の上に移植しようとした。そして用ひた手段がピエール・ブランシヤールの演技であつた。結果として現れて來たものは心理描寫に於ける映畫の敗北であつた。ピエール・シュナルはピエール・ブランシヤールの演技にもたれかかり、その演技は心理のまはりを、どうどう廻りして、隔靴搔痒、所詮、映畫の及ぶべくもない世界なのであつた。同じやうな心理を扱つて、映畫の本質をしつかりと握つてゐたのにフエーデの「ミモザ館」があつた。養母と養子とその情人の感情や心理がミモザ館を取りまく消費者の集團の中で相交錯する。フエーデの用ひた心理の視覺表現の手段は此の集團であり、そしてその集團の中に描かれる個人の心理や苦惱こそ、映畫の爲し得る獨自の心理描寫なのだ。

熊谷久虎は、此の映畫の本質をしつかり握つてゐる。情熱の詩人啄木の苦惱は、啄木個人の苦惱ではなく、瀝民村に住む啄木の苦惱であり、孫市の悩みや、お夏の悲しみは、「風溜りに吹き寄せられた病葉」の悩みや悲しみ

であり、蒼氓の悩みや悲しみなのである。映畫の本質の正しき把握に於て、熊谷久虎はピエール・シュナールに勝れりと思ふ。

3. 覺書ノートの斷片断片

熊谷久虎は社會性を相言葉のやうに使ふ。縦に時代性と云ふものを考へて見て、さて、私は此の映畫を完成した彼の情熱を讃へ度い。

熊谷久虎は社會性を相言葉のやうに使ふ。社會性を描かんとする願望が眞摯な希求から發する限り、彼の態度は正しいのだ。けれども社會性が彼の映畫の看板になつたらお終ひ。繰り返される號外の鈴の音を、彼への警鐘にし度い。

日記体の構成は勝れた思ひ付きだ、移民收容所の生活を描く最もリアルな様式だらう。けれ共、それにしては餘り夾雜物が多い。

素朴で重厚で、悲痛な情熱と調子、それ丈で澤山だ。毬など、窓から投げ捨て、自動車に轢かして了へ。

演技の上手さ——阪東三三紫、伊澤一郎など、それから子供達はみんな名優。

4. あとがき

蒼氓とはもろもろの民の意である。腐り澱んだ潮に浮ぶ、國旗と戀文。

——昭和十二年六月——

逞しい巴里生活の描寫

——「我等の仲間」——

黒田 五六

「我等の仲間」を見て最も深く印象に残つてゐるのは都會で平凡な暮らし方をしてゐる極く普通の人達の氣質と生活とかが非常に生々しく描かれてゐたと云ふことである。いつか「緑の園」を観た時にも同じやうな感じを抱いたが、今度は更に強靱な人間の息吹きをもつと間近かに感じたのである。

此れはパリの失業者の一つの群を主人公とした作品である。然し此の中に描かれてゐるものは決して單なるパリの失業者ではないやうな氣がする。勿論大きな場所のへだたりや生活様式の根本的な違ひはあるにしても、同じやうな階級と同じやうな地位に置かれた我々には、彼等の中に何か我々と一脈相通する或物が存在してゐるやうな氣がするのである。此映畫の魅力は恐らく斯うした点から來るフアマリアネスに在るやうに思はれる。

映畫では五人の仲間が腕を組んで生活と夢とを築き上げ實現しようと努めながら、それが冷酷な現實の前に次ぎ／＼とつき崩されて行く有様を描いてゐる。そしてその間に極くありふれた明・暗の二相を巧みに織り込んで行く。——幾日も／＼掃除されたことのない、しめつぽい息づまるやうなどん底の都會生活と如何しようもない程希望に満ちて、鮮かに芽をふく樹々の緑を映して、明るい陽光を浴びつゝゆるやかに流れる靜かな郊外生活。

天使のやうにあどけないユダットと惡魔の申し子のやうな邪惡なジナ、何物でも平氣で片附けて行く強いジャンといつでも何かに憑かれてゐるやうないた／＼しいシャルル、更に空想的な自由を求めて浮かれる「我等の仲間」と飽くまで實利一点張りの金貸し。——實際ジャンの夢みてゐた生活はよい生活だつたのだ。明るいそして楽しい生活だつたのだ。

しかもそれは擱へることが出来る筈だつたのに遂々打碎かれてしまつたのである。何故打碎かれなければならなかつたのか？ 兄弟以上に仲善かりさうに見えた五人の仲間がどうして離れ／＼になつてしまつたのであらうか？ 此の問題を解いて行くのが「我等の仲間」であるのであらう。

成程種々の故障もあつたし、又夫々の事情もあつた。だがそれを故障や事情の所爲にするのは此の疑問の本質に少しも觸れることのない解き方である。此映畫の企圖する所はもつとずつと深い所に在るやうに思はれる。

離れなければならなかつたから離れたのだ。何故？ 彼等の團結は決して心からのものではなかつたからである。只生きたために結びついてゐたのだ。全然便宜主義的な考へから結びついてゐたのだ。だから富くじが當つて思ひがけない大金が手に入ると彼等には仲間には必要でなくなつて來るのである。たゞジャンの自由論だけが無理に彼等を繋ぎとめたのである。ジャンは雄々しくも「運命の流れ」に逆つて分散を喰ひ止めたのである。従

て悲劇は此所に始まつて來るのである。うはべだけは互にしつかり結びついてゐるやうでも、心の奥ではすつかり離れてしまつてゐる、之れが所謂人間の本當の姿なのだ。こんなのが——私の詞で云へば——凡人なのだ。非凡人ならばハッキリ自分一人の世界を主張することが出来るであらう。だが凡人にはそれが出来ない。だから表面だけは飽くまで便宜的に結びつかうとし、従て奥の底ではそれだけ一層自分一人だけの世界にたてこもつてしまふのである。そして之を無理に結合させようとして「大自然」に反抗していつたのがジャンであり、はつきりそれと分つてゐながら餘りにも女性的な忍従的な性格であつたが故にたう／＼底の底までひきづり込まれてしまつたのがシャルルである。「人間は團結しなければならぬ」と云ふ。然し果して本當の團結と云ふものが存在し得るであらうか？ 此の間に對して「我等の仲間」は明瞭に我々に答へて呉れるのである。我々は人間なのだ。生命を失ふことは出来ても決して作り出すことの出来ない人間なのだ。殺してしまつてから「いゝ考だつたのだ」と云つたのではもう遅いのである。

二

畫面に就て見ると、前半、富くじが當つてからマルヌの川畔に料亭を建てるまでが一番優れてゐる。金を引つつかんだ失業労働者達の体臭のこもつた歡喜や、ボートに乗つて空家をさがし、開店に漕ぎつける迄の描寫は素晴らしい出来栄である。此の人ならではのと云つた感じがする。之れ位生々した演出をする人は一寸他には見られないであらう。

デュヴィヴィエは現實を本能的に溺愛すると云つた人が居るが、彼の其の特異性が前か半に於てかくまで逞しい描寫を可能ならしめたのであらう。然し此の現實に對する溺愛は後半に入ると大分差し障りを惹き起して來る

ように思はれる。彼は餘りに逞しすぎるので現實を現實の儘でさらけ出してしまつてゐる憾みがある。即ち現實を頭の飾にかけて、それを適當な距離から冷靜に抜き出して來ることに巧みでないやうである。従て大雨に襲はれる頃からの描寫は前半に比して可成り見劣りがして來るやうに思はれる。仲間の瓦解を暗示するために大暴風雨を持つて來たのは確かにいい。「大自然」には人間の力では如何うすることも出來ない運命の流れがある。その流れを大雨でもつて具現しようとしたのは賞讃に値する。彼はうまく之を掴んで呉れた。然し餘りに現實を溺愛し過ぎて、之を思索し、批判する暇を失つてしまつたのである。だから我々には悲劇のラスト即ちジャンの發射が奇妙に感じられて來るのである。あそこへ到る迄にジャンとシャルルの仲間としての友情が戀愛よりも何よりも重要でなければならぬと云ふ意識がそれ程内面的につゝ込んで描き出されてゐないので、愛慾に負けなければならなかつたシャルルに對するジャンの發射が、狙つた結末に導くための作り事のやうに思へて少しも我々の心に迫つて來ないのである。

デュヴィヴィエは前半に於ては其特異性を縦横に使ひこなすことが出來たが、後半に到つてはすつかりそのために引きずりまはされてゐると云つて良いだらうと思ふ。

若しデュヴィヴィエにして、もう少し眼を現實から遠ざけて見つめることが出來たならば此の「我等の仲間」はもつとくすばらしい映畫になつてゐたことであらう。現實を現實のままさらけ出すのでは藝術とは云へない。現實を超越することに依つて始めて精神の光を把握することが出來るのである。藝術の醜は美のヴェールを以て包まれなくてはならないのである。望遠鏡の使ひ方には二通りある。デュヴィヴィエは今迄のぞいて來た望遠鏡をひつくりかへして反對の方から眺めて見ることにそろ／＼注意すべき時ではないであらうか。

フエエデの事など

——「女だけの都」を中心として——

樋口幸夫

私は始め「女だけの都」の批評を書く積りだつたのだが、この映畫が封切されてからもう大分日の経つた今では、既に他人に依つていろ／＼と云ひ盡されたやうだし、今更私がそれをこね返した所で獨特の名批評も生れないやうであるから、「女だけの都」を中心として、フエエデの事など思ひ浮ぶまゝに書き流して見ようと思ふ。

私はフエエデの作品と云つては、歸佛後の「外人部隊」「ミモザ館」それに今度の「女だけの都」の三つだけしか觀てゐないのであるが、フエエデは私のもつとも好きな監督である。嘗て「外人部隊」の帝劇封切の新聞廣告の中のマリー・ベル扮するところのイルマの素晴らしい表情を眺め乍ら、兼ねて「雪崩」「面影」「テレーズ・ラカン」等の名作の監督として名のみは聞いてゐたフエエデのアメリカに於ける不振から更生した歸佛第一回作品として、大きな期待に胸を躍らせて、若し十圓持つてゐたら東京まで（私は富山に居た）觀に行くのだがなどと考へた事を思ひ出すが、その頃既に私は好きになれさうな監督として豫感してゐたのである。

却て、私は先づ「女だけの都」に現れた諷刺に就いて考へて見たい。過日映研主催の批評會の席上、この映畫が單なる風俗喜劇映畫だといふ説と、いや諷刺映畫だといふ説とに分れて、相當華々しく論争が繰り返された。私自身はこれに關してどう考へたかといふに、實際にこの映畫を觀てゐた時には、これが諷刺映畫だとも又單なる風俗喜劇映畫に過ぎないとも考へなかつたのである。私は長閑に日永を廻る風車と緬羊の群の見える、和やか

な目も遙かなフランドルの田園のシーンに始まるこの映画に最初から魅せられ、ある時は祭典を翌日に控へた住民の歡喜の醸し出す雰圍氣に浸り、スペイン軍を迎へる四人の女が古風な快いマーチにつれて、威儀を正して華しくも嚴めしい歡迎行進を見ると、四羽の鷺鳥がガア／＼聲をあげ、腰を振つて四人の前を行進し、風車はとぼけたやうにハタ／＼と廻るシーンには思はず微笑み、又何度も心から笑つたり等して終始陶然となつてゐたのであるが、一度映画館を出るや、この映画の持つ諷刺に就いて切實に感じさせられたのである。フェエデがこの映画に於いて諷刺の意圖を全然有しなかつたとは考へられない。

もつともこの映画は風俗映画としても仲々素晴らしいものであり、フランマン派の名畫（十六、七世紀にはオランダやフランドルには風俗畫が發達したとの事である）の中から必要な部分を取り出して、これを巧みに映画の中に消化させてある事は充分察せられる。服裝、建築、家具、裝飾、或は市長夫人等のケルメツスの準備の描寫等から醸し出される雰圍氣の風俗畫的な好ましさは仲々捨て難いものである。私には分らなかつたが、切妻とか透彫とかのやうな細部に至るまで正確にあの時代のものだとの事である。

然し少し注意してこの映画を観たならば、これが單なる風俗喜劇だなどとは決して云ひ切れないと思ふのである。それならば諷刺映画であらうか？ 私はさうだとも云ひ切れない。私はこの映画を風俗喜劇映画と諷刺映画との渾然と融合したもの、いや、さういふよりも寧ろ、風俗喜劇映画だとか諷刺映画だとか云ふ小さな範疇に當て嵌める事の出来ない豊富さを持つ映画だと思ふ。

次にこの映画に現れてゐる諷刺とは一体何に對する諷刺であるかといふ事を考へて見よう。これも批評會の席上論ぜられた事であるが、或人は侵略者と被侵略者に對する諷刺だと思ふと云ひ、又ある人は男女關係に對する諷刺だと思ふと云つた。その他官吏に對する諷刺も考へられるし、僧侶に對する諷刺も考へられるし、見る人に

依つていろいろに考へるであらう。

この映画を單なる風俗喜劇だと主張した人は、斯の如き諷刺の不明確さを指摘し、若しフェエデが諷刺を意圖してゐたものとすれば、この諷刺の不明確さは明かにフェエデの失敗であり、クレエルの作品に於ける如き諷刺こそ眞の意味の諷刺であると主張した。

然し乍ら、その諷刺の露骨に現れたものが必ずしも立派な諷刺ではないし、又フェエデの如く、その豐饒な諷刺を何れも露骨に現さないで、自分は知らぬ顔をして、觀る者が各々その感情に應じてこれを知るやうに放り出してあるものが必ずしも價値少いものではない。却つて私などはかういふ諷刺の仕方が好きである。

「最後の億萬長者」或ひは「幽靈西へ行く」に見られるクレエル式諷刺と、「女だけの都」に見られるフェエデ式諷刺とは自らそこに相異なるものがあり、人に依つて、その何れかをより以上好むといふ事になるのである。

「巴里の屋根の下」から「巴里祭」へとクレエルの作品を樂しんで來た私は、「最後の億萬長者」を観て以前程彼が好きになれなくなつたのである。如何にもこれは傑れた映画であり、面白い映画であつた。笑ひと、さうして現代の資本政治と政治機構への辛辣な諷刺に満ち／＼た映画であつた。諷刺映画を確立した第一のものとも云はれた。然し私がこの映画を餘り好きになれなかつたのは、諷刺そのものとも云つてもいゝやうな、痛罵と冷笑からなる餘りにも露骨辛辣な諷刺であり、而もその諷刺のかけから、何となく氣取つたクレエルを感じたからである。

然しフェエデにはこの氣取りがない。透徹した人生觀による諦觀に基いて、何の氣取りも無しに彼の諷刺は巧みにフランドルの快い風俗畫の雰圍氣の中に撒き散らされてあり、諷刺はちゃんと肉付けがされてゐる。だから映画を観てゐる時には左程感じないでも映画を観た後で、我々はその中に秘められた諷刺を感じ、憂鬱に襲は

れ、人生のペーソスを感じ、思索の中に追ひやられるのである。然もフェエデはクレールと異つて、諦観によつて来る一脈の溫みを感じられる。これは又「女だけの都」が諷刺を含め乍ら、而もその本質に於ては、「外人部隊」「ミモザ館」と何等異つてゐない理由である。

こゝで一寸一言しておくが、フェエデが諷刺の意圖を含めた映畫を作つたのはこれが始めてではなく、一九二八年かにフランスで作つた「俄紳士」は政治家を彌次つた諷刺映畫で、これは相當な評判だつたとの事である。次に私はフェエデとデュヴィヴィエとを較べて見たい。この頃私はデュヴィヴィエの「我等の仲間」を観た。何といふ夥しいワイプとオーバーストップの氾濫であらう。何といふ伏線の張り方の餘りにも眼につく事であらう。映畫の技術的技巧を餘りにも驅使しすぎたこの映畫を観て、私は、フェエデの技巧のない、それでゐて美しく自然なあの映畫的展開を思ひ出したのである。何等技術的技巧に囚はれる事なく、而も一つのシーンは自然に他のシーンを生み出して、何等の澁滞もなく畫面を展開させて行くフェエデの腕は素晴らしい。技巧も適度に用ふれば効果はあるが、「我等の仲間」に於いては最早それは煩はしく感ぜられる。

然し乍らこの映畫が一應私を樂しませてくれた事實である。だが何故にあのやうに後味が惡かつたのであらうか？

所詮デュヴィヴィエは一個の俗物にすぎないのであらうか？ 彼は現實を描く。然し彼の描いた現實の中味は何だ！ それは殆んど空虚に等しい。彼は眼に觸れた現實を捉へあげては、これを巧みな技巧で仕上げる單なる映畫製造者にすぎないのではなからうか？ フェエデが心を通じて人生を描くに反して、彼は眼を通して人生を描く。「我等の仲間」を観た後の後味の惡さは技巧の濫用と、人生の描き方の淺薄さによるのだと思ふ。

最後に私はシャルル・スパークに就いて少しく述べこの稿を終り度いと思ふ。

我々がスパークの名の聞くやうになつたのは極く最近の事である。「外人部隊」のシナリオを書いて成功をさせた彼は、その後「ミモザ館」「戦ひの前夜」「地の果てを行く」「みどりの園」および「女だけの都」「我等の仲間」等のシナリオを書いたのであるが、その何れにも、各々の監督の本質をよく理解して素晴らしい腕を振つたのである。「外人部隊」は一九三三年の作品であり、それ以前には殆んど仕事らしい仕事をしてゐなかつたらしいとの事であるが、今や彼はフランスに於けるシナリオライターの第一人者であり、彼に比肩する程今活躍してゐるシナリオライターは一人も居ない。

彼はフェエデの爲に「外人部隊」「ミモザ館」「女だけの都」を書き、デュヴィヴィエの爲に「地の果てを行く」「我等の仲間」を書き、マルセル・レルビの爲に「戦ひの前夜」を「マルク・オレグレ」の爲に「みどりの園」を書いた。これ等の作品を通じて、私は彼の本質にまで論及し度いのだが、何の作品に於いても、スパークの個性よりも監督の個性が幅を利かしてゐるから——これはスパークが監督の本質をよく呑み込んで、その監督に適するやうなシナリオを書く事に依る——これは私にとつて仲々困難な事であるしするので又の機會に譲らうと思ふ。

私は幸ひにしてスパークの書いたこれ等の七つの映畫を何れも見てゐるのだが、スパークの本質はフェエデと共力した時最も發揮されてゐると思ふ。若しスパークが共力しなかつたら、あの素晴らしいフェエデのカムバックも實現したかどうか疑はしいといふ事は何人も認むる所であらう。

フェエデは今スパークを離れて、英國で、デイトリツヒとロバート・ドーナツ主演の「武器なき騎士」を撮り終へたさうである。これは梗概を讀んで見ると大衆小説らしいが、スパークを離れたフェエデがこんな題材を取扱つて何んなものを見せてくれるか一日も早く観たいものである。

卯月抄

佐口透

ゆきずりの遇ふ隙まともしみ黙もだせりしきみがころは忘れざるらむ

きみ去りしむなしきころのかなしみはたゞになげけどやすけきものか

ひとりゐて美うましき容かたちおもひをりいましとよばふすべあらなくに

をみな子がやさしきなさけをこめたりけむかそけき胸のいきを愛かなしむ

詠草

村上春次

亡き母をしのびて

亡き母の縫ひてたまひし丹前をわが手にとれば涙流るる

そのかみに母の歸りの遅ゆふへかりし夕はひとり門かどに立ちにき

光葉

西野一良

吹く風の河岸かしの光葉てりはをかへしゐるをすがしと見つつわが歩み來ぬ

青葉風光りつつ来る川上や斑雪^{はなれ}の山は陽にかすみたり

田の畔に汗をふきつつ見る空や桐の喬木の花匂ふなり

春より初夏へ

運動場の青草の伸びが目にしるし春の光を浴びてわがゐる

雨蛙鳴きやみしこのむなしさに赤き屋根瓦の陽を見つめゐる

飛行機の爆音がひく棚曇り重圧感を背にうけてをり

うたゝねの眼にはまぶしき青空や榎の梢^{えん}の芽ぶくかがやき

今はなき下宿の主人を思ふ

銀行員といふこの主人が植ゑおきし何の盆栽ぞ芽ぶきそめにし

人死にて女ばかりなるこの家に鉢の新芽のいたく伸びたり

五月

館

廉

苗代の隣は馬のしぶき哉

五月風馬小屋のある場末哉

五月雨よ我靴音を残し行く

若葉月角の酒屋の屋根高し

猫猫を柿の木に追ふ青嵐

石見ゆる流れ木ぐらしあやめ草

性格の亡霊

—手記—

星野邦彦

Y君。

突然こんな手紙を書くことを許してくれ給へ。此の手紙は、本當は君自身に當てゝ書いたものではない。言はゞ僕の魂の中に喰ひ込んで來てゐた君の幻に對して書いたものだ。一時僕の性格の中に根を張つた君の性格の亡霊に對する反抗と懺悔の記録である。

今から思ひ出すともう二年も前だね。僕は本當に希望に胸を躍らせて高等學校の門をくゞつたものだ。僕はあの入學したばかりの頃の氣持をよく覚えてゐるよ。それは殆ど知覺し得ない嬉しさと希望であつた。

僕は偶然にも君と同じ教室に机を並べて三ヶ年を送る事になつた。僕はすぐに君と親しくなつた。君は始めて見た時から外の連中とは随分違つてゐた。何處となく深い確信と高い理想を持つてゐる事が君の凡ゆる生活態度によく現はれてゐた。而し君は寮に居たし僕は家から通つてゐたので僕と君との友達としての交りはさう深いものではなかつた。極く漠然と僕は君を尊敬してゐた。二年になると君は寮を出て僕の家の附近に下宿することになつた。そして僕と君の交りは急速にその親密さを増して行つた。

僕はこの手紙を書き續けて行くに當つて先づ僕の性格に就て一言せねばならない。

僕は非常に感情的な男だ。パトスの男だ。ロゴスの性質は餘りにも少く、そしてその極く僅なロゴスも屢々パトスの前には影を潜めてしまふのだ。それに僕は意志が弱いのだ。眞剣な行爲をなす場合、私を驅つてそれを爲さしめるものは、私のパトスである。その行爲に對する殆んど無批判的な感激の爆發であつた。それは決してロゴスではなかつた。平靜に理性的に爲さんとする行爲そのものを批判した後に行爲する事は俺にはとても出来ないのだ。批判の後にその行爲の性質及びその行爲の後に豫感される結果を知ると、もう俺の意志はその行爲に對してどうにもならないのだ。それ程俺の意志は弱かつたのだ。

所が君の性格は僕のは全然兩極端をなしてゐる。君は餘りにもロゴス的だ。餘りにも知的であり、冷靜であり批判的であり、そして君の意志力は何物に依つても動かされない程に堅固であつた。僕は今まで決して君が無批判的なパトスに依つて動いたのを見た事がない。君は凡ゆる場合に冷靜な知的判斷を下しそして君からパトス的なものを全然感じられないのだ。

× × ×

僕は高校生活の出發に於て既に誤つてゐた。僕は入學した時、單なる嬉しさと希望以外に今後三ヶ年の生活に對する何等の豫備智識も、心構へも信念も持つてはゐなかつた。實際さうであつても仕方がない程私は年が若かつたし、我儘なお坊ちゃんであつた。

既に高校生活の大半を終へてしまつた今、僕は生き方に就いての確乎たる信念を持つ事餘りにも遅かつたこと、そして餘りにも長い時間にわたつて放縱な生活の中に貴重なる私の若さとエネルギーとを濫費したことが残念で堪まらなく思ふのである。

僕は夫を高等學校の傳統のせいにした。實際高等學校には矛盾した誤れる傳統は多々ある。僕は傳統を

のゝしつてみた。

併し畢竟それも利己的な考へだ。矢張り君の言つたやうに僕の誤れる高校觀であり、無意味な感激と無批判とから來るものであつた。

× × ×

徒らなる感激と無批判の生活の中に僕は一ヶ年を終へた。そして君が下宿をしてから君の實際の生活を目の當り觀るやうになると君は僕にとつて實に驚異的存在であつた。

殆ど機械的のままで思はれる君の規律的生活、冷徹なる批判と深遠なる反省の中に於ける君の讀書と哲學的思索、豊富なる文化的教養、現實生活に於ける功利的のままで思はれる程の君の節制、就中君をして之等凡てのものを爲さしめる、何ものにも打負かされぬ君の知的意志力の強さ——パトスに負けざるロゴス、否君のロゴスは常にパトスに先立ち之を支配してゐたのだが、——その君のロゴスの性格であつた。それこそ僕にとつて驚異的存在であつたのだ。

僕は心から君に敬服し感嘆した。

そしてその敬服と感嘆とは纏て君に對する讚美となつて行つた。僕は又しても、僕の無批判的性質で以て君を讚美し始めたのだ。

君の生活態度を親しく觀察すればする程、君の性格は益々僕にとつて驚異となり讚美と變つた。やがて君の生活態度は僕にとつて殆ど一つの典型となつてしまつた。

併し僕はそれを意識してゐたのではない。僕は無意識の中に君の生活を模倣し始めてゐた。そしてそれを同時に僕が全然氣附かぬ中にも君の理性的性格は僕の魂の中に深く根を下ろし、僕のパスト的性格の中

に於て理想化され偶像化され、幻影化されつゝあつたのだ。

僕はその頃、目茶苦茶に君の批判的な生活態度を模倣したい衝動に驅られた。そして模倣し得るものと思つてゐた。

併し決して眞の君の生活を模倣する事は出来なかつた。皮想的に模倣し得たと思つたものも皆出鱈目だつた。君の生活に於ては偉大なる存在意義を有してゐた君の態度も僕の模倣に於てはその凡ゆる光輝を失つてゐた。

その間にも君のロゴスの性格は無意識の中に僕の魂の中にざり／＼と根を張り續けてゐた。僕はそれを少しも氣が附かなかつたのだ。そして又同時に僕自身の個性と我は次第に失はれ蔽はれて行きつゝあつたのだ。それにも僕は全然氣が附かなかつた。

君への模倣は何等確乎たる根據を持たず衝動的で無批判的な私のパトスの生活態度に於ける單なる眞似であつた。私自身の中に歪曲され幻影化され、更に偶像化された君の亡靈を追ひ求め追従してゐるに過ぎなかつたのだ。そして私が意識せざる中に私自身は失はれて行つた。

僕は君の模倣に於てさへ不完全であつた。そしてその不完全なる事は僕自身がつまらない男であると思ふ考へに變つた。何故なら君の幻影は僕の魂の中で理想化され偶像化されてゐたからだ。併し依然として無意識の中に於てゐあつた。

三學期になると再び君は寮に入つた。君と離れてゐると、例の如く僕のパトスは醒めて來た。現實に於ける模倣の對象を私の側に失つた私は現實的にはもう君の模倣ではなかつた。僕は自己を確り把握してゐると信じてゐた。僕自身の理想とその理想に向ふ信念と生活態度とを持つてゐると思ひ込んでゐた。

そして僕が自分自身を見失ひかけてゐる事に少しも氣が附かなかつた。

Y君。

漸て實に奇妙な現象が起つて來たのだ。

僕は君を恐れ始めたのだ。殆ど無意識に近かつたが僕は何時も君の冷い批判の眼を私の背に感じ君から受ける不思議な壓迫感に苦しみ出した。

僕は何かよく分らなくなつて來た。

僕は君の何時も僕を注目し批判し嘲笑してゐる様な冷い眼と言葉が暗黙の中に僕に注がれてゐるのをふと感じては慄然とした。實際時々君の言葉は僕の肺腑をめぐり僕の心臓につきさゝつた。時々君が僕の家遊びに來たりすると僕は妙に不愉快になり、君が恐ろしくて仕方がなかつた。

僕は君の態度が癪にさはつて來た。君から受ける壓迫感と冷い嘲笑的な眼をはねかへさうとして君を輕蔑しようと徒に努力した。僕はしばらくの間殆ど知覺し得ない中に君の冷い眼と激しい鬭争を繰返して來た。

Y君。

その中に又しても奇妙な現象が僕に起つて來た。それは二ヶ月程前の事だ。

僕は何か自分自身を確り掴んでゐない様な氣がした。僕は自ら自己の理想と信念と生活態度とを持つてゐたと固く信じ切つてゐたのにも拘らず、それが疑へて來たのだ。

僕は自己喪失の状態を意識し始めた。

自己の理想や信念の如くに見えるがどうも本當は自分自身のものとは思へず何だか借りものゝ様な氣持

がしてならなかつた。私の生活態度に至つては、實際私自身のものなのかさうでないのか判断がつきかねた。

・私が眞剣に冷靜に考へると僕の理想と信念はすぐ様ぐらつき出し、影が薄くなり殆ど消えかゝつてしまふのであつた。

僕の理想と信念が幻影である様に思はれて來た。自分自身が幻か幽霊の様に思はれて來た。

そして、私がその事を判つきりと認識した時に私は深い悲しみと絶望のどん底に蹴落された。

Y君。

僕は亡靈に取憑かれてゐた。

そして私の傷ましき如何なる努力にも拘らずその亡靈は私に付き纏つて離れず、私は依然として幻影の奴隸であつた。

而しさう思ひつゝも、私の理想と信念とが何者かの幻影であると眞剣に疑ふ事は嫌であつた。

何うしてそんな事が出来ようか。

確かに僕の理想と信念とが幻影であり自分のものでないと分ればもう僕と云ふ人間は存在せぬ事になつてしまふからだ。

自己の肉体を所有しながらも自己自身でない事を知つた時に、どんなに大きな悲しみと苦しみと絶望がやつて來るか、君には分るまい。

そして私自身が實際私自身のものであると信じ込もうとする心と、否、それは幻影であり借りものであると懷疑しようとする心とが私の肉体の中で烈しい血の様な争闘を繰り返した。

併し如何なる努力も、未解決と絶望と諦觀へ續いてゐるのみであつた。私はどちらとも決定する事は出來なかつた。

激しい魂の苦悶と闘争に倦み勞れた私はもはや何ものをも爲さんとする凡ゆる積極的なアムビションを失つて、怨靈に乗り移られた人間の様な宿命觀的無希望状態へと落ちて行つた。

諦觀は靜である！

あきらめは寂である。

無希望は死であつた。

私はもう何もしたくなかつた。何も考へたくなかつた。私にはもはや、その幻が何であるかを見極め様とする勇氣もなく、宿命の軌道から飛び出す力もなかつた。私が考へれば考へる程私は益々絶望の深淵にはまり込んで行つた。私の爲し得る事は唯凡ゆるものを忘れる事であつた。そして、私の先天的性格であつた無批判的パトスも失はれて行つた。

×

×

×

Y君。

それでも僕は君が恐しかつたのだ。凡ゆるものを忘れ様と努力しても、君の冷い批判的な眼だけではどうしても忘れる事が出来なかつた。君を恐れ、君が側に來ると苦しくて堪まらなかつた。

何だか、自己自身を失つた亡靈の如き私の肉体を君一流の嘲笑的な眼で眺められてゐる様な氣がして僕は恥しく、それ故に君が恐しかつた。

何故そんなに君を恐れたのだらう。

僕は何も君を恐れねばならぬ理由を持つてゐないのに。

何故君のあの冷い眼で見られると恥しく思つたのだらう。

僕は何も君に對して恥づべき理由を持つてゐないのに。

諦観と無希望の中にも僕はこの問題を解かねばならなかつた。

x x x

Y 君！

所が偶然にも僕は終に一切の解決とその亡霊の正体とを掴へる事が出来たのだ。

Y 君。

君はその亡霊の正体は何だつたと思ふかい。それは君さ！ 君だつたのだ！

いや、君自身ではない。僕のパトスの性格の中に幻影化された君の性格の亡霊だつたのだ。こんな馬鹿げた事があるものと君は云ふだらう。而し事實なのだ。

問題はこんな簡単な事だつた。

僕の盲目的パトスは、僕の魂の中に理想化された君の幻影を築き上げたのだ。そして全然僕の氣附かぬ中にその幻影は僕の自我を追ひ出して僕の亡霊となつてゐたのだ。

僕にもプライドと微な競争意識があつた。それ故僕の魂の中に偶像化され理想化された君と讃美し模倣した事に對して、勝手に僕が君の眼を冷い嘲笑的なものに感じ苦しみ恐れたのだ。

僕が恐れてゐたのは君自身ではなかつた。僕の肉体の中に幻影化された君の亡霊に對してゐあつた。僕がこの事に氣が附いた時に、心から大聲を上げて笑つた。

そしてその苦惱の後の安堵の哄笑と共に君の亡霊はパット消えた。幽霊と云ふものはその正体を見届けた瞬間にすぐ消えるものだよ。

僕は再び昔のパトスの男に返つた。

君のロゴスの亡霊は消えてしまつた。

Y 君。

大部長く書いて來た。君は僕に對して憤慨されるかも知れない。而しもう少し我慢して聞いてくれ給へ。僕は今、自己自身を見直し、自己のパトスの性格を冷靜に反省し批判せねばならぬ時にある。

僕は此奴が堪まらなく忌々しい奴に見えて來た。而しこの性格こそ宿命的に私に植ゑ附けられた運命であつたのだ。そこにこそ、私自身の理想と、その理想に向ふ信念と生活態度が生れて來ねばならぬと思ふのだ。

俺は確に無批判的な男であつたし、悔恨は俺の大嫌ひなものであつた。悔恨する事は過去の自己を失ふ事であり、それは又現在の自己を失ふ事だと思つてゐた。

私は今まで君に對して随分失禮な事を書いて來た。君はきつと怒るに違ひない。

今私が過去の自己を反省し、自己の無批判的パトスの性格を懺悔するのは、君に對する當然の義務である。その爲に私は谷川徹三氏の「感傷と反省」の中の文章をお借りしたいと思ふ。

その中の「憂鬱の淨化」及び「雨の靈魂」の二節は私にとつては實に神の裁斷にも等しき威力を以て私を鞭打ち、自己のパト斯的性格を客觀視せしめ、私に自己の批判と反省の契機を與へてくれたものであ

る。

谷川氏は次の如く云ふ。

「私は餘りに屢々悔恨の淵に徘徊した。時にはその淵に身と心を溺らさうとした。然し悔恨を「二重の悪」としたかのよき哲人の冷徹せる認識への欲求はなくとも息づまる靈魂の苦しさは徒なる悔恨の甲斐なきことは私にも分つた。「一切の悪は弱きことより来る。」この言葉を私は私自身の体験に依つて證したと思つた。私は強くならうとした。そして私は強くなるためにはメフィストに仕へてもよいと思つた。メフィストの悪は弱きより生れる悪よりは悔恨の無いだけでもよいと思つた。」

更に谷川氏は言ふ。

「私の生活はたとへ動かざる運命ではなくても、動き變じ展開する中にも抜く可からざる運命である。それは自由の中にも見らるゝ必然である。それ故にその必然を必然と見る所にかへつて自由が存するのである。——私はかく觀る事に依つて嘗ての私の焦躁と悔恨とを克服し私の弱さを弱いながらに強くし私の乖離をその姿に於て意義づけた。現實にのみ即すればその觀照の中に於ては、凡ゆる罪惡をさへ客觀的存在として許す事が出来たから私はその立場に於て私の弱き所惡しき所をも私の強き所よき所と共に肯足し得たのである。之は確に一面の正しさを持つてゐた。私の自覺的反省はこゝに始まつたといつてもよい。併しながらその態度の一面の正しさにも拘らず他面に於て私はあやまつてゐた。私は自分の内部を靜かに凝視する事に於て凝視してゐると信じながら、實はその中に溺れてゐたのだ。私は觀照と認識との興味に於て私の出發点であり云はゞ終局の目的である倫理的要求と精進とを、ともすれば忘れ、その要求と情熱との弛緩から私の思索そのものをさへ或る時は打ち棄てた。現實の多様とそのそれの意味の觀照とに

於て、私は一人の現實肯定者——弱々しい神祕家になつてゐた。そこに感情惑溺、意志喪失現世行爲の蔑視、夢と陶酔とが一つの根據と確めとを得た様に見えた。かつての幼く併し眞實な嘆きは他に委せられ、見えざるものに向ふ憧憬は現實の懈怠の中に埋れ、詩と獨想に於てさへ常に享樂の慾望をその中に孕み幸福への想ひに甘い夢をゆめみてゐた。現世をあるがまゝに肯定する事は畢竟現世を神祕の影とする事であり神祕の影の中に意志と精進とを否む事は溝の中へ身を置くに異ならなかつた。」更に續けて言ふ。

「現實の種々相と私の内部の多様とに對する理解は常に一面を抽象し強調する獨斷を脱する事に於て、思想と生活のドン・キホーテとなる事から私を救つても、結局私を一人の氣輕なハムレットとしたに過ぎない。私は行爲者の意志的統一を失ひ、鋭くのみあつて深くない悟性的批評家となつた。一方現實的神祕家であつた私が他方悟性的批評家となつた事は、その何れもが果敢い行爲者でない事に於て一致するのみでなくそれが共に意志喪失なる方向に於て一致するのである。」

以上の文章は餘りにも私の性格の弱点を指摘してゐる。更に谷川氏は、何の容赦もなく神の批判と裁斷とを私に加へる。

「意志喪失、現實蔑視——現實安住とはまことは現實蔑視である——耽美、享樂、感情、惑溺、かゝる傾向は私の憂鬱を私の生活の表面へひき出した。私の憂鬱は内部に眼を向けぬばかりでなく、かつては感傷の風景の中に美しくしばだゝいた眼も今は街路と夜の燈火と眩惑する色彩の中に淺く濁らされた。私の憂鬱は近代頹廢の身振りを持つに至つた。而も私は現實の觀照と體驗の名によつて又一つには再び自己憐憫と漂白とに陥る事の嫌はしさから強ひても自己とその立場とを肯定した。こゝに私の憂鬱は全く新たな根據を持つたのである。私の憂鬱はかくして汚れた悔恨の憂鬱がそれを忘れんとする享樂に依つて憂鬱を二重

にした如く浅く濁つた憂鬱はその没藥——感覺の麻醉に依つて醒めての後の憂鬱を一層浅く濁らせたのである。」

實際僕がパトスと思つてゐたものは實はミトスであつた。感覺の麻醉であつた。

私の感情的性格はかくして私の罪と惡との證據である。

今や私は、自己の性格を反省し批判せねばならない。そして私は谷川氏に依つて二つのヒントを與へられた。

一は自己の内部を凝視する事である。自己の魂への沈潜である。そしてそこに於て私は私の内生活の統一の方向を認識し得るであらう。それは私の行爲に現はれては一つの確乎たる信念となる。他の一は孤獨である。孤獨は幸福への憧憬の中にも、浪費と放散とを慎む。孤獨は屢々幸福へのあこがれを捨離する。孤獨は「何ものにもまさつて己が心を操守する」ものであり、己が心を守る事はその方向に於てより内なるものへのつながりに一層強くつながる事である。このつながりに於て孤獨は獨自の幸福を見出す。その幸福は外へのつながりに依る果敢なくも脆い幸福ではなくて一層確に一層甲斐ある幸福である。言はゞ孤獨は幸福を捨離する事に依つて幸福を得るものである。恰も頽廢が幸福への憧れに魂を浪費し放散して却つて幸福を失つた様に。

孤獨はともすれば幸福への憧憬に急なる餘り思慮なくも自己の魂を浪費し放散する頽廢へ墮せんとする私のパトスの性格にとつて一つの大きな制約である。

制約とは不合理たるを防いで合理へ赴かしむるもの、即ちロゴスである。

斯くして私の餘りにも放縱なるパトスはアウフヘーベンせられ、私の魂は辯證法的に統一せられ發展せ

しめられねばならない。

そこにこそ、餘りにも感情的なる性格を運命づけられた私自身の人格の成長と人世觀がある様に思ふ。

Y君。

僕は餘り長く書き過ぎた様だ。もうペンを擱かねばならない。君がこのつまらない懺悔をこゝまで聞いてきてくれた事に對して僕は深く感謝する。

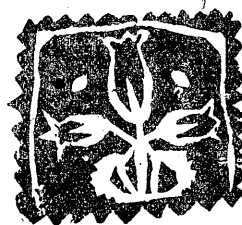
更に又君が自己喪失と感情惑溺及び宿命觀的絶望の状態にあつた私自身を批判し反省する契機となつてくれた事、そしてそれにも増して、誤れる高校觀から、高校三ヶ年を否、爾後の一生を醉生夢死するであらう事から僕を救つてくれた事に對して僕は感謝の言葉を知らないのである。

× × ×

「思慮ある功利」よりもむしろ私は「純眞なる頽廢」を望む者である。

之が私の魂の中に根を下ろした君の亡靈に對する感謝にして且反抗の言葉である。

そしてたとへ頽廢の淵に墮するとも絶對に「思慮ある功利」を許し得ぬのが私の宿命的業であるのだ。



四高文化の問題と報告

四高文化事業一覽 (第一學期)

文 藝 部

- 四月十六日 新入生歡迎會
四月二十八日 「蒼氓」批評會
五月三日 トーマス・マン、「トニオ・クレイゲル」批評會
五月十日 映畫研究会獨立
五月十一日 ゴーゴリ「檢察官」朗讀會
五月二十一日 ハウプトマン「ソアーナの異教徒」批評會
六月十日 デード、「背德者」批評會
七月五日 北辰會雜誌第百參拾八號發行

講 演 部

- 四月十三日 新入生歡迎會
四月十七日 マックス・ウェーバ、「職業としての學問」座談會
四月二十日 「倫理學の根本問題」木場教授講義
五月一日 「日本道德論」座談會
五月七日 「倫理學の根本問題」講義
五月十一日 同
五月十六日 近縣中等學校辯論大會
五月二十一日 犬丸教授「近世日本經濟思想」講演
五月二十九日 文理大教授福島政雄氏「祖聖親鸞上人の求道」講演
六月四日 「倫理學の根本問題」研究
六月五日 座談會「本居宣長」について

六月十日 向居教授「愚管抄」講演

映 畫 研 究 會

- 四月二十一日 「蒼氓」鑑賞券發行
四月二十八日 「蒼氓」批評會
五月四日 「女だけの都」科學者の道「鑑賞券發行
五月十日 映畫研究会獨立
五月十二日 「女だけの都」「科學者の道」批評會
五月十二日 「目撃者」かりそめの幸福「鑑賞券發行
五月二十日 「描かれた人生」鑑賞券發行
五月二十五日 「吾等の仲間」鑑賞券發行
六月三日 右批評會
六月十四日 「樂聖ベートヴェン」鑑賞券發行
六月十五日 「裸の町」鑑賞券發行
(六月二十日現在)

音 樂 部

- 五月十一日 レコード・コンサート
「ウイリアム・テル」：ロンドン・フィル
ハーモニック管絃團「ベートベン第三十一番」絃樂四重奏。ブツシュ・クワ
ルテット「未完成交響曲」：ウイン・フ
イルハーモニック演奏
春季演奏會
五月二十九日
六月三日 レコード・コンサート
「ベートーヴェン」交響曲第七番・紐育
フィルハーモニック第八番（ワインガ
ルーナ指揮）その他ピアノ獨奏曲（コ
ルトー・カザルス）

校内文化の爲に

城 丸 章 夫

今年の一年生の人達がボート大會の歸りに尻に石油

罐を下げて街の中をストームして歩いたと聞いて僕も

なか／＼愉快なことをやるものだと思ひした。須らく元氣は地上に溢る可しだ。しかしそれが高校生活のすべてではなからう。あくまでもそれは生活の溢れた部分であつて、それでもつて自己の無内容と空虚の裝飾としてはならない。眞實に高校生らしい元氣が見せたかつたら、眞實に内に充實するがよい。先輩の外形だけを見習つてすまさうとはケチな根性だ。西田幾多郎さんは學校を追出される程暴れたが、するだけの事はしてゐられた。秋の五十周年記念祭には是非お呼びしたいと思ふが、僕達のこの無氣力と無内容にはきつと泣かれるだらう。僕のやうな者が三年生になつて、さて何かを書いて見ようとする先立つものは矢張りこの自己の無内容に對する驚きである。と同時にそれにさへ氣付かずに毎日を無爲に送つてゐる人達に對する物足りなさである。靜に省るがよい。僕達がかうして毎日吞氣に暮して居れるのは直接には僕達父兄の汗の結晶であり、社會的には下積みとなつて食ふや食はずにゐる同胞の生命の結晶なのだ。國家も亦僕等に期待して支拂つてゐる犠牲の如何に大きいかは今更言ふまでもなからう。さうした人々の聲が直接に耳に入らないからと云つて、それに對して無知と厚顔とを

表白してよいものであらうか。文化の影や今何處と歌ふ事によつて安價なセンチメンタリズムが生れて來てはならない。文化の影さへ無い所にも再び文化を築き上げる所に青年の意氣と感激はあるのだ。安價なセンチメンタリズムを求める爲ならわざ／＼高等學校まで來る必要は斷じてない。何故なら現代の日本は世をあげて末梢神經の興奮が壯士の稚氣のセンチメンタリズムに酔つてゐるのだから。超然を口にしながら超然でない證據は秘かに此のセンチメンタリズムと握手してゐる事だ。僕に言はしめれば超然とは「常識よりの超然」だ。時代を越えて時代を批評しその進むべき方向を指示する所のない偉大な精神だ。常識はその時代一般の思维様式として自らの存在理由を持つてゐるが多くの偏見をも内に含んでゐる。コペルニクスはたゞ常識に反抗してのみ地球が廻轉する事を主張した。眞理は此のやうに常識を越えた一面をもつてゐる。常識の中から不用の部分棄て去つた純粹品である。そして何を棄て去るかに哲學や世界觀と言はれるものが生れてくる。即ち常識よりの超然とは何等かの思想をもつ事に外ならない。この爲に僕等のなすべき事は二つある。一はよりよき常識の擴充であり、一はその統一

原理としての哲學又は思想と呼ばれるものの獲得である。そしてこの二つは相互依存的に僕等の教養を高めるのだ。文化に生きるとはこの事である。現代の如き社會機構そのもののもつ矛盾が重苦しく僕等の上にのしかゝつてくる時、野蠻人の如く振舞ひ、街を睥睨して歩くのも確にその存在理由をもつてゐる。だがそれこそ意氣と感激の喪失者でなくて何だ。

此處で僕は話を別の方面から進めて見よう。嘗て僕等は深い共感をもつてアンドレ・ジイドやドストエフスキーをよんだ。燃え上る知識欲や深い孤獨とを感じ乍ら。しかるに其の後ジイドは轉向してソビエツトへと旅行した。この事については今年の二月號？の文藝春秋に中條百合子が書いて居るさうだが、不幸僕は未だ目を通す機會をもたないので何とも云へないが、僕自身のジイド解釋はかうだ。彼は早くから社會的關心をもつてゐたのだが、自己の階級的地位とプロテスタント的教養とが彼に様々な觀念的擬態をとつて妨害する。殊に多くの場合彼は社會を感性的に知つてゐるのではなく知識として知らねばならなかつたといふ点に僕は理解の鍵を求める。これは彼の友人で市役所の

下ツ葉であるシャルル・ルイ・フィリップが大膽に「僕の氣持ですか？僕は階級意識に刺戟されてゐるので。……畢竟これまでの文學上の精神的危機とはブルジョア階級の精神的危機ではなかつたらうか」と言つてのけるのに對して、わざ／＼「アフリカまで旅行しなければ自己の意識を表白し得なかつた人間との相違である。知識として社會を受けとる所に彼の知識的放浪の必然性がある。彼にとつては知るといふ事はニイチエ的超克でもあるのだ。進展して止まぬジイドの思想の原動力となつたのはこれだ。しかしかくの如き超克が純粹に行爲なき人間の場合それは徒な觀念の遊戲に終る。此處に彼の近年に於ける實踐への欲求が生れるのではなからうか。發展して止まぬ西田哲學等も何かかうしたものがあるやうに思へて仕方がない。行爲を失つた人間はたゞ自己の知性を高める事によつて、飽くまでも文化の面にシャブリつく事によつて、最後に實踐にまで飛躍するより外に能はない。ジイドの「偏見なき精神」は語つてゐる。「完成に努めよ。偉大な精神は凡庸を旨とする」しかしこの完成は決してデイレクタント的完成ではない。それは彼のゲーテ觀によつても明かだ。「併し乍らゲーテのかゝる忍耐は

今日私にはやゝ危険に思はれる。萬物の理解といふ大なる欲求により、彼がその叡智と胸襟とを披く限りに於いては問題ではない。併しそれが平穩と安易とを冀ふことにあるのならば、こゝにニイチエの彼の鋭い態度はそれだけ私の眼には偉大となるのである。「一面私は精神の制動力を信頼してゐる故に己のもののしよと心構へたもので役立て得る自信のあるものは如何なる分子をも抛棄しようなどといふ意志は毫ももたない。精神の混沌たる要素は明日に於いて最も善きものたるであらう。」彼はブルウストを評して「微に入り細に互る藝術は精神を愉しましめるのみならず更に精神を教へることが出来る。けれどもこれは準備的な仕事に過ぎない。そしてこんな所に踏止まつてその上に出ようとする藝術家は既に生活し得ない人間である」と言つてゐる。その点ジイドの藝術はすばらしかつた。だがしかもなほ「私は嘗てどんな場合にも自己の左袒し得べき最も有利な道を明かにし識別し得たと信じてゐる。所がこの有利な道を殆んど歩いた事が無いのだ」と言つてゐる。そして近頃のジイドはこの道を歩き出したのであらうか。ファンズムの大波が知識としての社會から感性の領域にひきずり込んだのであらう。

らう。彼は今や「ある種の藝術家にあつては、いかにその生涯を擡げて致々たるものがあらうとも、生活は飽くまでも作品と截然たる區別をもつてゐる。然るにゲーテにあつては絶え間なき滲透である。彼の詩の何れをとつて見るもそれは一の行動である。即ち逆にゲーテの全生涯は我々にあつては恰も一個の藝術品、彼の最も美事な作品中の一として映するのである。」をそつくり自己への頌歌となしつゝあるのであらう。僕はこゝに凡庸な精神、偉大な常識の一つの姿を見るのだ。

かうしたフランスの老人に對し、僕は日本の青年を並べよう。パリで公開したら好評だつたといふ「情熱の詩人啄木」ではなくて時代に對して「思想する啄木」である。晩年の彼は「君、僕はどうしても僕の思想が、時代より一歩進んでゐるといふ自惚を此の頃する事ができない」と誇らしげに言つてゐる。自然主義やアナキズムをいち早く破棄した彼の現實社會に對する態度はかうだ。「明日の考察——これ實に我々が今日に於いてなすべき唯一である。さうして又總てである。」即ち我々の理想は最早「善」や「美」に對する空想であるわけではない。一切の空想を峻拒して、

其處に残る唯一の眞實——『必要』！これ實に我々が未來に向つて求むべき一切である。我々は今最も嚴密に大膽に、自由に『今日』を研究してそこに我々自身にとつての『明日』の必要を發見しなければならぬ。必要は最も確實な理想である。」と。彼はかくして『今日』の科學的研究を主張してゐる。(時代閉塞の現状より引用)

僕らは現實の困難に出會つた場合思はず躊躇し足踏みする。無知なるが爲である。知るといふ事はそれが止揚される可能性をもつといふ事だ。こゝに啄木の達した思想の力強さを見る。科學的精神の強調の何處に嘗ての感傷があらう。たゞ／＼行爲を失つた人間のみがこれを觀念の遊戲に終らせる。僕らが學校といふこの社會的には抽象され、行爲の封鎖された中に住む事が、僕らを驅つて往々あくことなき觀念の遊戲に陥らしめる。これをさけて、たゞ僕らの良心に忠實であるには科學的精神とヒュ머니スティックな情熱とを失はない事だ。社會的に抽象された僕等が恣意な自己満足に陥らない爲には眼に見えないけれども而も實在する多數の人間の存在を信する事だ。

知るといふ事は單なるあれやこれやの羅列ではな

く、あれやこれやの間に内的連關を見出し、そのものの本質にまで分け入る事である。絶えざる全体性と眞實性への要求が、僕らに眞理をもつてくるのだ。でなかつたら僕らは混亂を神にまで高め、矛盾を聖にまで高めて平然として居る事になるかも知れない。現代文化の著しい特徴としてこの本質と現象との混亂があるやうな氣がしてならない。ドストエフスキーの復活にしても主としてかゝる面の強調ではなかつたであらうか。「生の不安」は實は生そのものから提出されたのではなくして、見通しと據り所を社會的に喪失したインテリゲンチヤのモノモノしい物狂ひに過ぎなかつたのである。

以上主としてジイド及び啄木によつて現代教養の精神、文化に生きようとする者の精神をのべてきた。次に再び僕達主体の問題に移らう。

常識の擴充とその相互依存の關係にある世界觀としての思想の確立！常識を越えた常識の確立！これが僕等の任務である。河合榮治郎氏は社會的認識を打すてて先づ世界觀の確立、マルクスを讀まないでマルクスをも包攝する思想の確立を要望される。現代に於

けるその意義を理解せずに古典を讀めと言はれると同様交互關係を忘れたナンセンスだ。

今の青年の頭は多くは混亂してゐると言はれてゐる。硬化した頭ならとに角、僕はそれは青年の批判力や思考能力の喪失を意味するものではなくて、現實の社會の直觀像それ自身が混亂してゐる事を意味し、逆に青年に否でも應でも批判と思考とを要求させる根元の力となるものと思ふ。近頃耳にする青年論や學生論が口をそろへて批判力を養へとか、自己の理想を確立せよとか知能の低下を防げとか、人間性や眞理への情熱をもてとか言ふ事を言つてゐるけれど、これらのあるものは學生の研究心の原動力たる現實の世界の矛盾、學生自身の立場の矛盾をことさらに被ひかくし、ディレクタント的勉強を奨励することによつて、かへつて反對の結果をひき起してゐるのではないかを疑ふ。河合イズムの如きがその例でなからうか。僕らは飽くまでも客觀的知識と認識の把握に努め、その混亂の眞只中に、あれかこれか、と問ふ時、何れが眞であるかを知るのだ。僕らがフアシズムを排撃するのはそれはあれかこれかの問の一方にさへ上りえぬ非文化であるか、もしくは、その一方のみの誇張によつて結局

現實をゴマ化さうとしてゐるが爲に外ならない。政治の悪用とはこの事を指すのだ。現代に於いては眞理はもはや學校にのみあるとは言へない。即ち思想はなくなつて、知識の技術があるだけだ。しかし注意せよ、相對的精神の獨立はある。世間が如何に灰色にぬられやうとも、ぬられきれない部分が高等學校にはあるのだ。文化團體はその部分を、その最大振幅を確保し擁護せねばならない。ヒューマニズムや文化の自由を現在の文化團體の旗印とせよといふのはあまりにも人民戦線直輸入であるけれども、理由無しとしないのである。それは現實の前にあれかこれかと問ふ精神である。飽くまでも良心に忠實ならうとする精神である。(あれかこれかと問ふ事は決して不安の哲學を建立する事を意味しない。もつと立場以前の精神なのである。)眞理を感性にまで知る事のできない僕達高校生に於ける實踐はこれだ。それ以上の實踐を要求するのは、高校生の資格をすててからの事だ。後者の意味に於ける實踐が、どうしても前者の意味に於ける實踐即ち現實に對する知識を必要とするといふ点で、僕らの勉強は決して無駄とはならない。文化團體に於ける思想性の擁護といふ点では講演部は随分誤謬を犯して

きてゐる。又部員相互の意志の疏通にも缺く点多かつた。後者はとに角前者の点では文藝部もこの頃その傾向が見られる事はないか。講演部の失敗を繰り返さぬやう希望したい。文化部の意義は何處までもその思想性にある。そして部のマンネリズムに陥る事を豫防して呉れるのもこれだ。一般に文藝部は文藝、音楽部は音楽、講演部は哲學や歴史等を通じて、それらの底に流れる思想にまでふれる事によつて三部は同一カテゴリーに入るものと考へられてゐる。僕は現代の如き時期にあつては三部の交互的指導共力によつて、この思想性を擁護する事が何よりも大切な事であると考えへる。先に文藝部よりかうした話を受けた時喜んで賛同して置いたにも不拘、この事が何時の間にか有耶無耶になつた事は残念である。形式は論ぜず今後の實質的相互援助を講演部はこゝに改めて宣言する。どうか校友諸君も僕等の意のある所を解して有形無形に援助下されんことを切望して止まない。部はそれ自身としてのみならず、校内の文化意識の向上の爲にも存在し僕らとしては部はなくとも校内の文化意識さへ高度であるならそれで満足だとも考へてゐる。

わけの判らぬ事をゴテ／＼書いて大變申しわけがないが、最後に僕の部の報告をさせてもらはう。

昨年僕らが三年生を送り出す頃といふものは講演部は非常にハリキツてゐた。一には新しいスタートの喜びもあつたが、それは何かしら二年生のクラスにみながつたある氣持であつた。所がそれが單なる氣持であつて何等新たな行動や新たな欲求(あるにはあつたが消滅したのだ)をもたらさなかつた爲燃え上つた火のやうに熱はぢきにさめ始めた。これに至るまでには色々な事實があるのだが、その報告は止めよう。僕はお蔭でよい經驗を得た。新學年になつてからは事務的方面の整理と部の質的向上を考へたが、マネジャーの不徳は却て逆に思想性の喪失と關心の喪失となつた。これは先輩が偉過ぎた爲もあるのだらう。これは止むを得ない事なのだから僕は責の半分を今の二年生の不活潑に歸したい。二年生が中心にならなくては何もできない筈がない。二年生は要求らしい要求さへもつて來ないやうでは困る。二三の人は驚く程眞面目なのだが。今年の噂では君等はとてもよかつたのだがなあ。今年の

本場先生の御講義はリッブスの倫理學の根本問題をやつて戴く事になつた。もう四章まで行つた。この方は相當出席者がある。又大丸先生に日本經濟學史の話をして戴いたが、これも喜んで聞いて貰つた。去る十日には向居先生に愚管抄をやつて戴いた。これで座談會の各種テキストと共に一應日本的な物を見終つた。一番失敗したのが座談會だ。テキストが悪いのかもしれないし、やる日が悪いのかもしれない。二學期からはもつとフレッシュで生活に切實なものをやつて見たらと思ふが、かうなると又そのテキストの方がなくて困り出す。自由主義についてとか、理想主義についてとかいふ題でそれについてデイスカッションするのがよいかと思ふ。

文理大の福島政雄先生のお話は音楽會とダブツタリして聴衆が少なかつた。あれには僕も困つた。何をやつてもさうだが、部外の参加者がなくて淋しい。

五十周年には講演部は先輩三人（西田幾多郎、佐々木惣一、新明正道、竹内時男の諸氏より選ぶ豫定）の講演會と校内辯論大會、中等學校辯論大會を計畫してゐる。講演會は部としてよりも寧ろ北辰會全体的意義

を帯びるものと考へられるが、今年の豫算で僕等が名士講演會を遠慮したのも、かうした催につき學校からの御注意があつたからだ。校内辯論大會は久しぶりの復活であるから何卒多數の人の参加を希望する。來學期は木場先生の御講義と座談會はそのまゝ繼續させる豫定だが、特に何といふ計畫もまだ作つてゐない。主として一年生の人の指導に力を盡したいと僕一個人としては考へてゐる。最後に特に一年生の人に言ふ。もうぢき夏休みだ。夏休みになつたらウント本を讀んでくれ。そして思索の秋を待たうではないか。すべては君らの肩にかゝつてゐるとも言へる程だ。あせらず、恐れずむさぼり食ふがいゝ。つまらぬ選り好みなどせず手あたり次第に食ふのだ。他人の簡單な結論で済まらずに是非とも自分自身でそこまで歩き給へ。これが科學的精神といふものだ。

一九三七・六・十四夜

雜記帳

近時、高校生の文化的教養の貧弱さが、種々論議の的となつてゐる。この事は高校生自体に取つて、決して名譽に屬する事柄ではない。高校生活から、文化的教養に對する關心を差引けば何が残るか。この方程式は、いはゆる「學課」なるものの「点数」許りを氣にする事を以てよしとしてゐるカマボコ連中には、ちよつと解けさうでない。

四高に「文化部の沈滞」が叫ばれて久しい。この事は、四高生の文化的教養に對する關心が少くないといふ事を現はす以外、何ものもない。情ない事だ。

さて、私に課せられてゐる事柄は、かういふ事を、うだうだとならべる事ではないやうだ。主題は、音楽部の四月以降の記録である。

それも主なる事柄だけを列挙する。

一、春季演奏會。五月二十九日（土）午後七時開會。そろ／＼日が長くなつて來た頃の事として、來會者は定

柴田敏夫

刻通りにはなか／＼來てくれない。それでも、會のクライマックスに達する頃には、大講堂階下の、かなりの席がうづまつた。ハーマニカ二重奏に始まり、ピアノ三重奏、ヴァイオリン、チェロ、及びピアノの各獨奏、最後に合唱と、プログラムは滞りなく進行した。部員が少ない所へ、その上病氣で缺席したりして、數の上では物足りないものであつた。然し、それだけ部員の堅き精神的結合は、來會者の胸に強い効果を與へる事が出來たやうだ。

二、レコード演奏會。今迄、音楽部としての行事は、春秋二回に演奏會を開く事だけで、それ以外に北辰會の一部として、四高生に働きかけるといふ事は殆どなかつた。で、今度新たに四高生全般の音楽的教養に資せんが爲に、一學期間に二、三回レコード演奏會を開く事にした。之も理想をいへば、學校内の一室に相當な蓄音器を備へつけておいて、毎週一回宛でもレコー

演奏會を開き、古典より順次系統的に研究して行くのが最もその目的に副ふのであるが、何分金のかゝりすぎる（といふ程でもないのであるが）仕事なので、結局それは單なる理想として止める事とした。それでは何を標準にして演奏曲目を選ぶかといふと、レコード音楽の三要素たる「名曲」「名演奏」にして「録音のよいもの」といふ事を以て目安とした。この標準のとりかたは、この場合かなりまづいものではあるが、今の所、之より仕方がない。

第一回の演奏會は、五月十一日（火）午後三時より至誠堂にて開催。來會者七、八十名、豫想より遙かに多くの熱心な人々が集つてくれたのは、實に心強かつた。曲目は、序曲にウイリアムテル（ロッシーニ曲）（トーマス・ビーチャム指揮、ロンドンフィルハーモニック管絃團）次は、賣出された許りの絃樂四重奏曲嬰ハ短調（ベートーベン作品一二三番）（ブツシニクワルテット）を演奏曲目中のきゝものとして演奏。最後は、數多くのシューバートの未完成交響曲のレコード中、三要素揃つて評判のよかつたブルーノ・ワルター指揮、ウインフィルハーモニック管絃團演奏のもの。來會の諸君の終始、眞面目に、熱心に靜聽された事は

（昭十二、六、十八）

今尚、感激新たなるものがある。

第二回は六月三日（木）、時間も會場も第一回と同じ。今度は揭示の遅れた爲と、その他察し得べき理由から前回に比して、來會者はその半ばに充たぬ位だつた。特に、ベートーベン交響曲の午後なるプログラムを編成しレコードも充分吟味してあつたのだが残念な事だつた。曲目は、トスカニーニ指揮、ニューヨークフィルハーモニック管絃團演奏の第七番及びワインガルトナー指揮の第八番。豫定のプログラム終了後、物理教室から、最近購入のレコードを持つて來られたのは、來會者一同、思はぬ拾ひものだつた。バックハウスの月光の曲を始め、カルーゾのテノール獨唱、カザルス、コルター等の獨奏等であり、結局閉會したのは五時半だつた。

以上で、大体一學期に於ける我が部の活躍の跡を述べた次第であるが、今、音楽部は新たなる飛躍をなさんと、張り切つてゐる。秋の五十周年記念祭のためにも案を得てゐる。然し、何れも、今こゝへ發表するの自由を持たない。

四高文化の根本問題

文化運動の積極的理論と果敢なる實踐を四高生諸兄が冀望する以上、四高生は我が文化運動の樞要なる部分を果して來た、そして現在果しつゝある文藝部に次のやうな義務を負ふべきであると我々は固く信ずる。

第一に四高文化再建に絶大なる期待と熱意を抱懷する人人は、稍もすれば從來行はれつゝあつた文藝部非難の言動を棄てて文藝部に身を投じ、青年の良心と純真さ、正しき理論とひるまざる實踐とを以て文藝部の主流となり、その歴史的使命の遂行に助力すべきである。

第二に諸種の事情に妨げられて文藝部に來る事の不可能なる人々は進んで北辰會雜誌に寄稿し、自分の信ずる所を吐露し全校に慫へねばならぬ。それは論說であらうと評論であらうと小説・詩歌等の文藝作品であらうと構はない。只青年らしき若々しさと眞理追求の情熱を求むるのみである。

佐 口 透

第三に文藝部が實踐の手段として重視する各種の批評會、座談會に積極的に參加することである。それ等の會では何等の虚飾なく自分の思惟する事を卒直に發表することのみが要求されるのである。思想の發表時としては激烈になされるであらう討論は各自の蒙を啓き理智を鍊磨し文化價值追求の衝動を驅り立て、やがて各人はヒューマニズムなる共感に連結される。批評會、座談會の重要性は今後愈々増大すべきものと考へられる。随つてこれ等の會に四高生の積極的參加は益々切實に要望されるのである。

第四に部外にありて、徒らに文藝部の無爲を喋々するに止まらず、進んで具体的に文藝部に對する意見を開陳する事である。

我々文藝部は諸兄に以上の如き事をなされない時は我々が諸兄を文藝部に對し消極的であり延いては四高文化——その樞要なる部分を文藝部が負うてゐるので

あるが——に對し何等の熱意を持たざる非文化人、その日暮しであると考へるのは決して不當なことではなからう。此の事は文藝部のみならずその他の文化團體に於ても亦同様である。勿論各文化團體はそれ自身だけのものではなく、全校のものであると云ふ事は我々のみならず諸兄も認めてゐる事實である。

併し翻つて考へて見るに我々は諸兄が前に列擧せる四項目を充分に果すに足る氣力、智能、資格ありや否やと云ふ事について疑はざるを得ない。

第一に高等學校生徒たる諸兄の幾分かは封建的な特權階級的意識と野蠻主義なる偏狹なる自稱傳統精神とのカクテルたる高等學校的イデオロギーの殻を被つたまま身動きもならず近代都市のカリカチュアとなつてゐるからである。かゝる人々は文藝部の精神と相容れない。

第二に現代高校生徒の多くは政治的に無關心であり、社會の現實に非良心的であり、官僚型、事勿れ主義者であり、徒らに世間智に富み實利的であると云ふ事に於て社會的ヒューマニストの理想に餘りにも背反してをり、到底近代的精神を理解してゐないからである。

第三に諸兄の一部は或は飲酒女色等の享樂生活に浸り、或は安價なる娛樂に身心を麻痺せしめて思索を輕んじ社會の現實から逃避せんとしてゐるのは文藝部の使命と反するからである。かゝる点に諸兄が反省するに非ざれば、如何に各文化團體が聲を囁まして文化の復興を叫ぶとも、四高には永遠に暗黒時代が続くであらう。そしてこれ等の暗黒時代に僅かに學燈を守り續けるのは我々文化團體なのである。我々がこれ等の精神的無能と物質的享樂生活を清算した時、そして最も必要な書が消化されて青年らしき教養を身につけた時、その時こそ我々は社會的ヒューマニストとしての智識階級の本分を盡し得るであらう。

又同時に各文化團體は此の目的の爲に偏狹なるセクショナリズムを揚棄しなければならぬ。文藝部員は文學青年なる狀態より脱却せねばならぬ。講演部員は最近流行の哲學青年に終つてはならぬ。音楽部員は樂器の吹奏を以て我が事終れりとしてはならぬ。キリスト教青年は神の國を地上に建設すべく理想に進まねばならぬ。かくしてすべての文化團體は一つの共通の使命を有するのである。それは封建主義と闘つて人間性の眞の發展を要求し、科學的精神を尊重し批判的懷疑的

精神を培ひ、將來社會にありて社會的不均等、國際的無秩序除去の人類の爲の使命を遂行すべき根本精神を學校時代に養つて置かねばならぬ。

かくして文化團體の進むべき道はヒューマニズムの大道でなければならぬ。それは個人的より社會的へ推し及ぼさるべきであつて、此の意味に於てこそ教養が眞に要求されるのである。汗牛充棟も只ならぬ書籍を机上に積み重ねても確固たる社會信念に缺如する所があれば、その讀書は單なる散漫雜然たる價值なき智識の集積に終らう。政治、經濟、社會、思想、文藝等の書籍も此のヒューマニズムの線に沿うて意識的に讀まれる事を我々は理想としてゐるのである。最近の上から強要された教養の爲の讀書は學生をして信念なきデイレットタントに終らしめるのではないかと云ふ懸念は少からず存在するやうに思はれる。そしてかゝる淺薄なる信念なき智識過剰が文化運動の發展を阻止する傾向があるのである。

さて各文化團體はヒューマニズムなる一つの共感によつて精神的に連接してゐるが故に各團體は此の共同の目的の爲に團結する事は極めて適切なる企てと思量される。尤も此のことは達成するに少からざる困難を

必然的に伴ふであらうが、やがて機熟して各文化團體の團結の實現を見るに至らう。我々の今爲すべきことは各文化團體がセクショナリズム意識除去の下に各自の任務を果す事であり、次いで各文化團體は緊密なる接觸の下に相擁して四高文化の發展に鋭意努力しなければならぬ。

私は次のやうなデードの思想を最後に掲げて文化團體の人々に贈らう。

「吾々が智識人の協力を促し文化の擁護を叫ぶのは畢竟吾々が人間として生存しようとする不滅の意志をもつからである。そして吾々が翹望する新しき社會の出現も、それがための現存的社會の變革もやはり吾々が人間として存在し生長しようとするばこそである。此の意識を沒却してはこのヒューマニズムの理想主義の支柱なくしてはすべての社會運動も政治運動も人生それ自体において空虚である。諸々な社會的な政治的な經濟的行動も、若し吾々の生存が『全人間の發見』を目標してゐる時に於てこそ、それ／＼意義をもつものであり、またその發見に役立つものである。」

雜 錄

谷 口 陸 男

映畫觀賞券は一、二人の部員の個人的献身によつて發行を續けられて居るのでありますが、部の内外には映研の獨立を要望する聲が高まつて居り、我々としても落着いて仕事するには家を必要とするのです。映畫は最近藝術として益々高い域に進展して居り、學生生活に於ても映畫に對する關心のより熾烈になつて行く折から、映畫のより良き發展の指導と文化の向上の爲に映畫研究會の獨立は今や正に諸兄並びに學校當局によつて眞剣に考慮さるべき性質のものである事は我々の信じて疑はざる所であります。(北辰會雜誌百三十七號)

そして今、映畫研究會は、永い間の育ての親である文藝部の羽交ひの下を離れて、覺束ないが、併し若々しく新鮮な羽搏きを試み始めた。

四高に映畫研究會が誕生したのは今度が初めてではない。昭和二三年頃、さうだ、無聲映畫が感覺藝術と

して、極頂期を示してゐた時ぶん、新興藝術探求の要望に應へて、映畫研究會が創設された。けれども、當時の凡ての文化團體が捲き込まれたあの思想運動の渦中に、映畫研究會も御多分に洩れず突き進んで行つた。「全線」「アジアの嵐」「人生案内」。そして傾向映畫の流行。映畫はその藝術を忘れて、觀念的な思想の代辯者になつた。映畫研究會は映畫を忘れて、思想を検討し始めた。そして、その思想が大らかな時代の波と一緒に前線から後退し始めた時、映畫研究會も足場を失つて、やがて存在を失くして了つた。それから何れだけ模索の時が続いたらう。頼つてゐたものをフツツリ失つて了つて皆戸惑ひし始めた。何も之は映畫に限られた道ではない。思想界がさうなのだ。文學の世界もさうなのだ。新劇運動もさうなのだ。そして、時代は何時の間にか、違つた旋風を捲き起し始めた。けれ共、藝術は不死鳥である。藝術に對する人間

の欲求も不死鳥なのである。映畫は音と云ふ武器をたづさへ、新しい方向を目指して立ち上つた。ルネ・クレール、ジャック・フェード、溝口、小津、伊丹。冷え切らうとした死灰の中から、又焰がトロ／＼と燃え上つて、不死鳥は新しい羽搏きをする。映畫研究會は斯うして再び生れ出た。

映畫は音を獲得してから、徐々に變貌をし始めた。それは純粹の感覺藝術から文學的な内容を持ち始めたのである。ジャン・エプスタン「アシャー家の末裔」邊りを最盛期として、無聲映畫は畫面の素晴らしいモンタージュに依つて、感覺藝術として獨自のものを造り上げた。そこでは音とリズムとの視覺的表現が大きな課題であつた。けれども音が一度び之に参加するや、畫面と音(聲——科白)とは同じ位大きな役割を演ずる事になつた。聲——科白は、必然的に戯曲などの有つ文學的内容を語るのである。文學に一層、緊密な關聯を持ち始めた事は本當なのだ。最近シナリオ文學が喧しく論議される所以であらう。

何處の學校でも、映畫研究會の會員は大抵文藝部の部員である。文學に心惹かれる人達が、文學と緊密な關係を有する映畫に關心を持つのは當然の事なのであ

らう。けれ共、私は單に文藝部だけでなく、講演部も映畫研究會に加はつてほしい。音楽部も加はつてほしい。繪畫會も、キリスト教青年會も、佛教青年會も、E・S・Sも佛語會も皆加はつてほしい。そして、一應「映畫」を理解した上で夫々の立場から、映畫を批判検討してほしい。斯うした部員や會員などを抱含する映畫研究會員が一堂に會して映畫を論じ合ふのは、考へてみても楽しいのである。映畫が、文學的内容を持ち、思想性を持ち、音楽を持ち、繪畫的構成を持ち、宗教的色彩を持ち、各國の言語を持つのを私は混血兒の魅惑にしたいくない。更にそれらのものを融合統一したもつと高度の綜合藝術にしたいのである。

何と云つても、まだ生れ出たばかり、私達は随分、育ての親の文藝部に頼つてゐるのである。例へば、機關雜誌も、會報も持たない私達は、眼まぐるしい映畫界の變轉とは反對に、しごくのんびりと半年も前の作品の批評なり感想なりをとぼけた顔で此の誌上にさらさなければならぬ。斯うした事情からも、私達の書くものは、新聞、雜誌などに掲載される紹介批評だとか哲學批評などであつてはいけないと思ふ。一つの作品を論ずる場合、その作品を通じて映畫の或は映畫作

家の本質を論究するやうなもの、或は創作批評——批評は一種の創作であると云つた建前から出發したものでなくてはいいなと思ふ。

折角、起ち上つた映畫研究會なのだ。勝れた映畫論や映畫隨想を期待した。

Memorandum

- ・四月二十一日「蒼氓」鑑賞券發行
- ・四月二十八日「蒼氓」批評會

素朴な實寫映畫の如き迫力を持つ異色ある映畫。

原作の散漫な印象に比して、却つて鋭い感銘を與へる。集團の描寫は好い。けれども、監督の熱意が餘りに、表現に急なるため、浮び上つて感傷になる。小道具の使用、大向ふをねらつた卑猥なくすぐりなど遺憾な点が多いが、その意圖と眞摯さと題材とに依つて映畫史上記憶さるべき作品——と云つたやうな事が話題になつた。

- ・五月四日「女だけの都」「科學者の道」鑑賞券發行
- ・五月十日映畫研究會獨立打合せ會
- ・五月十二日「女だけの都」「科學者の道」批評會

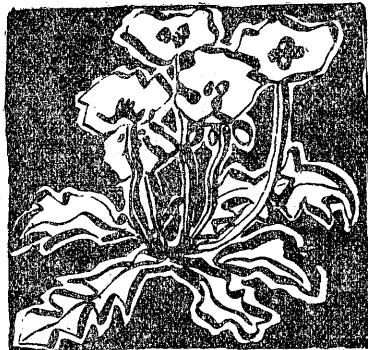
此の席上では「女だけの都」を諷刺映畫と稱すべきか否か、諷刺の對象如何と云ふやうな事が問題になつた。それから、藝術批評の困難さ、映畫に於けるシナリオと演出との役割など、「女だけの都」は論ずべく餘りに多面性を有する勝れた作品。

「科學者の道」はポール・ムニの素晴らしい演技、唯それだけ。

- ・五月十二日「目撃者」「かりそめの幸福」鑑賞券發行
- ・五月二十日「描かれた人生」鑑賞券發行
- ・五月二十五日「吾等の仲間」鑑賞券發行
- ・六月三日「吾等の仲間」批評會

シナリオ作家と演出者との乖離。デュヴィヴィエにはもつと本能的な協力者が必要である。氣取つた技法。けれど、内容は現代フランスの苦惱を物語るもの。美しい畫面。ヴィヴィアン・ス・ローマンズの好き——etc

- ・六月十四日「樂聖ベートーヴェン」鑑賞券發行
- ・六月十五日「裸の町」鑑賞券發行
- 蛇足・鑑賞券利用率の最も高きは「女だけの都」、最も低きは「描かれた人生」(六月十五日)



小説

奔流

古小路隆義

1. 蔦の學校

蔦の學校といふ名稱は、この地方では一つの合言葉と言へるかも知れない。信仰と愛慕の念をこめて、こゝに聳えてゐる白壁づくりの學校をさう呼び馴らしてゐるのである。校舎は眺望のいゝ大阪灣の方を向いて、たかだかと清楚な姿を見せてゐるが、その位置の關係から、一里ばかりも離れた國道の上からもはつきり見ることができた。周囲は南紀州に近い明色の海と小作りの平地とが實に麗はしい均齊をつくつてゐて、その背後にはずつと重疊した山々が續いてゐる。校舎はその平地へ續くならかな丘陵の上に立つてゐた。そしてその丘陵一帯が運動場になつてゐたが、五月の新緑の頃には、まるでお伽噺に出て来る動物共の集會所のやうに、明るくてしかも潤いがついてゐて美しいし、その小隅に竝んだ運動用具等は、遠くから見るとまるで正確な透視畫にでも

嵌め込んだやうに整然としてゐて小綺麗だつた。校舎の方から生ひ伸びて來た蔦が、もうその平行棒の上端から半分ばかりも巻き下りて來てゐた。この蔦は、いつの頃からか突然に生えだしたもので、何時の間にそれが一年一年と生ひ伸びはじめて、遂に二階の窓縁あたりまで蔓先を伸ばした頃、遠方からは校舎を抱くやうに見えだしてから、だれが云ふともなしに「蔦の學校」と呼ぶやうになつた。

この地方の人々の大多數が日蓮信者であつて、その故に特にこの地を選んで建てられた同宗派の學校だから、彼等とこの女學校との關係は一種特別な親密さで結びついてゐるのである。三年前の大風で、風の當つた西側の蔦が無残に吹き荒されてしまつた時も、いつの間にか有志の手入れをされて、三年後の今では以前に勝る蔓盛振りをを見せてゐる。それは、彼等の信愛を現はす一つの象徴でさへあつたのである。

校舎は時折彼等の説教所に使用される。

雨天体操場がそれに當てられたが、彼等の坐る椅子等は、晝の間に悉皆可愛い女生徒の手でとり竝べられた。それだけに人々も亦生徒達を深く愛してゐた。

毎朝八時近くになると、近くのN郊鐵の停車場から、賑やかな彼女等の一群が氾濫して來る。可愛いセイラー服に、鮮やかな白線が一本斜に入つた帽子をかむつてゐるのがそれで、彼女達は、都會のやうな苦々しい劇しい入學試験を経験しないで、若い心愉しい青春を、思ふがまゝに學び暮らして來た金持の娘達であつた。のび／＼と思ふ存分成育した上品で無邪氣なお嬢様がこの學校の型である。土地の青年達はだれかれなしに淡い戀心を抱いてゐたが、それはもう美はしい憧れといつたものに過ぎず、猥らな戀愛沙汰は曾てなかつた。だれもが明るく朗らかで邪心がないのである。稀にお轉婆なのが本道を離れて、細い野良道を危なげに笑ひ興じて渡つて來ても、だれも巫山戯たりからかつたりするものはない。朝なら丁寧に「お早う」の挨拶をかけたし、暮れなら「左

様なら」と厭氣のない元氣な捨臺詞を送つた。

かうして村民との關係を親密にするいまひとつは、盛大なその學藝會である。

總じて女學校の催し物といふものは大掛りなものだが、土地柄だけに、それはもう大變な騒ぎだつた。二里ばかりも離れたF市にまで豪華なボスターが貼り出されるし、當日開かれる慈善市の前賣券は通學生の手で盛に賣り捌かれた。眼目の生徒芝居には、専門家が一週間も前から泊りがけで來てゐて生徒達を指圖するといふ騒ぎである。——去年は日蓮上人の功力を禮讃した法劇が行はれたが、忽ち可愛らしい老僧や、詰め綿で背を圓くした俄か婆さんが出來上つて、大向ふは開幕と同時にヤンヤの大喝采だつた。上人の功力も顯たかに、蹇がすつくと起ち上つたり盲者が開眼したりする時は、在郷の老人連は盛んに南無七文字のお題目を稱へだして、逆にその方へ素晴らしい人氣を集めることもあつた。

これは春秋二回に互つて行はれたが、その季節季節に應じて、どのような趣好を凝らすかといふことが、生徒達には一年中の楽しい課題となつてゐるのである。

創立以來十年を経て、この學校の名にも蔦のまつはりついた校舎にも一種のさびがついて來た。近在の富裕な家庭は安心して娘を託することができた。その醇良な校風を慕うて遠隔の大都市から通學する生徒もできて來た。一方宗派の布教機關としてもその地位を重く占めて、重大な宗派の會議には時折この會議室が利用されるやうになつた。

×

×

×

ところが丁度創立十周年記念を迎へた年に、大變な事件が突然に——全く突然に勃發したのである。それは形式として全く異例であり關係者が學校といふ教育機關であるだけに、當時の新聞でも大騒ぎされた事件で、これ

まで築き上げて来た校の信用と名聲が、一朝にしてこの事件と運命を共にしてしまつたのである。

變事は只一瞬の裡に行はれた。――

記念日を目睫に控へた×月×日の午下りに、わが私立明知女學校は、突如、大阪から二台のトラックに分乗して来た×區裁判所の執達吏に襲はれて、運動場を始め建物の全部に差押へを喰つたのである。

學校側には文字通り青天の霹靂だつた。

彼等は同行した人夫を脅勵して瞬く間に數十本の板張を打ちめぐらした。折から土曜日で幸ひ生徒は出拂つて居なかつたが、居残つてゐた教員達は泡を喰つて掛け合つたが固より無駄である。これが平地にある建物なら兎も角も、可成りの高所の上に聳えてゐて四面見ざらしの位置にあるのだから全く手のつけやうがない。そのうちに彼等は再び風のやうに引き上げていつた。

その日校長は折悪しくM本山に出張してゐて留守だつた。債權者もその隙をねらつたものらしいが、兎に角その夜、全職員の非常招集があつて、異様な緊張の下に會議が開かれた。

席上、唯一の古參である八木教頭が、若手からこの醜態を難詰せられて告白した所は大体次の通りである。

――本校は創立當時、經濟的に可成りの無理があつたが、難産の揚句、高名な富豪番匠常吉に五萬からの借財を負うてやつと成立したものである。これは本校存立の威信にも關することであるから、谷校長と自分だけの秘密であつた。その後本校の發展と共に漸次返済していつたが、いま猶二萬ばかりの負債がある。期限は十ヶ年であつたが、それも目睫の間に迫つて来たので、實は本山の補助要請に校長は出張したものである。――

この事實は大多數の教員には全く初耳で、これまでその氣振りも見られなかつたものだから一同は、ただ顔を見合はせて驚く外はなかつた。

彼等の中には責任者をひと責め責めねばおさまりのつかぬ面持の過激な手合もあつたが。教頭は山羊と渾名される程溫厚な人物であり、これまで生徒からも教員からも人望を集めて来た人であるから、はやり立つてゐた連中も八木の告白に激しい非難を浴せることもできなかった。

兎に角その夜の會議で決定したことは、取りあへず向ふ一週間臨時休校すること、事件の外聞を慎んで校長の歸校を待つといふことであつた。

しかし會議がやつと終つて、極度の不安と不快とを面に包んだ教員達が起ち上つた時、又一つの不祥な事件が降つて湧いた。

小使に案内されて、この町の町長宮田市藏が姿を現はしたのである。彼は、この地の舊家として人望と信頼を一身に集めてその人格を謳はれた先代から引き續いて町長の地位にあつたが、その父とは全く不肖の子だつた。この町の經濟的な實力を握つてゐるだけに表立つて兎や角いふ者はなかつたが、しかし内々その非行と利己主義が誹謗されてゐるのは事實である。四十歳を越えてから恐ろしく脂肪太りがして、先年縣會議員に立候補した折、持前のかん高い聲であちこちの演壇に立つた時は、それだけでもう選舉民の嘲笑を買つたくらゐだつた。勿論落選したが、落膽の餘り痩せたといふ噂が又亦町民の失笑を買つた。

彼は恐ろしく昂奮してゐた。今にもあの高い金切聲が單的に飛びだしさうな氣配で、彼が姿を見せた瞬間から一座に更に不吉な豫感を激しく感じさせた。

「校長の外、皆さん御同席なんですな！」

頭から激しいこの氣合に、一同は聲を呑んで彼を見凝めたまゝ、暫らく奇妙な沈黙がつゞいた。

「いや、今日といふ日には全く吃驚させられましたよ。眞逆本校にかうした借財事實があらうとは思ひません

でしたからねえ。それならさうとあの時仰言つてゐて下されば、今日のやうな恥はかきませんでしたに」

この話も、八木教頭の外には了解できなかった。はじめ高台の下に、園藝用の花園にする考へで番匠から百坪足らずの地を借り入れたが、結果が面白くないので宮田に貸し與へ、毎月學校はその地代を收納してゐた。宮田は其處を手入して家を建てたが、今度の事件でその店子達も一聯に禍を蒙つて、宵から町長宅を騒がしてゐるといふのである。

「あれがさういふ關係にあることを承知してゐたら、私は無論直接に番匠とやらと交渉してゐたでせうに。この責任はどうでも本校に負うていただけにやらんですな」

これが神聖なるべき學校内の、しかも扉の入口に突ツ立つたまゝの掛け合ひである。尤も何と云はれても理窟は先方があるので、八木も俯向いたまゝ返答に窮してしまつた。教育者として、立場から云へばこれ程の恥辱はあるまい。

暫らくして彼がやつと顔をあげて應答を始めようとした時、又亦不吉なこの日の三つ目の事件がつゞけなりに起つたのである。

修身科の小田教師が、八木の發言に無言で機先を制すると、飛鳥のやうに素早く宮田を一撃したのだ。……

この暴行沙汰の御蔭で、事件全体が益々大きくなつた。翌日このことが全町に知れ渡ると、信愛の眼差に取つて代つて深い疑惑の眼が一齊に高台へ向けられた。翌々日の月曜日、變事を知らずに登校して來る生徒達の驚き、父兄の憤慨——そしてその時刻には、早くも一切が新聞に暴露されるといふ成行きになつて來た。

2. 異 端 者

その日から二日目に校長が歸つて來た。

しかし彼の憔悴し切つた面を見ると、人々はもうこの學校の暗い運命を觀念してしまつた。彼は逃げるやうなおどろした姿を一度校舎に見せたきりで、その後再び何事かに奔走し始めたものか姿を見掛けたものはなかつた。歸校して二三日してから、八木と二人でせか／＼と大阪のある場所を歩いてゐるのを見たといふ噂がとんだが、大方番匠の家へでも交渉に行つたか、宗派の勢力家へ金策に行つてゐたものであらう。

とにかく、一切の繃縫が無駄であつたといふ結果がそれから一週間後になつて明らかになつたが、同時にその日は一切の打開策を失つた明知の、最後の評定日でもあつたのである。

城明け渡しの日が小憎い程の日本晴だつた。

例の小田教師は、窓越しに見える遠い鳶の鳴眞似を口笛で吹きながら會議室の方へ歩いてゐた。宗派關係の職員達の情れ返つた姿が、何人も彼の方を睨んで通りすぎたが、あの夜の暴行で彼が人々に與へた正義派といふ感銘よりも、すぐ後で兩手をついて宮田に詫つたといふ醜行の方が遙かに彼等の反感を買つてゐたのである。あの翌日早速小田は二通の手紙を受け取つた。一通はまるで檄文のやうな激調を帯びて、冒頭から——汝、けがらわしき者よ！——とある僚友進藤滋のものであつたし、今一通はその妹であり小田の愛人である佳子から來た同様な難詰文であつた。彼は其れを碌すつぽ読みもしないで紙屑籠へ捨てしまつたが、佳子の方の——兄から聞いた貴方の行動は、貴方を知つてゐる私にその氣持が分らないことはないが、兄を怒らせないやうにもつと手際よくやつて欲しい——といふ、皮肉と取ればとれぬことのない文句には少し心が引かれた。

その進藤がどうしたものか今日は顔を見せてゐない。

小田が會議室に上つて行つた時は、既にそれ／＼の感慨をこめた職員達の顔がずらりと居竝んでゐて、部屋の空氣はむゞとする程重苦しかつた。五人六人と固まつては會議前の私語を交はしてゐるものもあるし、中央に安置された祖師の像にひそやかなお題目を稱へてゐる敬虔な老嬢もゐた。

正面の柱時計が正二時を報じて間もなく、靜かに入口の戸が開かれて校長谷が姿を現はすと、同時にどつとざわめきが起つて、昂奮の色が一樣に彼等の面に流れた。谷は校長といふより矢張り彼の天職通り寺の住職といった好人物型の人で、後頭部に僅かばかり残した白髪の外奇麗に禿げ上つてゐる頭は、どうみても校長といふ言葉と縁が遠いやうに思はれた。しかし血色のいゝ肉附の豊かだつたその溫顔も今は見る影もなく寒れほうけてゐる。責任問題で聾々としてゐる昨今、彼の宗教徒としての立場さへ苦痛を感じるほどになつてゐるのである。

彼は人々の昂奮を押へるやうに、暫らく一座を見渡してゐたが、やがて聞き取りにくい程の低い聲で語りはじめた。

「本日先生方にお集り願ひました件は、既に御承知の通り本校經營者變更の件に關してでございますが、このことは申すまでもなく我が明知の學校としての問題だけではなく、私共の奉ずる日蓮宗派學林の一の消滅云々の問題ともなつて参るのでございます。もと／＼本校がこのやうに早く經營難に陥るとは私共當事者も豫想しなかつた所で、責任者として私の不明不徳を深く諸君にお詫び致す次第でございます。創立當時の借財は全て本山の改築費の一部を以て融通して頂く考へでございましたが、不幸にして信者方の御寄進が思ふ通りに参りませんでした爲、宣教費用に制限を受けまして、遂にかうした申譯のない事態に立至つたものでございました。私共は、先づ大祖師上人様に、引いてはこれまで數知れぬ御盡力を賜はつた関係者の方々に、のがれ得ぬ責任を痛感するものでございます……」

谷は話しながら目をうるませてゐた。テーブルを押へた兩手はひどく震へてゐるし、最早だれをも正視することができぬやうに深く頸垂れたまゝの姿勢で、少し間を置いてから又話し始めたが、今度はその聲もおろ／＼してゐた。

「……債權者番匠常吉氏は、自ら本校を經營するの意志がございましたが、事實私共は愛する明知をたかゞ高利貸風情の手に引き渡すに忍びませぬし、多年教導し來つた千餘の子女の事共も氣掛りでございまして、或は御父兄の方々に、或は去る財團にと百方及ぶ限りの手を盡して見ましたけれ共、いまは全て水泡に歸して了ひました。——事態が既にこれまでに立ち至りました以上は、諸君、無念にも最早せんすべもございませんのです。残念ながら、私共は一端袂を訣つの外はないのでございます。」

これだけ云ふと、彼は突然面を伏せてしまつた。一座は恐ろしい緊張に支配されて首垂れて聞いてゐたが、流石女教員達は、彼が崩れるやうに坐ると申し合はせたやうに聲を忍ばせてすゝり泣き始めた。

谷はもうそれだけでこの場に居たまらぬやうに、再び力なく立上ると、滂沱とした兩眼をしばたきながら云つた。

「私は、本日——これ以上のことを申し上げる氣力がございません。只たゞ幾重にも諸君の御寛容を乞ふ次第でございます。まだ引繼ぎの事務も累積してをりますので、只今はこれで失禮させて頂きますが、今後の先生方の御行動、其の他の事共に就きましては、八木先生からどうぞよくお聞きとり下さるやうに——」

そして彼は悄然と室外に去つた。だれも彼の永く同席に堪へぬ心情に心を打たれぬものはなかつた。

つゞいて痛ましい目で彼を見送つた八木が立上つたが、彼の緊張した面には何時もの柔和も失せてゐて、君子然とした風貌には嚴肅な厚みさへ加へてゐた。

「只今校長からお話になりましたやうに、私共の不首尾から、十年この方名譽と傳統とを築いて参りました本校は、茲に意外な悲運を叩つことになつて了ひました。永年教頭の職にありました私も、共に無量の責任を痛感致しをるのでございます。そこで本校今後の運命でございますが、債權者たる番匠常吉氏御自身が、私共に引きついで本校を經營される意向を持つてをられるのでございまして、昨日、職員全部の進退を至急決するやう希望がありましたから、只今これからその御相談に與るわけでございます。諸君の中には本宗關係の方々が多数なのでございますが、決然涙を振つて去られるか、それとも猶踏み止まつて引きつゞき教職にお當りになるか、諸君の御意見を承りたいと存じます。私と谷校長とは、一切の責任を負ひまして、残念ながら退職致すことに決定致しましたが、只管生徒の御薫育に専念されてゐた先生方には何等のハンデキャップもない譯でございますから、何卒これより隔意のない御意見の御表示をお願い致します。」

八木の言葉に聲を吞んで聴き入つてゐた一座は、彼が着席すると再び動搖しはじめた。

——すると突然、

「ぼくッ」

と、ざわめきの中から圖書の小野が立上つて、情熱的な激しい聲を震はせつゝ、

「——斷然！ 谷先生や八木先生と行動を共にします。われ／＼、高利貸風情の下で働けるもんですか！」と單的に云ひ切ると恐ろしく昂奮して坐つた。人々は一瞬凝然として、視線は一齊に彼に向けられたが、小野の隣に坐つてゐた小田は、一座の空氣に微笑してゐた顔を迷惑さうに下に向けてゐた、彼は校長や八木の話してゐる間、人々の嚴肅な身構へが可笑しくて仕方がなかつた。かうした會議全体が、彼に取つてみれば分り切つた事柄で、それを矢鱈にひちむつかしく導いてゆく雰圍氣が馬鹿くさかつたのである。しかし隣の小野は直ぐ彼の態

度に氣が付いて、憤然と小田の方に向き直らうとしたが、その氣を外すやうに漢文の木村老人が、

「私もこれを機會に教壇から遠ざかりたいと思ひます」と端の方から穩やかに云つた。つゞいて某も、

「私も、本宗派の學校といふ希望で参つた者ですから、この際他地方へ移りたいと存じます」と辭意を表明した。

女教員達は流石に明日の生活に怯えながら、これ等の人々を尊敬に近い眼差しで眺めてゐたが、もとより誰一人發言するものはなかつた。

そのあと一座は一寸白けて、だれもが面映ゆい感じに打たれて沈黙を守つてゐた時、

「小田君！」

といきなり小野が怒聲を發しながら眞赤になつて小田の方に向き直つた。

「先程から笑つてゐられるやうだが、この嚴肅な時に、一体、なにが可笑しくつて笑はれるんですか！」

と眞先に發言した先の昂奮の餘勢を驅つて鋭く詰め寄つた。いつの間にか右手を握りしめて、罷り違へば矢庭に鐵拳の一つでも飛びさうな氣勢だ。

「さや——」

小田は慌てゝ手を擧げながら、それも不似合に勿体ぶつて打ち消したが微笑はまだ消えてなかつた。

「いやつて君、いまは笑つたりなどする時ぢやないんぢやないか！」

と、更に激しく詰め寄ると、彼はやつと微笑を消して率直に頭を下げていつた。

「……………どうも、さう悪くお取りになつては困りますね、僕は別に、笑つたつて譯ぢやないんだけど——つゝ……………」

「ついつて君、君は宮田の時にだつてあのやうな醜態を見せたんだから、今日あたり眞先に謹慎して辭表を出すのが當然ぢやないか。少しは恥を知り給へ——恥を」

二人の経緯が更に一座を白けさせた。八木は見兼ねて再び立ち上つた。

「只今、辭意を明にされた方々の御心情には洵に涙のするほど嬉しうございますが、この際昂奮は禁物と思ひます。かう申しては如何と存じますが、或は未だ今後の御自活の方針もお立てになつてゐない方々もございませう。しかし、どうしてもお辭めになる御決意の先生方には今後の御就職のお世話も及ばずながら致したい都合もございしますので、又新校主、番匠氏の都合もございまして、是非共本日中に諸君の態度を決定して頂きたいと存じます。——で、いつまでかうしてゐても埒が明きませんから、大變拙い方法ですが、只今職員名簿をお廻し致しますから、何卒率直に御意志のまゝをお記しなすつて下さるやうお願い致します」

直ちに名簿が廻され始めた。

人々はこの瞬間、愈々土壇場へ追ひ詰められたやうな、切りつめた、せつない壓迫をひしひしと感じた。尋常では、どうして自らを自ら進退し得よう！ 元氣な、躍るやうな文字を記していく辭職組も、己れの行爲に對する英雄感に壓倒されて、デリデリするやうなちぐはぐな氣持で自分の行爲の跡を見送るのであつた。

しかし、それが遂に小田の前まで來た時、果然人々の視線は一齊に彼へ集中された。

所が彼は小野から名簿を受け取ると、殆んどそれには一瞥も呉れないで、まるで汚らはしいものでも抓むやうにいきなりふいとそれを隣へ押しやつたものである。

「卑怯者！」

眞先に小野が怒號した。彼は吃驚して同僚の方を振り向いたが、その口元にはもうはつきりと冷侮が浮んでゐ

た。去就に困惑してゐた女教員達は、何れが何れともつき兼ねる顔で、等分にこの二人を見比べはじめた。

小田は満座の注目を浴びながら平然と立上ると、

「只今僕のことを卑怯者と仰言つたやうですが、僕はいま辭めたくないから署名しなかつたばかりで、自分では卑怯者だなんて微塵も思つてはゐません」と打つきら棒に云ひ捨てゝ席についた。

「良心に恥ぢろ！」

「職に恥ぢろ！」

「異端！」

彼は降り注ぐ罵詈の中から冷やかな笑を含みながら坐つたまゝ勇敢に云つた。

「諸君、諸君はいま正氣の人ぢやないんだ。いまに小使の運んで來るお茶でもすゝつてゆつくり考へて見給へ。君達がいま義だの良心だのいふものに、君達自身實はびく／＼ものなんぢやないか。君達こそ胸の底を叩き割つて矛盾した自分達の行に恥ぢ給へ。——しかし、まあ君達のやうに、無理にでも僕の處置に何等かの名譽ある名目を附けたいのなら、僕は簡単に、この學校と、それからかういふ僕自身の爲だといふことを云つて置きませう！」

かういつて彼が口を結んだ時の室の混亂動搖は實に名狀し難い。これまで黙つて聞いてゐた体操の某等は本當に憤慨しはじめた。しかし度重つた小田のこの放言に、今にも制裁の鐵拳が飛びさうになつた險惡な一瞬、戸口から顔を出した若い事務員が「只今大阪の番匠さんが御來校になりました」と告げた。

それを聞くなり間髪を容れず小田は三度立上つた。

「僕の態度は只今申し上げた通りです。幸ひ新校主が見えたさうですから一寸會つて來ませう。僕と御同意の

方も、その御意志をお傳へになつておいた方がいゝかと思ひます。では、——これで御用は済んだ筈ですから僕はお先へ失禮します」

彼は丁寧な皆の方へ頭を下げると、輕快に身を翻してそれなり部屋を出ていつてしまつた。

3. 對 決

應接室ではもう餘程さきから谷校長と來客とが話し合つてゐた。谷は顔を少し俯向けて、傍の目ではひどく退け目を感じてゐるやうだつた。客の低い力強い押し付けけるやうな聲調を受けて、彼はそれよりもつと低い聲でいち／＼丁寧に應答してゐた。相手の純粹な關西訛がこの際ひどく重みをつけて、時々念を押すやうに強く聞える「——な」とか「——や」とかいふ言葉尻が何か威壓的に響くのである。

「いよく、今度はコミッションの方ですな」番匠は薄笑をもらしながらこんなことを云つた。

會議室から飛び出して來た小田が扉をノックした時、谷はこの侮辱に堪らへて凝つと下唇を噛みしめてゐた時であつた。

「どうぞ」

番匠が應へた。

彼は這入つて來た小田を事務員か何かとでも思つたらしい。その方には殆んど一瞥も呉れないで煙草を一吸ひ深く吸ひ込んだ。

小田は構はずに彼の前まで歩いて來ると、谷の方に一揖してから空椅子の横で、

「修身の方を受け持つて居ります小田と申します。——何ぶん共よろしく」と新校主の方を向いていきなり挨拶した。番匠は慌てゝ姿勢を向け直すと、鋭い眼差しで凝つと穴のあくほど彼を見凝めたが、すぐさまぬからぬ態度で、

「この方は？」と彼には直接こたへないで、谷と彼の方へ等分に眼を配りながら訊ねた。

谷は突然な小田の出現に一寸訝しい顔付を見せたが、

「小田君ですね、よく踏み止つてくれました。これからは私達に代つてしつかりやつてくれ給へ」と半ば番匠に紹介の意味をこめて云つた。

谷はこれまで番匠との數度の會見で、その精神力の剛さや人間的な重壓に、奇妙にも殆んど尊敬に近い氣持を抱いてゐた。どのやうな修養や鍛練がかうした人格を形づくるのか、隙ひとつ見せぬ應對振りや押し出しの堂々とした点、洗練された話術に、むしろ奇怪な感じに打たれるのであつた。

「小田君と仰言やるんですか。私が番匠です。都合で本校はこれから私の手に移つて貰ふことになりましたから、精々君達の御協力も、お願いしておきます。」

彼は突ツ立つたまゝ自分を凝視してゐる小田から何か殺氣立つたものを感じて、彼に眼をつけたまゝ云つた。

小田はこの日あくまで異端的だつた、彼は番匠に威壓された痛ましい谷を見てゐると、こゝでも我慢のならぬ激しい情感がむら／＼こみ上つて來るのを覺えた。理窟などはどうでもよい、たゞ盲目滅法な衝動のみが力強く全身を突ツ走るのである。そして何等の反省も自重も抜きにして直ぐにもそれに全身を任せてしまふのである。われ／＼は彼のかうした利那の態度を、決して所謂正義派とは名付けたくはない。正義が何より純粹に、人の本然的な相に寫し換へられる時、はじめてさう呼ばれてよいとは思ふが。——

彼は急にこやかな愛想笑を浮べると、相手の堅い表情をのぞき込むやうにして話しかけた。

「いや有り難うございます。——しかしいまも一寸小耳に挟んぢやつたんですが、番匠さん、僕の方にもひとつそのコミッションといふのを頂戴できないものでせうか」

「——」

「同僚にも随分わからず屋が居りましてね、只今の會議でも妙な義理立てから怪しからぬ結束を固める氣配があつたもんですから、それを説伏するのはひと苦勞しましたよ」

番匠は彼に注目しながら、流石に少し緊張して厚い唇がきつと引き締つてゐた。愛情を何處かへ忘れて來たやうな彼には、人と相對した場合、必然に警戒とか心構へといふものが我身を護り立て、對者の分析に全力を傾けるのであつた。

「それで——？」

「つまり……そのコミッションですな」

番匠は頬を綻ばせると竝びのいゝ白い齒をみせて笑つた。

「はッは、冗談をいふ」

小田は眞顔で、

「いや、決して冗談ぢやございませんので、是非頂戴したいんですよ」

「君、わしはこの通り忙しい。冗談を掛け合つとる暇はないでな、又この次にしてくれんか。」

「だから冗談ぢやございませんと申し上げてをるんで……」

「あんたはわしを強請る氣かな？」

「實は今度の貴方の御處置で、僕は太變いゝ虚世訓を學んだと思ふんです。つまりこんな風に面白可笑しく世

渡りしていつたら、所謂俗事百般に苦勞することは先づなからうと悟つたんですが」

「それが？」

「つまり僕はその餘德を頂かして欲しいんですよ」

「餘德？」

「コミッションといつてもよろしいのですが——」

「どういふ意味ぢやね」

「僕の願ひを聞いて下さればそれでいゝんです」

「云つて見給へ——」

小田は笑ひながら暫らく考へてゐたが思ひ切つた風にすばりと云つてのけた。

「新明知校責任者のですね、舊職員への深甚なる陳謝の披露です」

「陳謝ぢや？」

「その通り」

すると番匠は大きく椅子の上に身を反り返して、小氣味の悪い皺面をしかめて哄笑した。

「あんた、なか／＼面白いことをいふ。まあその氣慨でひとつしつかりやつてみてくれ給へ」

しかし小田は躍起になつてつゞけた。

「いや、お逃げにならなくてもいいでせう。餘人なら兎も角、僕は貴方のお手には乗りませんよ。——番匠さん。かうなればいいんですがね、僕の考へでは、貴方は關西の財界が生んだ最も強勢な惡玉の一人です。貴方のそのコミッション根性は何處に於ても恐ろしい位成功を博してゐます。世間の人は貴方を承認してゐるし貴方御自

身も多分さうお思ひでせう。しかし唯一つ、同じこの社會の機構の中でも、學校といふ存在にだけはさうある筈がありません。學校は貴方の考へてゐるやうな物質的な性質のものぢやありませんからね。たとへ今度の御處置で貴方が本校の主に坐つた所で、この世界に何より必要な精神的な集結といふものが果して貴方に向けられませうか。學校を營利的な食ひ物にしようといふ魂膽でゐられるのならたつた今お止しなさいと忠告致します。失禮ですがこゝは貴方などの出るべき幕ぢやないんだ。僕達は貴方をかうして見てゐる限り承認しませんよ。成る程貴方は金力で形式は捏つち上げられるかもしれませんが、しかしその時はもうそれは一つの營利會社にすぎませんでせう。しかしたとへ氣まぐれにせよ、わざ／＼こゝまで出て來られた貴方に僕はいふのです。陳謝なさい。それには貴方の名譽を傷つけぬやうな、適當な形式がある筈です。いや若しそれが貴方に不名譽を齎らしても、僕ならむしろ尊敬しますがね」

小田はさう云つて傍の椅子にどしんと腰をおろした。

谷は彼が番匠に喰つてかゝつてゐる間、始終おど／＼して小田の脚の邊をつゝいたりしてゐた。しかし彼は、變屈で通つてはゐても、眞逆小田にこれ程の度胸があるとは思つてゐなかつた。やつと落着に近づいた事態の安穩を祈りながら、一方では小田の云つたことが、いち／＼肯綮にあたつてゐて、自分達も云ひたくてたまらなかつたことを代辯してくれたといふ心安さは感じてゐた。しかし長上として部下のこの揚言に沈黙してゐる事でもきないので、一應は小田をたしなめる必要はあつた。

「小田君、かりにも此の方は君に長たる人ではないか。もう少し言葉をつゝしんでみたらどうかね。」

しかし番匠の方はけろりとしてゐて、少し白髪の混つた長い厚い眉毛をびんと張り上げて部屋の方へ視線を集中してゐた。その態度には狡猾などいふ氣色は既になくて、高い精神的な、強力な一個の個性を構成してゐ

る、何か執拗なものを持つた人のやうに自若としてゐた。

暫らくして彼は口を開いた。

「それであんたは此の僕をどう見とるのか」

小田は即座に答へた。

「貴方は殆んど狂に近い拜金主義者です。その通りでせう。番匠さん。」

「左様」

「そして貴方の何より非難さるべき点は、唯そのみが貴方にとつて人間的であることです。貴方は人情などといふものを何處かへ置き忘れて來た人だ。拜金的な物欲——たゞそれだけが貴方には人情でせう。」

「小田君、それでは僕の考へを云はして貰はう。世間では僕のこれまでの行爲に、皆あんたと同じやうな評判を立てゝ來をつた。拜金狂といふ言葉もこれまで何度も耳にしてきた。成程僕の行動は、相手の禍福を左右するといふ結果を生んで來たかも知れん。しかし僕は君達のやうに、それを道德的に罪惡だのどうのとは思つてをらん。優者といふものは何時の世でも強い者のことぢや。強い者は必ず勝つ。それがもう劣等者の仲間に入つていくやうになつた日には、直ちに又別の者がその代りに立つてゐる。しかし負けた側の者と云つても、負けたからといふて何の不幸、不平等を啣つことがあらう。僕の考では、これくらゐ平等な規則はない。生存の競争をして負けるやうなものは、たとへそのことが無くても、無力でなんで虚しい地位を守りつゞけてゐることが出來よう。何時かは必ず同じ運命を辿るものぢや。失禮だがあんたのやうな若い者は、淺薄にこれを不平等視して強者を非難するが、負けた弱者の本當の幸せといふことを知らんからぢや。強者が何時までもその位を守れぬやうに、弱者は相手に自分の劣等な地位を自覺させられたからは、すでにそれだけで強い者を脅やかすに充分ぢや。」

負けて挫けてしまふやうな不甲斐のない者は問題外として、意志の力さへ失はずば、負けるといふことが結局勝つことになる。儂がいま自分の思ひ通りに事をやつてのけることができるのも、つまり儂の力がその人達よりもすぐれてゐるからで、云ひ換へれば儂はいつかはその人達に打負かされにやならんといふ立場にある。儂の存命中にでなければ儂の子に、孫の世にきつとさうした更迭はおこる。この勝負の堂々廻りこそ佛教でいふ因果輪廻であらう。とはいへ儂の意に適ふ者は所謂運命論的なものではない。儂は人間が生きていくと同じ位の重要さで意志の力を強制する。強者も弱者も、互に負けまい勝たまいとして鎬を削り合ふ所にこそ人生の生甲斐があり、更に又勝つた時の愉悅の情味にこそ人生の醍醐味があらうといふものぢや。それに比べて、人情といふ邪魔者に溺れて五十年の短い命を徒食して了ふ輩こそ儂の蛇蝎視する所で、儂の行動はかういふ者と永久に平行して對立していく——」

その間小田は殆んど惻れみに近い眼で彼を見續けてゐた。彼の持論は論理的にみても矛盾だらけであり、人間の一等汚らしい所だけに偏つてゐることが彼には情なく思つた。

「貴方は恐ろしく功利的なんです、——貴方の仰言る強者として」

「一体、功利的でないものが存在するかね。」

「します。」

「また例の、人間的の何たらいふもんぢやらう——？」

「それがなくては、僕達は完全な生活をお営むことができませんでせう？」

「小田君、人にはそれ／＼の生き方といふものがある。功利的でもなんでもええ、あんたは其處まで儂の生活に干渉することは許されん筈ぢや」

こゝで小田は席を立上つた、ずつと黙つてゐた谷は、八木から聞いてゐたまた例の暴行沙汰かと思つてぎよつとして、

「小田君、君も教職にある身として粗暴な言動は慎んで貰はねば困るぢやないか。こんな日で君も氣が立つてゐるのは無理もないが、それは君ばかりではない、今日はこのまゝ黙つて歸つてはどうかね」と一寸たしなめてから、「番匠さん、申し譯のない次第でございますが、今日の所はひとつ御容赦願ひたいものでございます……」と座を圓めやうとした。

小田は温情に溢れた彼の言葉を聞くと面を和けて、

「谷先生を前に置いて、出過ぎた只今の態度をお詫び致しますが、しかし——」と再び昂然と番匠の方に向き直つていつた。「番匠さん、只今の通り部下たるべき僕と長たる貴方とは根本から立場が相違してをります。改めて貴方からの御處置をお待ち致しますから、存分に御處分下さい。」

しかし番匠の方は相變らずけろりとしてゐて、案外だといふ面持で云つた。

「妙なことをいふ。君のいふ處分とはこれ（彼は自分の頸を叩いてみせた）のことかな。詰らん。君にも似合はんぢやないか。今もいふ通り儂は他人の思想や言動には一切干渉せん主義ぢや、君は君で君の考へ方をして生きて行けばよいではないか。——いや、實をいへば儂は君といふ人間が氣に入つた。これで儂も若い頃には君くらの氣概があつたが、君のいふことを聞いとると其の頃のことを思ひ出してどもならん。まあ儂に對する遠慮などは抜きにしてどん／＼思ふことをやつて御覽——」

小田はこの言葉を聞いて殆んど文句なしにはつと身をすくめた途端、ノックもなしに一人の男が這入つて來た。

それは意外にも宮田だった。例の横肥りのした醜い体を不似合なだぶ／＼の洋服に包んで、何が嬉しいのか馬鹿に陽氣な身振りで這入つて來た。彼は向ふむきに立つてゐるのが小田とは氣が附かないで、番匠を見るといきなりきい／＼喋り出した。

「先生、實にうまく行きましたよ。初めは四の五の小理窟をこねた連中も、何しろ此方の言ひ値がいゝもんですから直ぐ兜をぬいで了ひましてな。皆で百坪にもなりませうか。此の通り氣候は申し分ない土地ですから、今にきつと素晴らしいものが出來上りませうよ。」

彼は何時の間にか番匠の傀儡に抱き込まれて、この間の災難を福に化してゐるのである。番匠から學校用地として果樹園用の地面の斡旋を頼まれて交渉して來た所であつた。番匠の考では、作業として生徒に其處を栽培させ一方ではその成功を見越して利前をあげようといふ目企みだつた。

「御苦勞様でした。こゝの景色や氣候がどうも儼にはびつたり來るので、ひよつとしたら大阪から引越さうかとも思つてゐる所で、今後もしろ／＼お世話になるでせう。」

そのうちに宮田は小田の居ることに氣がついた。

小田は、先刻から、眼の前にゐるこの奇怪な男を、改めていろ／＼考へ直してゐた。底知れぬ勢力と意力とを兼備してゐる彼の不思議な力に、先程谷が感じたと同じやうな尊敬に似た氣持を抱き始めた。折に觸れ時に觸れて、露骨な感情を剥き出しに吐き出して／＼彼自身に引き比べて、むしろいま彼の非難した人間的なものを遙かに反つて豊かに持つてゐるやうに思へた。俗情を超越したものと高い本當の人情といふものが、彼の辛辣な功利精神から匂つてゐて、餘りにそれが純一で偏執的なが故に、赤裸々なものに觸れた時の、あの一種神聖な感じにすら打たれるのだつた。

彼は、いま宮田が傍に來てゐるのを殆んど知らなかつた。

宮田は小田に氣が附くと、一寸珍妙な表情を浮べたが直ぐ下品な愛想笑にかへて、見識もなにも打ちやつた拙い挨拶をしてしまつた。

「小田さんですね。どうもこの間は御無禮しました。あの時は何分あの騒ぎで氣が立つてたもんで、つい失禮な物云ひになつて了ひまして、勘辨して下さいよ——それから谷先生でございますね。永らく御無沙汰してをります。何時ぞや選舉の折はいろ／＼御便宜を計らつて下さいまして、まだ御禮の挨拶にも上らぬ始末です。」

流石に番匠に氣兼ねして今度の事件のことは言はなかつた。

しかしこの時小田の表情が急變した。見る見る滿面に朱を引きながら、恐ろしい激怒の眼を宮田に向けると、殺氣の漲つた顔をぢり／＼彼の方へ近寄せていつた。外の者も、餘りに突然な彼の鋭い氣勢に一瞬はつと息を呑んだ。

「君——君、なにを、しようといふ……」

宮田は脅えた眼をして憶病に後退りし始めた。

「ん！」

ぶつつけるやうにかう怒氣を吐き出すと、小田は体ぐるみ彼に打つつかつた。鈍重な宮田の体が後の物置棚にどんと倒れると、小田はその上にのしかゝつて、まるで氣狂のやうに容赦なくぶん殴りはじめた。頭を戸棚の中へ半分めりこませた宮田は、ひい／＼悲鳴をあげながら、何時までも所きらはすなぐられ通した。

血相を變へた小田が校門から走り出て來た。眞蒼な面は薄桃色に充血してゐるし長い亂れた頭髮が頬のあたりまではふれてゐた。ネクタイは正しい位置から二三寸も右つちよに外れてチョッキのボタンの所がひどく破れてゐた。

彼は高台を何度も躓きながら降りて了ふと、停車場に近い畔道を歩き出した。

野良は田植の百姓達で賑はつてゐたが、丁度午下りで、小田の歩いていく道筋には五人六人と腰をおろして飯のあとの煙草をうまさうに吸つてゐたが、彼等は二人と集まればもう直ぐにも眼の前に聳えてゐる「蔦の學校」の噂話だつた。事件の性質上、噂は公然によくない方へ尾鰭をつけて擴がつたが、校長の不正を云つて憤慨するものもあるし、ひどいのは宗派そのものの財政的な紊亂を口にするものもあつた。

小田の荒々しい足音が彼等の耳元を過ぎ去ると、一齊にその後姿を見送つて直ぐ彼が明知の教師であることを了解したが、彼の只ならぬ物々しい氣勢から又噂が噂を生んでいつた。

この地方の特徴として、午後になると海から吹き寄せる西寄りの風が強くなつた。空は綺麗に晴れ上つてゐたが、停車場前の廣場の邊から濛々とした砂塵が吹き上つてゐた。この廣場の片隅に小さなブクスタンドがあつて、十二三の可愛い少年が雑誌や新聞を賣つてゐるが、子供好きの小田は彼とは大の仲良しで、何か買ふときまつて小さな頭を一廻り撫でゝやるのであるが、少年の方でも小父さん小父さんと懐いてゐた。小田がその前まで通りかゝると、少年は何時もの通り「小父さん」と呼んだ。險しい表情を硬ばらせてゐた小田は思はず殺氣を消されてそちらへ優しく微笑を向けた。

「小父さん、——の今月號が來たよ」

少年は深い片脛を寄せてその本を片手で持ち上げたが、書物の名と彼のあどけない聲とが矛盾してゐて小生意

氣なのが一人の可愛いさだつた。小田は要らないと手を振りながら、「埃が眼に入らぬ様に注意し給へ」といつて停車場の構内へ這入つていつた。

風が當らなくなると今度はむつとする程の蒸し暑さである。何度も額に浮き出た汗を拭ひながら電車を待つてゐたが、十五分毎の定時が馬鹿に長いやうに思へた。ずつと向ふの鐵橋から小さく大阪行の急行が姿を現はした時、彼は眩覺を感じて、豆粒のやうな車体が一瞬の間に彼の前を通過して又元の小さな点に消え去つて了ふのではないかと思つた。その時彼は始めてかすかな頭痛が催して來てゐるのを感じた。

電車が走り出すと颯々として入つて來る風で汗は一度に引いてしまつたが、頭痛と胸重はその振動と轟音でひどくなつて來た。この線路はずつと海岸線に沿うてゐて、大阪の近郊に入るまで可成り見晴らしのいい風景もあるのだが、彼は風通しのいい運轉手臺の柱に倚りかゝつたまゝで、ぢつと顔を俯向けて頭痛を鎮めやうと努力してゐた。速度が迎も遅いやうに感じて、R驛を過ぎた頃一寸顔を上げて前方の青い安全信號に視線を放つたが、遠方の踏切の邊で日光を反射してゐる鋭い白光に眼を射られて又顔を伏せた。

「危——」

運轉手が素頓狂な聲をだして、大きく電氣ブレーキを一廻轉させたのはその刹那だつた。踏切小屋のない小さな踏切で、突然現はれたトラックと僅かに車体が接觸したのである。乗客は異様なショックを感じて急停車の反動と共に將棋倒しになつた。小田はその瞬間自分の頭をかゝへるやうに庇つたが可成りの強さで脇腹を打つた。

損傷はどちらにも殆んどなくて、昂奮した運轉手が線路脇で横向きになつて止つたトラックの運轉手に、「馬鹿野郎！」と大聲で怒鳴つただけで椿事は終つたが、小田は思はぬ出來事で益々激しい頭痛を感じて、大阪のA町へ着いた時にはもう倒れさうだつた。

五時近い街は混雑を極めてゐた。そろそろラッシュ・アワーになつてくるし、波の様な雑踏の中から、夕刊や映画の前賣券の賣子がかん高く叫んでゐる。人波の直ぐ頭の上には、下降された廣告球が押しつけるやうに皺だらけの姿を浮ばせてゐた。彼は頼むやうにしてタクシーを拾ふと其處からそんなに遠くない進藤の家のある平野町へ命じた。その間、片肘を靜かに耳にあてゝ、割れるやうに痛む頭を支へながら凝つと眼をとじてゐた。――どのやうな深い完全な思索の後でも、ある刹那の前にはもうくも潰えてしまふ自分、堅實の世界を憧れながら、さうした刹那毎に情意的な強い感性に支配されて理性を没する自分、退嬰し切つた氣持で環境に抱かれやうとする不甲斐ない實踐力――健康な時は打つちやりな態度でかうした嫌らない己れを省りみなかつたが、こんな風にひどい肉体的な苦痛に襲はれてゐると、――本當のものが自分にはない、自分は絶えず本當でない自分の周圍を駆けめぐつてゐる、まるで綱引繩の中心のやうに、正しい位置を右や左にゆれ動いてゐる、統一された純粹な自分といふものが掴めない――果して己れには全く統一されたこの自分といふものがあるのか、それはたとへるべきな立場でもよい、何でもよい、もつと單一化された自分だけの世界が欲しかつた。彼は番匠が、一つの大きな信念を抱いてあらゆる環境に截然と處置していく強い姿にまぎれなく嫉妬してゐた。あの姿は彼のやうな多元的な矛盾撞着した姿からは起つて來ない。あの時彼に何か崇高なものを感じさせたのは、外でもないその純一な信念にあつたのだ。――どんな小さな片隅の世界でもよい、世俗的に貧しい立場にあつてもよい、小自我を群合した大きな強い自我は、どんなに強い勢力を身に感じさせるであらう。小田はその境地にこそ、全ての行爲、全ての思想の生れ出づべき源泉があると思つた。そして彼にこの理想を要求するのが何時も友人進藤だつた。彼は凡ゆる妥協迎合、順應の精神を排斥した。内から迸り出るもの――只それだけが自分のものだ。彼はさういふ、彼は一舉手一投足にもすべてポーズを厭ふ。ポーズは汚らはしく、知的な人間がその特權を悪用する唾棄すべき逃

避所だと口癖のやうに云つた。――

雑踏街のタクシーはバスよりも市電よりも遅い。長柄橋から南はこの時刻車の屋根が連續する。十字路から十字路へ、信號を待つてゐる間にでも車列を歩き抜けさうに思ふのだつた。新京阪から左へ曲つて閑散な平野町へ出ると直ぐそこには喫茶街とアパート街がある。

小田は車を降りて頭をかゝへるやうにして裏通りにある進藤の下宿までくると、案内も乞はずに二階へ上つて行つた。

「進藤、進藤」

さう呼びながら襖を開けると、意外にも佳子もそこに來てゐた。彼女は今頃Tデパートの六階で半襟を賣つてゐる時刻だつたのに。二人は話し込んでゐたらしい。佳子は灰色の、少し重い感じのする服を着て粗末な籐の椅子に坐つてゐた。

小田は二人を眺めて暫らく放心したやうに立つてゐると、煙草を灰皿に置いて進藤が何時もの落着いた様子で立つて來た。

「――どうしたんだ。そんな眞蒼な顔をして」

佳子も向ふで立上つて、不安さうな面持でこちらを眺めてゐた。

「うむ」

小田は眼がくら／＼するので、しつかり柱を掴んでゐた。

「先刻から頭痛がするんだ。迷惑でも少し憩ませてくれないか」

さういふともう堪へ切れなくなつて敷居の上にくづをれてしまつた。

佳子が飛んで来た。

「小田さん、小田さん！」

彼女は膝に小田の頭をかゝへ上げると、突つ立つてる進藤を見上げて云つた。

「兄さん、お願い。しばらく部屋借して上げて頂戴な」

彼は顔を顰めて苦痛をこらへてゐる小田を見てゐたが首を縦にふつた。

小田は横にされると、暫らく唸つてゐたが間もなく眠り込んでしまった。

「ひどい熱だわ、氷貰つて来る間一寸見ててね」

彼女は身軽く飛び出すと、すぐハンカチに氷塊をのせて歸つて来た。

「氷屋がないので、お向ひのアイスクリーム屋で貰つて来たわ」

「この様子ぢや、番匠にやつつけられたらしいね」

進藤は椅子にかへつて少し冷ややかな調子で云つた。佳子は一通り手當がすむと、枕元にべつたり坐つたまゝ小田の寝顔をみつめてゐた。彼女はかうした小田を見てゐると、彼が力弱く見え、時にはあれだけ粗暴な行動をもつ彼の魅力が失せて行くやうに思へた。

「俺は小田のかういふ所が可厭だわ。一寸した衝動ですぐ何も彼も分らなくなつてしまふ所はこの男のむき出しで實にいい、その昂奮が醒めて後悔したり反省したりして自己分析をやり出すと、何だか人間が汚なく見えて来るからね」

佳子はたとへ兄が小田に現在好感を持つてゐないにしろ、かうした折に、その人の前でづけ／＼云つて了ふ彼の好惡の表現に一寸鼻白んだ。それだけに、全く力を失つて其處に横はつてゐる小田に、むしろ同情の念が湧い

てゐた。

「いまこの男を非難する譯ぢやないが、その様子では又何か仕出かして来たんだね。そしてその後ですぐこの通り行き悩んでゐる。宮田を殴つて、直ぐ詫びたのも丁度この調子だつた——」

「でも、それだけに自分つてもものよりいい状態に努力してるんじゃないかしら？」

進藤はこの小さな抗議を聞いて笑つた。

「そりや、お前はここの男に惚れてるから分らないさ」

「でも兄さんは御自分の思ふ通りの人でないと皆輕蔑してしまふんでせう。身勝手だわ」

「俺は本當のことを云つてるんだ」

「だつてそれだけぢや小田さんが可愛さうぢやな」

佳子は愛人を前に置いてその人を兎や角いふ辛らさを感じて兄が恨めしかつた。純粹な立場を、たゞそれだけ固執しつゞける兄のやうな性格に、彼女は尊敬はしても到底愛を感じ得なかつた。小田の矛盾した——悪く云へばデレタント的な性格の方が、遙かに強く彼女の胸に迫つて来るものがあるのである。

「結局だね、苦勞して自分以外の世界へ足を踏み入れやうとしても、矢張り依然として己れは己れだから、何時かは馬脚を現はすものさ。俺は小田の様な激し易い性格の持主に、さういふ迎合性を持たしたくはないんだ。そんな歪んだ人間には、必らず鼻持ならんポーズがつきまとつて来るからね。この点は小田は實に弱い。誠實に自分の道さへ歩んで行けば、俺は小田らしい行動のどんなものでも是認するよ」

佳子は一寸憤慨に似た氣持を湧かせながら、深い眠に落ちてゐる小田の額に手を當てたが、熱は少しも下りてゐなかつた。

「ね、普通の頭痛でこんなに熱があるものかしら。兄さん、さう喋言つてばかりゐないで一寸みて上げて頂戴な。これちや、餘程あるらしいわ」

眞劍に自分を見上げていふ佳子に誘はれるやうに、進藤は椅子を離れて病人の額へ手をやつた。成る程一寸恐ろしい高熱だった。

「今日の暑さに當てられたのかも知れんな」

「あたし、お医者へ行つて來ませうか？」

「うむ。だがこんな埃だらけのズボンをして、何處を歩いて來たといふんだらう。お前はそこに居たらいい。

俺は一走り行つて來てやらう」

彼は上衣を引つかけると出て行つた。佳子是小田の額に浮いた汗を拭つてやりながら、今宮の汚ない安下宿で翻譯の下受けをしてゐた時分の彼を思ひ出した。大切な辭書を買つたり買ひ戻したりする苦境にあつて、早引けの時彼女が寄つたりすると、何時でも機嫌よく迎へて苦しい中から應對して呉れた。神經質な彼の細心な應對振りが、その時の貧乏と一緒に思ひ出されて來るのである。二人の月収が併せて百圓になれば結婚しようなど、他愛のない相談を持ち掛けてゐたのもその頃だった。

進藤の紹介で「薦の學校」に奉職する様になつてから、その額は一躍して超過したが、神經病が昂じて、時々佳子がお茶をつき合つても、一言も云はずに別れてしまふやうな氣まづい折もあつた。不健康なその頃の生活がたゞつてゐるのだから、週末には小旅行するやうにすゝめるのだが、極端な外出嫌ひの彼は、彼女の忠告も退けてきかなかつた。佳子は苦しさうなその顔を見凝めてゐると、小田に何時か來るべきものが來たやうな氣がしてはつとした。——このまゝ永久に眠り込んで了ふぢやないかしらと思つてみたりした。

餘り暑苦しいので半開きの窓を全部開け放すと、偶然埃つぽい通りを賣塚の女生徒らしいのが四五人、樂土ら

しい背の高い男を取り圍むやうにして騒ぎ散らして通りすぎた。彼女は詰らぬものを見たやうに途端に顔をそむけたが、やはり自分の若さがいとほしいやうにも思へて、胸をついてくる憧れを抑へ切ることはできなかつた。

「佳子さん」

突然低い聲で床から小田が呼んだ。

「おや、お目覺め？」

小田の眼は高熱で赤黒く濁つてゐた。

「頭痛とむかつきがして仕様がななんだ。學校から電車に乗るまでは大したことなかつただけどね」

佳子は彼の枕元に寄り添ふと額の手拭を裏返しながらかつた。

「きつと暑さにあてられたのよ。あたし達だつて頭がふらふらするやうな日なんですもの」

「進藤は？」

「いま——一寸出て行つたの。すぐ歸つて來るつて」

「醫者でも呼びに行つたんぢやないかな——大したことないんだけど。——それはさうと佳子さん、濟まなうけどね、時間に差支へなかつたら一寸頼まれて欲しいことがあるんだ」

「なあに？」

「久寶寺の僕の家へ行つてね、机の抽斗に入つてる預金帳を持つて來て欲しいんだ」

佳子は呆れて彼をみつめた。

「まあ、お金？ どうしてそんな變なこと云ひ出すの」

「いや、かうやられるとね、馬鹿に氣が弱くなつて年寄じみた氣持になるんだよ」
小田一寸淋しさに笑つてすぐ眼を閉ぢた。

「まあ小田さん。たかが暑氣あたりの頭痛ぢやないの。それにそれ程の病氣にしても、なにもあたし達の間でそんなこと氣に掛ける必要もないんぢやない？ 水臭く聞えるわ」

小田はそれをきいてもう眼頭を熱くしてゐた。

「有り難う」

風が強くなつて、埃っぽい空氣が開いた窓から吹きまくつて來た。

「ひどい風——」

さういつて佳子が窓をしめに立たうとすると、ぱつたり前にのめつて思はず兩手を疊についた。

「あら」

振り返ると小田の熱っぽい眼が輝いてゐる。

「え……………」

小田はぶる／＼震へながらそれでも一生懸命抑へてゐた佳子の裾を放した。

進藤はまだ歸つて來さうにない。もう薄暗くなつた部屋の中で、二人の情熱だけが蒸れ返つてゐた。

(未完・六・二八)

花 ち は な

谷 口 陸 男

夫と一緒に郷里の町に歸つて、其處に住む事に決めた日、A夫人は夫に云つた。

「ねエ、ダットサンを買つて、それに乗つて歸りませうよ」

「うん、いゝね」

夫は仄明るいシェードを見上げながら頷いた。夫の柔和な眸が近眼鏡の下で、電燈の光りにうるんで見えた。

「歸るまでに、まだ四十日位あるわねエ。私、それまでに、うんと自動車の本を勉強して運轉出来るやうになるわ。素敵ね……………」でも、此處からだと途中で二晩位泊らなければいけないわね……………どうませう」

「泊つたらいいだらう」

「でも、さうすると大分汽車より高くつくわね」

夫は此の稚い妻の言葉に微笑んで、頭を椅子の背にもたせかけたまゝ、ぢつとシェードを見つめたまゝであつた。心の中に、うら／＼と妻へのいとほしさが湧き上つて來るのを感じながら。

夫は妻の心の若さを限りなく愛した。それは紺青の蒼穹の如く大らかな愛情であつた。夫にとつて妻が、そのやうに何時までも心の若さを失はないでゐる事は、實に不思議であつた。と云ふのは、夫の知る限りに於て、妻の家庭は亂脈を極めてゐた。妻の父は、郷里の近郷から裸一貫で出て來て一代に數萬の富を積み、そして、その死と共に、その富も亦、人の手に散じた。謂はゞ、風雲兒であつた。彼は斯うした人にあり勝ちな、放縱な生涯

を送った。妻を幾人も代へた。卑賤な女に戯れた。そして、終ひには正妻と幾人かの妾とが同居してゐると云ふ風評まで立つた。妻も或る妾の子であると云ふ風評であつたが、三歳の時、母に死別したと云ふ事實の外は、夫は何も知らなかつた。何も知らなくても良かつた。澤山の異母兄弟の間に母親も無くて育つた妻が、ゆがまず、ちびこまず、ひがまず、素直に眞直ぐに成長した事だけ知れば澤山であつた。若竹のやうな心をそつと抱き續けて來た事だけ知ればそれで良かつた。妻の心はその家庭を知つてゐる夫にとつて不思議な美しさであつた。或は風評のやうに、妻は妾の子なのかも知れない。そして、妻もよくその事を知つてゐて、例へば、身を痛める砂の粒を抱いた眞珠貝のやうに、小さい時から美しく、哀しい努力で、負はされた悲しみを包んだのかも知れない。それとも、或は、生れた時から玉のやうに素直な美しい心を持つて來たのであらうか。

「ね、何考へてらつしやるの？」

「うん、うん、ガッリンは何所いら邊で切れるだらうね」

「さうね……三島邊りかしら、それとも濱松かしら……いやアね、私もつと勉強してから御答へするわ」

「序でだから、伊豆を一廻りしても好いね」

「素敵、素敵」

妻は少女のやうにはしやいだ聲で云つた。

夫は妻の仰向いた口元に出來た多くぼを、親離れした小猫を掻い撫でてやる慈しみで、みつめてゐた。

窓の外の鳥籠の中には、紅雀が二羽、そつと寄り添つて眠つてゐた。

チオ、チオ、チオ、チオ、チオ、チオチンクス！ 何處かで夜鶯が鳴きしきるやうな夜であつた。

結婚して六年目、A夫人は夫と一緒に郷里の町に歸つて來た。素晴らしい努力で、A夫人が、「自動車運轉の理論と實際」を讀破したにもかゝらず、自動車旅行は實現されなかつた。乗心地の好い空色のクツションの代りに硬い三等列車のシートであつた。けれども、それはそれで良かつたのだ。赤く塗つた格子戸のある家並みや、土塀の多い士族屋敷、町中を流れてゐる小川、さては土塀や緑の葉越しに見える家の破風、黒塗りの門構へなど、郷里の町は寂びた澄み切つた落着きの中に、相變らずぢつとしてゐるやうに見えたから。日毎に變貌を強ひられてゐる大都會の感情で、事を運ぶには餘りに身についた落着きであつた。そして、薄暗い大きな古びた夫の家には、丹塗りの柱の蔭に夫の養母が、亡くなつた養父の遺産を守つて、ひつそりと待つてゐた。

しんと靜まりかへつた此の家の薄くらがりの中にはどんなに足掻いても追ひやる事の出來ない執拗なものが身をひそませてゐたに違ひない。それは傳統とか習慣とか世俗とか、そんな簡単な言葉では片付けられないものであつた。夫は若い頃、それに負けて、自ら短刀で喉を突いた。今も夫の蒼白い喉元に残る傷痕がそれだつた。けれども、それは、青年時代に唯一人で歌舞伎を見に行つては、何時もほろ／＼と涙を流してゐたと云ふ夫の神經のさせるわざであつたのかも知れなかつた。夫は妻の純白な心が、此の薄くらがりに染まる事を惧れた。併し、それは夫の杞憂に過ぎなかつた。妻の心は思つたより強靱だつた。と云ふよりも、そんな暗さなどは心に懸けない風であつた。

暖い太陽の光りが裏の倉の白壁に映えてゐる日A夫人は着いた荷物の中から紅雀の鳥籠を取り出して、縁側にかけた。紅雀は暗鬱な長旅から開放されて、カラリと晴れた空を見上げては羽搏いた。

「あら、猫よ」

夫のインパネスを荷物の中から取り出して胸にかゝへたまゝ、A夫人は庭下駄を突かけて、バタ／＼と猫の後

を追つて裏庭に出た。

指を突き込めば染まりさうな空の青さ。

A夫人は夫のインバネスを叩きながら桿にかけた。

母家と中庭をへだてた離れを借りてゐるR青年は机の上の本に落してゐた眼を上げて、時々、此のA夫人の姿を眺めた。窓の下には日毎に延びて行くおぼろの葉が一面に青々と擴がつてゐた。

「お前……A子、此の鯛でぬたを作つておくれ」

「ハイ」

母に呼ばれてA夫人が答へた唯一聲の返事の中に、もうR青年は空氣の中にポツカリと出来上つた眞空の球のやうなものを讀み取つた。それは誇張も、氣取りも、それから嫌惡の感情も交へない純な、ありのままの落着いた返事であつた。

R青年は眼を上げて、呆然と空を見上げた。あるかなきかの風に、桿にかけられたインバネスが揺めいてゐた。

日が經つて從つて、A夫人の純な、美しい心は、誰の胸にも泌みて行くやうに見えた。凡ゆる人達が、水のやうに透明な感情に牽かれるやうに見えた。故意と装ふのではなかつた。白々しい世辭を云ふ譯ではなかつた。氣に入らうと媚びるのではなかつた。痛ましい試練を受けて來た心は、それだけでもう美しかつた。自ら流れ出て來るやうな素直さなのだ。

「紅雀が御好きなんですか」

R青年は洗濯物を取り入れに來たA夫人に尋ねた。

「えゝ、とても可憐らしいんですもの。私がそばへ寄つて行くと、嬉しがつて騒ぐんですのよ。小鳥だつて眼の色や、一寸した動きで喜びや悲しみを表すものなんですのね」

「それは……長く飼つてゐれば解るでせうね。併し、紅雀は……」

R青年は口をつぐんだ。紅雀は可憐ではあるけれど、何處かに、眞直ぐに延び切らない、いぢけた所があるやうに思へる。貴女は僕の父のやうに文鳥を飼ふに適しい。純白な羽根と赤い嘴の文鳥は、應揚なものごしの中に、おほどかな悲しみを湛へてゐる。

「Rさん、紅雀はお嫌ひ？……あら、あら、Rさん、おひげが生えてゐますわね。ちつとも知らなかつた。まアをかし……」

「鼻の下は待つても、なか／＼生えて來ないんですよ。あごの方はこんなですけれどね」

「あーら、私ちつとも知らなかつた。あんなに生えてゐるんですね。さうしてらつしやると中學の漢文の先生みたい」

「實はあごの下を延ばさうと思つてゐるんですよ」

「いやだ、お止しなさいよ」

A夫人が行つて了ふと、珍らしく明るかつたR青年の感情がみる／＼しんと冷えて行つた。R青年は、A夫人より三つ年下の二十三歳、少女のやうに若やいだ感情と、年上の女らしい温かさと、時として一緒になつて現はれて來るA夫人の心をR青年は驚きの念で想つてみた。か細い自分の神経をしみ／＼と感じながら。

R青年は又しても呆然と陶磁器のやうに、つややかな空を見上げた。

枯れた櫻の様態たる枝が、象眼のやうに空にくつきり延びてゐた。

R青年は大きな倉と倉との間の離れで、丁度石垣の間に生えてゐるから、麥のやうに、そつと生きてゐた。R青年の生活感情には、名門の家の長い間の貴族的な教養が、生み残したやうな、輝く典雅なものがあつた。そして、それは即成のものと違つて、眞底から光彩を放つてゐた。けれどもR青年のそれは、若しかすると何かのはずみに、ブツリと切れて了ひさうな美しいが、脆く、果敢ないものをひそませてゐるやうに思へた。例へてみれば、研ぎ澄まされた薄刃の短剣のやうなものであつた。暗く磨いた大理石の床の上に落すとポロリと眞二つに折れて了ひさうな美しさであつた。

養母が高野山に参詣して明日歸らうと云ふ日、夫は急用で東京に發つた。A夫人は大きな家に、R青年と唯二人取り残された。

「Rさん、何か本を貸して下さらない？」A夫人はその夜、R青年の部屋を訪れた。

「どうぞ、何れでも御読み下さい。尤も僕は小説しか持つてないんですけれど——」

「えゝ、どれが好いかしら、『惡の華』ありますわね。これ貸して頂かうか知ら——。でも、主人が歸つて來ると、お前さんの解るんかいつて笑ふかも知れませんわ」

「え、御主人何處かへ御出かけになつたんですか」

瞬間、A夫人にはR青年の脆い果敢ない情熱が胸を突き通るやうに思へた。四月馬鹿——ふと、A夫人の心に明るい惡戯の感情が湧いた。

「まあ怖ろ」

ガタリと天井に音がすると一緒に、A夫人はR青年の眸を凝視めながら、そつと膝をいざらせて寄り添つた。けれ共、R青年の眸は動かなかつた。それは、徒らに動きまはる感情に目もくれないで、その中の眞實を見通す

やうにちつと落着いた靜かな眼であつた。A夫人はからまはりをしてゐるやうな一瞬前の惡戯心が消え失せて、不意に、何か眞實なものがひた／＼と心を充すやうに思つた。

雨戸のすき間から流れ入つたのであらう。A夫人の寢室には甘く、むし暑い桐の花の香りが、一面にちつと淀んでゐた。ポタリ、地面に叩きつけるやうに桐の花が散る音を聞きながら、A夫人は眼を閉ぢて、R青年の脆く果敢ない心の美しさを想つてゐた。

例へて云つてみれば太陽の光りと月の美しさなのであらうか。太陽の光りがなければ生きられないのに、人間の感情の不思議さは、太陽の光りを忘れて、冷い月の美しさを戀ふ。恩恵も、罪過も與へない、唯ポツカリと浮き上つたやうな美しさだが、何の夾雜物も持たない美しさそのものが人間の心に喰ひ入るのであらうか。或は又、A夫人が、あのやうに若々しい氣持を何時までも持ち續けてゐる事が、いけないのであらうか。

A夫人に誘はれるまゝ、R青年は、肩を並べて木下闇の道を歩いてゐた。道の凹みに出來た水溜りが暗い空をして、映して、時々光つて見えた。

「主人など、もう駄目ですわ。金で買へない女なんてないなどと口に出して云ふ位ですもの。あれでも、昔はよく小説や詩などを讀んだんですつて」

「併し、それは口先だけの事で、本當はさうではないいでせう。とは云ふものの本當は僕もその言葉には賛成だな」

「あら、あら、そんなにお若くてそんなぢや大變ですわね」

A夫人はR青年の妙に冷い美しさはこんな所なのだと思つた。

「併し、實際、小説だとか詩だとかに我を忘れて耽溺するのは、餘り好い事ぢやないんぢやないでせうか。例へば『惡の華』でせう。あの中に歌はれてゐる頽廢の美はたとへ人生の眞實の美しさにしろ、繪空事の美しさにしろ、それに觸れる事に依つて、無意識の中に吾々の健康な常識が失はれて行く事は本當ですから」

「さうですわね」

何處かの暗闇の中に桐の木が群つてゐるのであらう。あの甘く、むし暑い香りが鼻を打つた。

「御主人、黙つていらつしやいますね」

「えゝ、外の人にはあんなぢやないんですけど、何うしたんだか貴方には――。妾、何時か尋ねた事があるんですのよ。貴方、Rさんに一度でもお早うを云つた事があるのつて、そしたら一遍もないんですつて」

A夫人はクツ／＼と笑つた。R青年には解つてゐた。A夫人のあの美しい心を通して、二人の男の本能が、異つた二人の本質が、意識しないで、もう反撥し合つてゐるのだ。

「どうして御子さんがないんですか？」

「主人が餘り欲しがらないもんですから……」

「あの御主人が？」

「えゝ、母が心配致しましてね。此方へ歸つたら温泉へでも行つてみたらつて云ひますのよ。何にも知らないものですから。Rさんは子供好き？」

「えゝ、子供には時として、本當に神のやうな好さを見出す事がありますよ」

又しても、胸を刺し貫くやうな脆く、果敢ない美しさ。

「でも、もう御主人お歸りになるんぢやありませんか――案外今晚邊りぢやないんですか」

「えゝ、でも今晚はまだ歸りませんわ」

「御主人が御歸りになるの嬉しいですか」

「……愚問ですわね」

R青年は心の中を見透された思ひで、闇の中に白く浮く夫人の横顔を眺めた。夫人の顔は造花の夕顔のやうに白んで見えた。プツリ、斷ち切れたやうに變貌するA夫人の心をR青年は不安に思つた。

けれ共、その夜、夫は少し旅やつれてして歸つて來た。A夫人は心の奥底に輝くあのR青年の脆く果敢ない美しさを、何うする事も出来ない内に、そのまゝ夫を迎へなければならなかつた。A夫人は曾つて感じた事もないやうな、切ないハラ／＼した思ひで夫に對ひ合つた。

『『惡の華』があるね』

「えゝ、Rさんにお借りしたの」

『『惡の華』は、僕も學生の時、翻譯をしようと思つた事があるんだよ。だけど、ボードレールのものは難しくてね』

「まア」

夫の心は磨き切つた鏡のやうに、何の曇りもなかつた。けれ共、A夫人の感情は、夫のその澄んだ心を想ふ以前に、少女のやうに、R青年の事に觸れたがつた。

「Rさん、随分ボードレールのもの持つてらつしやるわ」

「ふーん、僕も可成り持つてゐたんだが、學校を出る時、みんな賣つて了つたのさ。けど『惡の華』は讀んで

みて面白い？」

「さうね、いゝわ。所々に青い線で印がついてゐるんだけど、きつとRさんがおつけになつたのね」

氣付かなかつた、今夜も、あの甘く、むし暑い桐の花の香りが、部屋中に淀んでゐる。夫はR青年の風評をするA夫人の何處かに、今まで見た事のない、閃きが、瞬間、輝くのを見たやうに思つた。R青年の脆く、果敢ない美しさが、A夫人の素直な心の中で光るのかも知れない。それとも、R青年の脆く果敢ない美しさへのA夫人の憧憬が、時に、きらめき通るのかも知れない。

「お茶、入れませう？」

「あゝ」

時計の音が、ちつと鉛のやうに動かない桐の花の香りに波紋を作つて、十一時を報じた。夫は顔を上げて時計の文字板を読んだ。近眼鏡が、電燈の光りに幾段も縞を作り、咽喉元の傷痕がはつきりと見えた。

夫が氣にかけてゐた不吉な此の家の暗い蔭にも拘らず、A夫人の心は一層若やいで行つた。夫は無量の愛情で、妻の心を見守つてゐた。けれども、その愛情が、餘りに廣く大き過ぎたのであらう。A夫人の心は、夫の愛情の中で、中心を失ひ、手がかりを失ひ、戸惑ひながら、ゆら／＼と傾いて行つた。

「紅雀、『惡の華』の御禮に、Rさんに上げますわよ」

「好いだらう」

「でも、Rさんには紅雀の世話出来ないでせうね」

「それはさうさ」

「いゝわ、私がするから」

「親切だね」

夫の眼が近眼鏡の下で惡戯さうに細んでゐた。

「えゝ、私、Rさん大好き。だつて、とても好い方ですもの」

うふんと鼻で笑つて、A夫人は紅雀の鳥籠を下げて、R青年の部屋に來た。

「これ、飼つて下さらない？」

「僕に、下さるんですか？」

「えゝ」

「併し、僕とても、世話出来ないんですけど」

「いゝえ、私が致しますから」

A夫人は片眼をつぶつて、ペロリ、舌を出して見せた。

「うちの主人ね、『惡の華』の翻譯をしようとした事があるんですつて。でも、とても難かしいんですつてね」

R青年にはA夫人の感情が信じられなかつた。一瞬前の惡戯さうな氣持は、影を消して、もう新しい夫への尊敬と信頼が聲音の中に流れてゐる。移ろひかける夏の日の光りのやうに、頼れない感情ではないか。

その夜一夜、R青年は家を明けたまゝ、歸らなかつた。

泥足に踏みにぢられた晝顔の花。まぶしいまでに輝いてゐた初雪がじめ／＼と汚れて行くやうに、R青年のあの脆く果敢ない美しさが煤け、薄汚れ、踏みしだかれて、倒れてゐる。A夫人は女の本能で、顔をそむけなが

ら、母と姉と、R青年の美しい心を愛惜する女の感情とで、その汚れを洗はうとした。

「Rさん、頭痛？ お風邪でせう？ アスピリンと水持つて参りました」

「アスピリンは持つてゐます」

R青年は枕から顔を上げない。A夫人は窓から半身を乗り出して、寝てゐるR青年をちつと見つめた。疲れ歸つて来た子供をいたはる心と汚れた美しさを洗ひ撫でてやる心。

R青年は枕に額をつけたまゝ、痛いまでにA夫人の視線を感じた。心を、洗ひ流れて行く、母の感情、女の感情。R青年の心はほの明るんで行つた。薄刃の短剣の臺りはすーつと去つて、透き通るやうに輝く美しさ。

けれ共、R青年の心の美しさは、何時かはホロリと脆くも砕け散る事があるだらう。A夫人の心の中を、R青年の脆さを有つた美しさを愛惜する感情が切なく流れた。

「ね、Rさん、明日から、も一人女中が増えますのよ。それで私とても閑暇になりますの。そしたら、Rさん、一日位何處かへ遊びにいらつしやいませんか？」

「さうですね、御伴しますよ」

パサリ、紅雀がとまり木を離れて、羽搏いた。朝の空を、六月の白い薄れ雲が、靜かに光つて流れてゐた。

自分でも自分の氣持解らないんですの。A夫人は云ふ。さうであらう。餘り身近になると花の姿だつて解らない。身近になる所ではない、もつと切なく近寄つて、自分とすつかり、一緒になつてゐるのかも知れない。もう、のつびきならない所まで来て了つてゐるのだ。

蒼茫と暮れて行く海岸の砂の道。A夫人とR青年は雨に追はれて夕闇の中を歩いて行つた。ふりかへれば、暗

鬱な薄墨色に海は暮れて海鳥は群れ、白い波頭が碎けて潮騒の音に變り、足許には濱ひるがほの花がほの浮いて見えた。

自分で自分の氣持、恐ろしいんですの。A夫人は云ふけれど、それは本當なのであらうか。それなら、何故こんなにA夫人の心は美しいのだ。疑ひや恐れの影響も見えない程、A夫人の心は若々しく美しい。

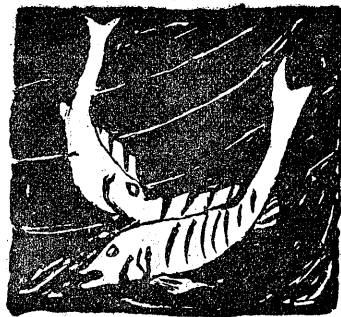
合歡の木の中に續いてアカシヤの森、しつとりと濡れた雨の日の薄くらがりの中にアカシヤの花の甘い香りが融け込んで行く。砂を踏む足音も融け込んで行く。A夫人の泉のやうな心も。

折りとつたアカシヤの花のついた小枝を、ひゆつと空に打ち振つた時、もう道が盡きるのであらう、R青年も、傘さしかけて寄り添つたA夫人も、ポツリ、雨に打たれるアカシヤの葉越しに、にじんだやうにぼやけた電車の赤いシグナルを見た。

——自分で自分の氣持解らないの——

言ひ合したやうに立ち止つて、對ひ合つたが、瞬間、A夫人は、例のR青年の脆く果敢ない美しさが、見た事もない程、しゅんと鋭く激しい輝きを發するのを感じた。A夫人は眼眩んだやうに、眼をつぶつて、そつとR青年の胸にもたれて行つた。心の中で、その輝きに手を差し延べながら。

R青年は茫然と眼をあげて、暗い空を見つめた。甘いアカシヤの花の香りも、むせるやうな草いきれも何も彼も、融け込んで行く木下闇の暗さであつた。



推移

— 習 作 —

佐 守 信 男

九月×日。

唯今、貴女からの手紙を読み終つた。

唯、許しを乞ふ。お詫びをするつて分らない。

あの時も自分は決して能動的でないと頑張りながら、今になつてお許しを乞はなかつたのが氣になり出し、きぬはとても苦しい想ひで居りますつて解せない。

そんな形式的なことが、何が苦しいのだ。

解らないのは、貴女だ。女だ。

あんな態度に自分から出ながら、人に話すとする——そんな恥知らずなことはあり得ないでせうけれど、現に貴女は、兄と貴女とのことを私に話しましたね。

その兄が貴女に爲したとおつしやつたことと多分、同轍になるのでせう。所詮、そんな点で、見榮を張りたがるのが、女でせう。貴女でせう。

それは、貴女の体に最初觸れたのは私です。假令、指先のみではあつたにしろ、貴女のおつしやるやうに觸れたのです。

併し、意識的ではないと云はれるでせうけれど、さうさすべく、人の床へ手を出したのは、誰なのです。

貴女は、兄と自身との關係に就いて、その時話して居られた。

貴女は兄に、曾つては熱烈に愛されたと云ふ。それ故に、前途への思慮もなく、立派な家庭の主婦たる身が、愛子までも振り捨てゝ出て來たといふ。

全く暴虎馮河だ。

それが、その二ヶ年の後の現在、暗礁に乗り上げて、苦しんで居る。

解り切つた結末ですが、解らないのが世の常の戀愛當事者です。

あの頃は、あんな人ではなかつたけれど。

上弦の月が鱗雲を、果無げに裏から照らして居た夜。

「僕は、自分の妻となるべき人には、一生に一人のみ逢ふものと信ずる。そして、僕の場合、その女は、貴女を除いては無いやうに思ふのです」

と初めて心の中を、妾に云はれた頃の貴方の兄さん。

胸と腹との間に、一つの空所が出來て、それを中心として、ぐん／＼上下に離れて行く感じ。そして、その極、

胸が急に空になつたやうな息苦しき。

子供の手を曳いて居た私の、耳まで眞赤になつたであらうあの時。

それから後、毎夜のやうに、子供を寝付かせて、歸りの遅い主人の歸宅するまで、紅金目の背戸を越えての果無い逢瀬を、楽しんだあの頃。

裏庭の夕日に映えた藤浪の下に案内しては、そつと紅茶を入れた春の日。その茶碗に、その葩が舞ひ込んだものでした。それをも敢て飲まれた兄さん。

妾の摘んだ菊の花の香を二人で匂つた、あの頃は。

本當、此のやうになるやうな人とは、想像だもしなかつたのだが、此の方だけは、不思議に、何時までも、何んな時が來ればとて、妾を愛し續けて呉れる人だと思つたのですけれど、今は、自分から遠く離れ去つた人の心の糸を、苦しくも手繰り、三拜九拜して、日々學校からの歸途、夕食に立寄つて貰ふ。それにのみ、一縷の望みを掛けて居るのだといふ。そして、うたかたよりも果敢無く、何よりも狂はしき、自分の行末の妾が髻髻するといふ話。兄の周圍に存するありと凡ゆる女に、恐ろしい程の嫉妬を、燃やし、滾らし、それにぐんぐん鞭打たれ、拍車をかけられ、「立走り、叫び、袖振り反^{さか}倒^{たふ}び、足ずりしつゝ、^{たちまち}頃^に……」の状態にまで、逐次、追ひ込まれて居る現在だといふ話。

淋しさうだつた。

苦しさうだつた。

貴女の黒目勝ちの目が、瞬間、ちかツちかツと光つて居ました。
泣いて居られたのです。

そして、貴女の泣かれるのを私は初めて見たのです。

私も涙を催す程でした。

自然、縋りに來る貴女です。その指先を偶然玩んだ私。

獨りでに順應した形でした。

あり得ることです。

けれど、その刹那、しまつたと思つたのです。

それは、貴女の指の内側の關節に、餘りにも若々しい血の高鳴りを聞いたからです。知覺したからです。

私は手を引き込めようと思いました。

併し、つが惡かつたのです。

貴女は又、外見上、自分の愚痴のみを云つて居たのです。

手には關心を持つて居ない風を、少くとも装うて居りました。

だから、直ぐに私が手を引くことは何か厭なことをした告白のやうに思へて癢だつたのです。一種の自尊心が傷付けられたやうで癢だつたのです。だからこそ、そのまゝ觸れて居たのです。遊び續けて居たのです。

高等數學を、私に手解いてくれといふ中學の教師としては好學心の強い兄を、此の上もなく、好ましく思ひました。私はその爲に、和歌山の母の家へは極く僅か歸省しただけで、殆んど一ヶ月、大阪の兄の家に居りました。兄の家と云つても兄は獨身だと云つて、然る家へ、家庭教師兼下宿といふ形で寝宿りして居たのです。事實上、一つ屋根の下で、床を列べたのは、貴女と私です。

兄は餘程、私を信じて居りました。——と云ふよりは、貴女と私とを關聯して考へる必要を少しも、感じなかつたらしいのです。偏屈と云はれて居る兄にしては、私を異常に可愛がつて呉れて居たのです。そんな疑ひを、挟む餘地の無い程、可愛がつて居て呉れたのです。

けれど、假令、嫂と弟。而も相當、年長者と私と云つても男女です。

指に觸れたのは、歸校する爲に、大阪を立つ三日前。

それまで、よくも清純な二人でした。

當り前です。私は純潔を保ち得しめようと思へば、十分出來たのです。

本當の處、貴女さへ、あの態度に出て呉れなかつたら。

貴女を責め過ぎて居るのかも知れない。

勿論、異性に對する、甘酸ばい感情を抱いて居た私だから、少くともあの行爲のあつた今、罪は私にもある。併し貴女は本當に心臓の強い女だ。

あの桔梗を薄紫に染め抜いた麻の浴衣。

乳房の邊りの膨らみの直ぐ下に、きつく締めた帶。

派手ではあつたけれど、夜の貴女には、實によく似合つた。

その浴衣も、一役買つて居たことは確かだ。

湯上りの後の薄化粧。

私には形容の出來ない貴女の香。

貴女は横たはつて居たのです。

その頭部からのスタンドの光に照し出された、くつきりと明暗の鮮明な、全く若々しさのみの貴女の顔に、あの浴衣の上の貴女の顔に、「あの人に、よく似て居る」と云つた。その次の日でした。

それが、何うして、そんなにも貴女を刺戟したのです。

その言葉が、私の貴女に對する一つの懐しみの表現だなんて。

第一、あの人つて、唯、私が口ずさんだだけのもので、誰なのです。何を表はして居ると考へられるのです。

勿論、第三日目の、あの接吻は、瞬間的に燃えたのではない。それは、判然として居る。

それから、私が「昨日、放屁しましたね」つて云つた些細なことに、何故に、一晩もかゝつて——さうです。

第二日目の夜通しです——二人は論じなければならなかつたのです。

「そんなことはありません」

「あゝ、さうですか」で良いぢやありませんか。

そして、残念ながら、私の方は割に冷靜だつたのに、一人で、短時間ではあるが、何故に、興奮のクライマックスに達しなければならなかつたのです。

明かに、その瞬間、貴女の手は、非常に細かく震へて居たし、息も凄く、荒く、熱かつた。

私の頭が、貴女の腕の中にあつたのだ。

夜中の二時頃でしたらう。

そして、私自身の冷靜さが驚く程だ。

それは、妾もだつたと今となつて、云はれるかも知れませんが、それぢや、貴女は千兩役者だ。今日洗つたばかりの髪だと云つて、私に觸れさせ、嚙ませた態度といひ、寢姿と云ひ、何が瞬間的に燃えた情熱の所産だ。

明かに計畫的であり、捏造物だ。

それで、貴女の眞意が那邊にあるかが分るのです。

然るに、貴女は事後、割合に冷静に云ふ。あんなになつた原因は、私が抱かれたがつて居たからだ。唯、それを満たしてやつたのみだと。又、貴女自身も、寂寞の情やみ難く、誰かに抱き着きたい。抱擁されてみたい衝動に驅られて居たからだ。

それは、一應領ける。併し、それだつたら、兄だけで十分ではないか。兄の和やかな様子の日を待てば良いではないか。私に對して、敢て——然り、敢てです。少くとも能動は貴女だ——求めなくつても。

又、貴女は、私が貴女を抱きたいと、以前から思つて居たといふ。それは間違ひだ。

併し、貴女は自信を以て、私の貴女に對する感情の移り變りを斯うだと、説明しましたね。

兄と貴女との間が、問題にされて居た頃。嚴格に云へば、兄が高知の方に職のあつたのを幸に、逃避行を敢行した頃までは、貴女に對して、非常な悪感を、抱いて居たと。詰り、兄をそんな風にならしめた貴女に、私が第三者として、兄に關係ある第三者として、貴女に、悪意を持つて居たと。それが、その後、——去年でした。私が、高知の山間の兄のもとへ遊びに行つた頃には、其處で、兄と共に貴女を、發見した時には、嫌惡から好感に

變つて居たと。

その證明として、貴女は、次の事件を擧げる。

仁淀川の上流。

あの橋の上で、夜。貴女が、私に兄のことに就いて話した。——と云ふよりも詫びた。

その時に、私が、そんな話を傾聴するよりも、貴女に好感を持つて居るやうな、素振りを殊更にしたと。

星も出て居ない闇夜。

唯、流れの音と——あ、さうだ。小雨が降りかけて居た——といふよりも、少し降つて居た。

橋燈が一つ、ぼつと潤んで居た。それに名も知らない二三の蛾が戯れて居る。

雨が數條、時折、反射する。

川向ふの青葉と、山肌の匂ひが風に乘つて鼻を衝く。

昨夜までは、夏祭の聖火を燃して居た鷹森が、今夜は一層の靜寂と不氣味さを以て、する墨の前方の闇の中に、呼吸して居る。

その鷹森へ、行かうと貴女を誘つたといふ。私の記憶には、朦朧として居るが、それは事實でせう。けれど、何故に、それが貴女に好感を持つて居る理由になるのです。

私が、さう云つたとしても、唯、その雰圍氣を、ロマンチックな雰圍氣を、そんな感情に魅せられて居た私が、もつと味はひたかつた爲でせう。まだある。

貴女に、私が「轉がすよ」と云つて抱き付いたといふ。

それは眞晝間で、女中の清も、傍で笑つて居たといふ。

それ程の感情を持つた、それ程の事件なら、私だつて覚えて居る筈だ。

さう云へば、さう云つて抱き付けたかも知れない。

縦し、抱き付いたからつて、貴女に對する戀慕の情からとのみ汲み取るのは何うかと思ふ。

貴女は、少し自惚れて居る。

何か満たされないものを求めて居る。

又、妾だつたら、未だ誰かが、求めに來ると、手を擴げて待つて居る。

自信ある女の普通の心構へです。

その淺はかな姿を臆面もなく、さらけ出して居るのが貴女だ。

あの當時の私の感情は、唯、異性といふものには、いざ知らず、貴女といふ特定な人には、惹かれてはゐなかつた筈です。

貴女は、私には唯漠然とした存在だつた。

それは、兄のものであり、自分の働き掛ける範圍外のものであるといふ感情が強かつたからだといふかも知れないが、より以上に、根本的要素が足りないことだ。

極言して云へば、私は貴女を特に好きではないのです。いゝえ、なかつたのです。

強ひて、私が貴女に好感を持つて居たと解釋されるやうな事件を私が捜すなら、私が中學生だつた頃、貴女の方では兄との戀愛に夢中だつた頃。——貴女は、其の頃には、私が貴女に對して嫌惡の感を抱いて居たと觀察して居るのです。——。

春の日でした。

そして山の中でした。

貴女はよく、一人で山の中を、散歩することを好んで居られました。時には、その頃、七つ程になつた貴女の可愛い、女の子を連れて歩いて居られるのをよく見受けました。

貴女が兄を初めて見、兄と話し合つたのも、あの山の散策からだといふ話でしたね。

その貴女の山の散歩なのです。

その日、私は、一人で漱石の草枕の中に出て來る池を思はすあの池の邊りを歩いて居たのです。

すると、萌え出でんとする若葉を織り込んだ楓の枝で、區切られた私の視野の中に、貴女の長身な姿を認めて、ぎよつとしたのです。私は、其の時、周圍の風物と共なる貴女を、美しい人妻だと意識したのです。眞實、その時は、さう思ひました。

貴女の前方では、山吹がその花々を震はせて居りましたし、背景としては、しだれ櫻が——殆んど散つては居ましたが、未だその優美な肢体で、心憎いまで、貴女の美しさに、力を添へて居ました。

私は、事實、綺麗な圖だと思ひました。

すると「まあ、一期さんでしたの」とさも驚いたやうな聲がするのです。

私は、ぎよつと二度目の心の震へを感じて、貴女の顔を正視したのです。

貴女は仰山な態度をしながら私に接する位置を取りました。

日に眞白く映えて山櫻が散るのです。

「小母さんの齒は綺麗。あの葩の白さ」と呟いたのは、その時です。

それから、私達二人は池の邊りで暫く、坐つて居りました。

さう云へば、貴女には、あの頃から強い粘性があつたのです。そして惹き付けようとする力が、無意識ではあるのでせうけれど、溢れて居たのです。

二人は、春霞の中に溶け込んで、黙つたまゝ、池に寫る山の木々の春の肌を眺め續けて居ました。

それから、私は思ひ出したやうに、貴女を睨つと見詰め續けました。

そして、再び美しい貴女を、意識づけたのです。

今度は、貴女の豊まんな肉体を感じたのです。と同時に、斯かる美しい肉体が、何時か必ず、土崩瓦解するのを感じて、怯えたのです。

すると私は、その時、その瞬時の貴女の体軀の崩解に對する激しい惜愛の情に、驅り立てられて居たのです。そして、もう一度、いとも美しく、得がたい貴女の肉体だといふ思惟が頭を右往左往しました。

貴女は、その時私を酷く變だと思はれたと信じます。

貴女に私が昔から惹かれて居たと、貴女がおつしやるのなら、その時の私の姿、態度からだと思ふのです。

——併し、相當古いことです。それから忘れて居るかも知れません。

けれど、これにしたつて、私自身から云へば、特に貴女に感じたといふ得るのではないのです。

私には姉がありますが、私が七つ八つの時、既に、その姉に斯かる美しい自然物の崩解に對する惜愛の情を示したと思はれる思ひ出があるのです。

私は姉の指先を見て居て、それが將來、何時の日か無に歸すといふことを酷く恐れて、切なくなり、堪らなくなつて、その指先に噛みついた時のことを、何の雜作もなく、瞼の裏に描き出せます。

その時、姉は日當りの良い部屋で、針仕事をして居たのですが、その美しく動く指先——弟の私から云ふのは變ですけれど。その縫つて居た着物の柄、姉の坐り方、そんな細々したことまで、複雑な經驗の無茶な統一として現在に残つた結果でせうが、私はその時のことを思ふと、聯想し得るのです。

そんな幼時のことと思はれませうが、何でもない事象を、後になつて、恐ろしく錯綜したものに、でつち上げる傾向を、人間は持つて居るものです。

此の場合、此の傾向に依る一つの表はれなものでせう。何故か、その時、何處からか琴の音が聞えて居たといふことも耳の奥にあるのです。

姉の死んだ夢を見て、びつしより汗をかいて、酷く泣いて居たこともあつたのです。さう、夢の中では、私は悲しさの餘り自殺して居たと記憶します。

何れにしても、私の美しい自然物に對するその美的存在から起る、その瓦解を恐ろしく怖れることから起る情緒は、そして、それに依つて、その人との別離を意識し、堪らなくその人に、愛着を感じることは、子供の頃から一貫したもので、何も貴女なるが故に、あのやうに感じたのではないといふことを、今此處で、明言して置きます。

詰り、繰り返へして云へば、私は、眞實、貴女を特に好きではないのです。なかつたのです。

それなのに、あの行爲は、今まで煩悶して居た私の心を、満たして呉れる爲だつて。

それは、お笑ひ草です。

又、貴女のおつしやるやうに、唯嫂として、愛撫して下さつただけとなれば、あれぢや酷ど過ぎやしませんか。

ね、さう考へると、貴女の方の心の中も想像させて頂きます。

貴女が、私に何等かを感じた。

今度は、私の自惚れになるかも知れません。

ぢや、全く感情を離れた理由として、私は斯うぢやないかと思つたのです。

その理由は可なり複雑です。

斯う云つた時、貴女は考へましたね。

そして、「妾は、兄弟二人までの童貞を取らうとは思つて居りません。昨夜、妾が『貴方は未だ女を知らないのです』と云つたのからの判断でせう」と申されましたね。

さうとも思つて居りませんし、又童貞なんて何とも考へては居りません。

唯 Beguiling といふことは相手に精神的にしろ、肉体的にしろ、時にはその何れもを傷付けること、その傷付けることを極度に恐れて居るだけです。

貴女がその氣持なら譯ないことです。だから、二人の間には、そんなことは、根本的な問題ではありません。

何れにしても、私は斯う思つたのです。

貴女は、兄を無性に愛して居る。——これには異論があります。あんな状態で家を脱出して來た今、所詮、離れ得ない。外面がある。世間がある。——それ御覽なさい。兄が「外面だ。社會人としての私だ」と貴女の手足纏ひを取り擧げた時、今となつてと責めて居られたが、貴女も考へて居る筈です。寧ろ、考へが功利的になつて、兄にしがみ付いて居るのです。

けれど、此の想像は、私の間違ひかも知れません。貴女は意外に胸の大きい方。感情の強い方だ。或は何處ま

でも、愛し續けて居るのかも知れない。

併し、普通の頭での解釋ぢや、疑問符付き問題です。

どちらにしても、貴女は兄を離すまいとして居る。然るに兄の方は、どちらかと云へば、貴女から去らうとして居る。

古びた鎖をちぎらうとして居る。

凡ゆる周囲の束縛の下で、踊らされて居る傀儡的存在から逃避しようとして居る。

「愛さねばならない。愛されねばならない」

此の負擔を、此の重荷を、取り除いて了ひたいと考へて居る。

これも、疑問符付き問題ではあります。けれど事實上の成行きでせう。

で、貴女は焦心して居る。何んな手段でも採りたい。ね、何時か貴女は、阿部定の事件を話しましたね。妾も、あれになるかも知れないつて。兄の出様では、貴方の兄さんを殺すのも辭せないつて。これが本當の女の姿ですつて。

さうかも知れません。

けれど、矢張り貴女は胸の女です。

トルストイのアンナカレニナ^{Anna Karenina}の終曲を自分の身に比べて、思ひ起すのでせう。いゝえ、私は貴女が死を恐れて居るとは申しません。實際、何でもないのでせう。本當です。誰だつて瞬間的に考へりや何でもありません。そんな状態にある貴女。

そして、その手段に私を使はうとしたのです。

一步進めて云へば、私を利用したのです。

さうです。貴女は、これまでも私を利用して居る。第一、私が貴女の家で敢て寝宿りするやうに骨折り、それに依つて、兄が貴女の家へ足繁く行くことを計つたのです。

その兄から一番可愛がられて居る私に、先づ、最大級の愛の表現を見せたのです。

それに依つて、貴女達の間の溝^{キツプ}を締めようと試みたのです。

さうです。「將を射んとすれば、先づ、その馬を射よ」この手です。貴女の場合、やりかねない手です。

けれど、これは危険過ぎます。一つの目的に向つて猛然と突き進む方法で、双曲線を描いて、全く反対の目的地に着くことがあります。而も、恐ろしい目的地です。

で、私の想像は違つて居た。と覺つたのです。少くとも、聰明な貴女が斯んな明瞭すぎる間違つた路^{コース}を探る筈がない。と思つたからです。

だから、云つて氣を損じさせるよりも、と思つて黙つて居たのです。

悪かつたのです。これは許して頂きたい。

併し、貴女の云はれたやうに、兄が好きだ。無性に好きだ。だから兄の好きなものは（女は別として）矢張り好ましきものだ。とは、さうとも思はれますが、これは若い娘さんぢやなし、好きとは主觀的のことで、さうは解釋出来ないと思ひます。

貴女好きなものは、假令、兄がそれを好きであらうと、あるまいと、貴女が好きだからです。

何れにしても、あの原因は、今まで述べ來つた要素が、或は、それ以上のものが、色々に錯綜して織り上つた結果だといふことには、肯定します。

どちらにしても、私は敢て、私の心の片鱗だと云ひますけれど、その片鱗が汚れたことは、確かです。

人間は對象物を、何の聯想もなしに考へない。見ない。と云ひます。「赤」と云つても必ず赤いもので、一定の形を有し、一定の空間内にある、或る限定されたものを考へると云ひます。

同様に、「女」と云つてもでせう。今までは、「女」と云つても、或る朧げな、美しい一物を聯想した筈の私が、貴女を、あの態度に出た貴女を、少くとも此處暫くは、髣髴さすこととせう。

それだけでも罪です。

又、遠くに得難いもの、と考へて居た女を、近々と、組し易いもの、接近し易いもの。と思はすやうにさせたのは、誰です。

えゝ、全く貴女の罪だと考へます。

併し、振り返つて、本當は貴女のための罪でないのかも知れません。

私ぐらゐの年頃になれば、女を知りたいものです。話したいものです。抱きつきたいものです。抱かれないのです。

此の感情が、唯偶然、手近にあつた貴女を對象として現はれ、行動したのだとも云へます。

考へやうでは、私の方から詫びねばなりません。

若し何の感情も持つて居ないのだつたら、兄に高等數學を教へる。と云つたつて、貴女の家で宿らなかつたらいいのです。えゝ、敢て、それを口實として、甘酸はい感情を玩ぶ爲に、玩ばれるために宿つたのが、私だつたかも知れません。

頭の何處かで、そんなことを吐露せしめる曲者があります。

ありますとも。「嫂さん」と呼んだ時に、それは故意の技巧ではあるかも知れないけれど、「むゝ」と呟いて、夢見るやうな目付で、唇を高く突き出すあの薄紫の浴衣の上の顔。

月明りでしたね。窓の格子の影が貴女の白い顔に縞を作つて居ました。

美しい構成美でした。

そして、ごくりと感極まつたやうに、唾きを飲み込む様子。

えゝ、私は今考へても堪らなくなります。

貴女の素足。貴女の襟足。そして私の目指しの直ぐ向ふで呼吸して居る貴女の産毛。少くとも、私の弱点を、突つき廻す生物を醸し出し得る貴女です。

あれぢや物凄い貴女です。

何時までも、心も姿も、若い貴女です。

——と思はすだけ、それが、技巧であり、お芝居であつたのなら、恐ろしいのです。千兩役者！ 又、悪魔と云ひたくなります。

玲瓏たる月の光の中に、泳いで居た大阪の家の軒並を、芝居の背景だ。と云つて昵つと見入る感傷を、あの夜更け、持つて居られましたね。

貴女だけでも、何時まで経つても胸の女と云ひたい。千兩役者にしたくない。

「何故、そんなに見詰めるの」と十九の乙女のやうに、含羞んだあの時。

そして「妾を好きになつたの」と淡々たる態度で、私を昵つと見詰め返へす。

「駄目よ」と眉根を美しく動かし、私の体に觸れる。

それから、一定の加速度を以て、私を壓すあの時の情熱を、あの夜の粘性を生み出し得る貴女。

もつと貴女の千兩役者でない所以を裏書きしてみたい。

貴女は、可愛いゝ子供までも捨てゝ兄の感情の坩堝の中に飛び込みました。

貴女は、その子供に、「庭先の風鈴が鳴つたら、母さんを思ひ出して頂戴」と書き置きして——これにも、私は貴女の心の奥で靜かに愛子に對して睥睨して居る冷たきものよりも、貴女ほどの年齢の方には、もう萌し得ない筈の感傷性を見つけるのです——兄との戀愛の炎の中に突き進んだのです。

そして、現在、猶、その餘燼を——と云ふよりも、赫々燃えて居る。そんな感情の持主です。

え、疑問です。

戀愛は、複數の異性に等しく持つ愛を、その中の一人に集中する排他的な愛だと云ひます。私も、さうだと思ひます。

然るに、貴女は今でも、兄を無性に、愛して居ると云はれます。事實、さうでせう。

そして、あの夜。

えゝ、感情の人は人でも、矢張り、千兩役者です。悪魔です。

そして、私は、貴女に對して愛情の感なんて、少しも持合せて居りません。

馬鹿な！ 負けるものか。(未完)

山 峽 か ら

樋 口 幸 夫

私が始めて高校入學に對して疑惑を持ち、それに悩まされたのは中學を卒業した年の夏だった。その夏、私は高等學校の入學試験準備の爲め、親類の者がある發電所の所長であつたので、その世話である山峽にあるその發電所の出入口の水番の家で一夏を過す事になつた。一番山奥の人家までさへ三里以上も山を下らねばならぬ、その山奥の一軒家の靜かな一部屋が私の爲にあてがはれた。

息のつまりさうな一日々々を送らねばならぬ煩はしい家庭から、急に餘りにも平和な靜けさの中に放り出された私は、却つて何か落付かぬものを感じるのだつた。そのやうな平和と靜けさに満ちた生活を久しく夢見て來た私ではあつたが――。そしてその時私の心を襲つて來たのが高校入學に對する疑惑だつた。然しそれはその時全く初めて私の心を襲つたと云ふ譯ではなかつた。中學を卒業する迄はあたかもそれが自分自身に課せられた宿命のやうに思ひ込んで、高校へ行く事に對して何の疑惑も差挟まなかつた私ではあつたが、その三月の高校の入試に思ひがけぬ不覺をとつて後は、家庭の不如意な經濟的事情や、それに依つて起る家庭内の不和も鋭く身にこたへるやうになり、従つて祖父一人の他には心から賛成してくれる者もない私の高校入學に對して多少の疑惑を抱かざるを得なかつたのではあるが、それでも私は決して自分の進路を變へて高校入學を斷念しよう等とは思はなかつた。

然し今、これ迄と違つて自分一人が取殘されたやうな靜かな周圍の中で生活をするやうになつて、私はその事

に就いてゆつくり考へさせられるのだつた。その結果、私は一層深い疑惑の中に突き落されたのである。而もその疑惑は目を経るに従つて烈しくなつて行くのだつた。現在でさへ借金の増して行く家の經濟狀態、複雑な家庭、自己の才能に對する疑惑、そして今日大學卒業生の飛び込んで行かねばならぬ社會の狀態、それ等の事がぐる／＼と私の頭の中で渦を巻き、そして間歇的に起る渦と渦との間には物倦い憂鬱が襲つて來るやうになつた。そんな時私は幾時間もぼんやりとしてゐるのだつた。

日が經つにつれて、物倦い憂鬱のみが一日中私を襲ふやうになつた。まるで深い窪みにでも投げ込まれたやうな日が續いた。飽く迄もこの悩みを追究して行き、どうかして解決の緒口を見付けようとする事の出來ない自分の弱さを時には反省し乍らも、私は自分で自分の氣持をどうする事も出來なかつた。

雨の日には、細々と煙る霧雨の向ふに浮ぶ山々を見詰め乍ら幾時間もちつとしてゐた。そんな時には、眼前に狂奔する溪川の濁流も私の耳には遠い單調な響を傳へるだけだつた。晴れた日には、水番の家からず／＼と上に遡つた河原で數百人の人夫が石を運んだりして働いてゐるのを意味もなく眺めたり（その工事の現場も、亦人夫達の寝泊りする掘立小屋も私の泊つてゐる水番の家からはずつと離れてゐたので、私は彼等と全然没交渉に生活する事も出來た）裏山の杉の林の喧しいカナカナの聲の中をぼんやり歩き廻つて、鬱蒼とした杉の木立を透して來る七月の炎熱に汗ばみ乍ら、焦点の無い無數の想念に悩まされたりするのだつた。

水番の家族はまだ四十前らしい夫婦と六つになる男の子だけだつた。私はこの家族と一緒に暮したのだが、その家には、その他五十位の夫婦者が別に一世帯作つてゐた。この二家族で水番の仕事をしてゐるのだつた。殆んど一年中山の中で暮してゐるその人達は俗世間では見る事の出來ぬ程淳朴で親切だつた。男の子もよく私になつき、主人夫婦が勉強の邪魔になるからと、私の部屋へ入れないやうにしてゐるにも拘らずちよい／＼遊びに來

た。その男の子と遊んでゐる時には、少しは私の心も明るくなつたが、そんな時でも矢張り心の中の暗いものをどうする事も出来なかつた。

勿論、其處へ来て以來勉強には全然手が付かず、たくさんの参考書は押入の中に投げこんだまゝだつた。

その日も、私は木蔭に佇み乍らぼんやり人夫達の仕事を眺めて居た。九十度に近い炎天の下で、焼けつくやうな河原の石を踏み乍らくさんの人夫が、二十貫以上もありさうな大きな石を運んでは、組立てた櫓の中に詰めてゐた。溪川の水は数日前より眼に見えて少くなつて、僅かに河原の中央を浅く流れて居た。然し如何に陽が照りつけやうと水量が減らうと水の冷さには變りはなく、手を突つこむとひやりとする氣持のよい水であらう事を思はせる清冽な流れであつた。人夫達は絶えずそれで咽喉を沾しては劇しい勞働を續けて居た。

私は、ふとその人達と一緒に石擔ぎをやる事を思ひ立つた。二十貫前後もある石を、九十度前後の炎天の下で、朝は五時半から晩は六時半迄擔がねばならぬこの過酷な勞働で肉体を苛む事に依つて、深い窪みの中を狂ひ死する迄ぐる／＼廻り續けるやうに、毎日々々そこから脱け出す事の出来ない、苦しい氣持の堂々廻りから脱け出す緒口を見つけたかつた。いや、それを見つければ出ない迄も、肉体を酷使する事によつて、一時でも精神的な苦しさを紛らはしたかつたのである。

どうかその工事の請負師を説き伏せた私はその翌日から仕事を始めた。幾分か好奇心を含んだ輕蔑的な様子を私は同僚の人夫達から感じたが、そんな事は私にはどうでもよかつた。私は只無茶苦茶に働きたかつたのだ。下請負の若い男がやゝ輕蔑的な微笑を浮べ乍ら、それでも親切に仕事の要領を教へてくれた。先づ最初の日には石起しから始めた。それは河原の砂に埋れてゐる大きな石をトンガで起すのである。一時間もやらない中に掌に豆が出来、それがつぶれて血が流れ出した。私は掌に手拭ひをまきつけて死物狂ひに働いた。晝食の一時間

半の休みの他には午前と午後に一回づつ十五分の中休みがあるだけだつた。その日の仕事を終へる頃には身体中の節々が痛み出した。その晩は飯を食ふと直ぐ、ぐつすり寝込んだ。その翌朝眼を覺きた時にも身体の痛みはまだ癒つてゐなかつたが勿論私は仕事を續けた。

二日目からは石擔ぎだつた。先づ十三貫から十五貫位から始めた。石擔ぎは石起しより仕事がきび／＼してゐて氣持がよかつたが身体の疲勞は一層甚しかつた。その一日で私の兩肩はぽこんとはれ上つて一寸觸つても痛かつた。その翌日は肩に手拭を當て、痛いのを我慢して石を擔いだ。直ぐに二十貫位の石も擔げるやうになつた。その翌日も、亦その翌日も私は石擔ぎを續けた。

この過酷な勞働も直ちに私を憂鬱から救つてくれはしなかつた。然し石擔ぎをしてゐる間は殆んど他の事は考へなかつたし、仕事をしてゐない時でも、肉体の疲勞は時には他の事を忘れさせてくれた。

人夫達の大部分は山麓の村の者ではなく、耕作の僅かの暇に稼がうとする縣下各地からの百姓であつた。彼等は過酷な仕事に常に不平を云ひ乍ら働いて居た。仕事の劇しさと危険な事に驚いて三日位居て家へ歸る者も居た。もつとも、山奥ではあるし仕事は烈しいしするので日給は相當よく、大概一日二圓以上貰つてゐるらしかつた。

人夫の中には色々と變つた人間が居たが、就中私の心を惹いた一人の男が居た。もう五十を過ぎた年配らしく白髪混りの頭をしてゐた。

「おらとこの息子あ、東京の帝國大學へ行つとるんぢやがあ、何と云うても今の世の中ぢや帝國大學迄行かんや駄目ぢやわい。それにおらとこの奴あ、ようでけるがでう。來年は卒業するんぢやがあ、來年になりやおらもあつかりするで。金もがいな事かゝるがなあ」

その男は尙も息子のごくすぐれてゐる事や金のかゝる事を、得意さうに鼻水を吸ひあげては烏天狗のやうに先の尖つた赤鼻の下をこすりながら喋舌くるのであつた。中休みの時には、何時もこの男は一團の中心人物になつて喋舌つてゐたが、大概一度は息子の自慢話が出て來た。

「ふん、息子が大學へ行つてゐて、親爺がこんな山奥へ石擔ぎに來てりや世話ねえや」

感心した様子でその男の話の聞いてゐる人々の中には、かう云つて冷笑する者も時には居たが、その男はこんな言葉は耳に入らないやうな振りをし乍ら息子の自慢を續けるのだつた。

私はこの男の話を聞き乍ら暗澹とした氣持になるのだつた。

もう腰のまがりかけてゐるこの男がこんな山奥でこのやうな劇しい勞働をしてまで息子を大學へあげねばならぬのであらうか？ 大學はそのやうな價值のあるところであらうか？ その息子はこの男の犠牲を償うて餘りある程の才能の持主であらうか？ この男をして、自分の身体も顧みずに息子を大學にあげさせてゐるものは親の愛と云ふよりも、寧ろ名譽慾とか世間体とか云ふものにすぎないのではなからうか？ 息子は息子でこれを利用して楽しく青春を享樂してゐるのかも知れぬ。現に、もう夏休みが始まつてゐるのに、まだ東京から來ないが、と、この男は心配さうに云つてゐたではないか。きつと貧乏臭い田舎の家へ歸るのを嫌つて東京で呑氣に遊んでゐるに違ひない。

こんな風に私は考へるのだつた。

初めの中は、どうせ氣紛れにやる事だ、二三日もすれば熱がさめよう、と冷笑してゐた人々も、私の働き振りに真から驚いたらしく、いろ／＼と賞めてくれるのだつたが、私は苦笑して聞き流すだけだつた。

そのやうにして十日餘り経つたある日の事である。一日の仕事を終へてぶら／＼と家の方へ近づいた時、私は

家の前に一人の少女が立つてゐるのを見てハツとした。「妹が來るかもしれないですよ」さう云つてゐた小母さんの言葉を思ひ出した。男の子が「おーい」と云ひ乍ら駆け寄つて來た。私も「おーい」と答へ乍ら足を速めた。

もうあたりには夜の氣配が立ちこめて、涼氣がひた／＼と感ぜられた。平地ならばまだ太陽が山の端にもかゝらない頃であらうが、この山峽ではもうすつかり沈んでしまつて、夕燒雲が細く西の山の端に流れて居た。

私は男の子の手を引き乍らその少女に近づいて行つた。その少女はぢーつと私を見詰めてからニツと人懐こく笑つて頭を下げた。一寸小柄ではあるが面長の可愛らしい顔立で、可憐、その一語で盡きさうだつた。ぢつと人を見詰める癖のあるらしいやゝ大きな眼も綺麗に澄み切つてゐた。確か小母さんは今年女學校を出て十八だと云つてゐたが、私にはどうしても十五、六にしか見えなかつた。

「何時お着きになつたんです」

「少し前ですの」

「さうですか。よくいらつしやいましたね」

下界でなら、仲々こんな風にすら／＼と初対面の異性と喋舌はしなかつたであらう私も、この山の中では素直に氣持よく喋舌する事が出來た。

その夜私達は四人で賑やかな夕餉の膳に就いた。佐代の邪氣の無い話振りが私には快かつた。夜遅く迄話し込んだ私は満ち足りたやうな氣持を抱いて寢床に就いた。何となく新たな希望と元氣が身中に起つて來るのを感じた。

その翌朝私はどうも仕事に行くのが氣が進まないものであつた。

「素晴らしい眼だなあ」工事の現場へ出掛ける道々私は思はず獨り言を云つた。石を擔ぎ乍らも、絶えず、ニツと笑ひ乍らちつと私を見詰めた眼を思ひ出すのだつた。

女は魔物だ。どうも俺はあの眼に取り憑かれたらしいぞ。私はそんな事を腹の中で呟き乍ら苦笑した。

その晩、飯を食つた後私がぼんやりと机の前に坐つてゐると佐代が入つて來た。

「伊藤さん、何か小説を持つていたら貸して下さらない」

佐代は敷居の直ぐ側に坐り乍ら云つた。相變らず邪氣の無い瞳が私を見詰めた。

「小説？ さあ、面白さうな小説なんて持つてないけれど、一体何んな小説を讀んでるの？」

「何んな小説つて……私只讀むのが好きなものだから手當り次第に亂讀してゐるだけよ。難しい事は分らないわ。只面白いから讀むの。それだけよ」

「何んな人のものが好き？」

「さあ、そんな事分らないわ。だけど、さうね、里見淳とか谷崎潤一郎のものなんか面白いと思つたわ。林芙美子や川端康成なんかもいいわ」

「へえ、そんな人が好きかい。ぢやあ外國の人では？」

「外國の小説は殆んど讀まないから知らないけれど、この間ジイドつて云ふ人の『窄き門』つていふのを讀んだけれどよかつたわ」

「なあんだ、ジイドなんか讀むの。で、『窄き門』の中のアリサの氣持どう思つた？」

「好きだわ。窄き門つていふのはよく分らなかつたけれど、苦しみ續け乍らジェロオムを愛し續けて、而もジェロオムの愛を近よらせないで、お終ひには療養院で一人で死んでしまふアリサの氣持がたまらなく好きだわ。

お終ひの方のアリサの日記のそこを讀んでた時なんか何だかまるで魂をぎゅつと掴まれたやうな氣がしたわ。アリサがジェロオムを愛した位、一人の人を愛せたらどんな幸福かしら」

彼女は何の街ひ氣もなく素直に話すのだつた。アリサの餘りにもストイックな氣持に何となく物足りなさを感じてゐた私ではあつたが、今まで無智な女や淺薄な女や打算的な女だけしか知らなかつた私にとつて、佐代のやうなアリサの氣持を理解する女と接する事は快い事であつた。

二時間餘りも話し込んだ後で、佐代は私の持つて來てゐたジイドの翻譯本を二、三冊持つて部屋を出て行つた。

佐代は思ひの他いろ／＼の本を讀んでゐるらしかつた。嘗て讀んだ小説の話等して見ると、彼女の直觀力はその作品に對する並々ならぬ理解の程度を示して居た。それでゐて何の街ひ氣も感ぜられない彼女の素直さが私には嬉しかつた。佐代と話をしていると、私は心の邪念がすっかり拭ひ去られて、何物をも受け入れる事の出来るやうな澄んだひろ／＼とした素直な心になるのを感じた。

それから佐代は毎晩のやうに私の部屋へ來た。又晝飯が済むと水番夫婦も男の子も晝寢をするのだつたが、私と佐代は何時も縁側に腰を下して、晝の休みの短い時間を話合つた。

第一印象はその容貌の可憐さからほんの十五、六の子供のやうに思はれた佐代も、話をして見ると、心の素直さは子供のやうでも知性の閃めきは成長した一人の女だつた。然し佐代の話し振りは矢張り一点のわだかまりも秘密もないやうだつた。佐代と話をしてゐる時、私は時々小兒のやうに無邪氣に喋舌つてゐる自分の和やかな感情に氣付いて自ら微笑む事もある位だつた。

ある日の晝休み私は佐代と並んで縁側に腰をかけて居る時に、ふと云ひ出した。

「ねえ佐代、大學をどう思ふ？」

「どう思ふつて？」

「うん、僕高等學校へ行くの止めようかと思つてゐるんだ」

「どうして？ 行けるんだつたら行つたらいいと思ふわ」

「うん、僕だつてさう思ふんだけどね。いろいろ厭な事があるからなあ」

「まあ、どんな事？」

「この前も云つたやうに、僕にや両親が居ないだらう。家族と云つちやあ祖父と姉夫婦だけさ。ところが家にや借金許りで一文も金が無いだらう。結局姉夫婦に學資を出して貰はなくちやならないのさ。姉夫婦にすりや、現在でさへ暮しが苦しいのに、これからまだ六年間もたくさん學資を出すのは辛いしするから、それより就職率もいゝんだし高商へでも行つたらいいだらうと云ふんだ。然し祖父が絶對的に僕の帝大行きを主張して姉夫婦を抑へつけちやつたんだよ。そりや僕だつて、若し上級學校へ行くとすりや高等學校へ行きたいさ。専門學校へは絶對に行きたくないんだ。僕は自分が高工か高商へ行つたつて、その方面の才能も無いし、又興味も無いしするから全然駄目だと信じてゐるんだ。」

然し姉達の身になつて考へて見ると、僕は全く姉達に同情するんだ。同じ家に住んではゐるが、結局義兄は赤の他人だし、苦しい暮しの中から薄給を割いて六年間もたくさん學資を僕の爲に出すなんて云ふ事はどんなにか辛い事だと思ふのさ。祖父は何とかかとか理窟をつけて、『お前達が弘の學資を出すのは義務だ』つて云ふやうな調子できめつけて、姉達も仕方なしに祖父の意見に同意したんだけど、實際に暮しは苦しいんだし、家中にはそれによる風波が絶えないんだよ」

佐代とこんな陰氣な話をするのは勿論初めてだつた。こんな話を始めた事に對して後悔に似たものが私の胸を掠めたが、デツと私の横顔を見詰め乍ら聞いてゐた佐代が靜かに頷くのを見ると、私は再び情性のやうに喋舌り續けた。

「それに、祖父にしたつて本當に僕を愛して理解してくれて僕の高校行きを主張するのだとは僕は思へなくなつたのだ。家名とか世間体とか、そんな事許り云つてゐる祖父にとつて、僕は家名を守り世間体を守る道具に過ぎないやうな氣がするのだ」

何時もの素直な私の姿は隠れて、私は自分の本性を現はした。

佐代の顔が曇つて、瞳には悲しみの色が一杯だつた。その佐代の顔を見ると私はもうそれ以上續ける氣にはなれなかつた。佐代も私もデツと庭を見詰めて黙つて居た。

「私には何つて云つていいか分らないわ。でも、伊藤さんは自分に適する方面に進んだらきつと大成なさる人だと思ふわ。決して自棄になつたり等しないで自分の進む路を見つけて下さいな」

「うん。もうこんな話はよさう」

もう晝の休みの時間は残り少なくなつてゐた。私は立ち上ると、又もや襲つて來さうな、久しく忘れてゐた憂鬱の影を追ひ拂ひ乍ら仕事場へ急いだ。

こゝで一寸斷つて置くが、私の心は日々佐代の方へ傾くばかりではあつたが、然し私は自分の佐代に對する感情は兄妹のそれだと信じてゐた。もとゝ私には一人の兄弟も無く、たつた一人居た妹も十年以上も前に死んでゐたしするので、私は兄弟姉妹の愛に常に餓えて居た。せめて家庭が幸福であつたならさうでもなかつたであらうが、不幸な家庭生活を送つてゐる私は餘計にその感情が熾烈であつた。妹が一人欲しいなあ、私はしよつ中そ

んな事を考へて居た。だから、戀愛の對象と見るには表面餘りにも子供々々してゐる佐代に對して、最初から妹に對するやうな愛情を感じ、その後もずっとそのやうな愛情だと無意識の中に自分で思ひ込んでゐたのである。私はそのやうな自分の感情を素直な氣持で佐代に話した事もあつた。然し後になつて、如何にその感情がまやかしものであつたかと云ふ事は私は知つた。私は自分で自分を偽つてゐたのだ。その頃佐代が私に對して何んな氣持を抱いてゐたか私には分らない。恐らく佐代は私と兄に對するやうな氣持で接して居たかも知れぬ。

次の日、仕事の都合で少し早目に家へ歸る事の出来た私は、その途中、岩に腰を下ろしてずっと溪流に見入つてゐる佐代を見付けた。彼女の蒼ざめた顔に驚き乍ら私は近づいて行つた。

「どうかしたの？」

近づいて聲をかける迄私に氣付かなかつた佐代は私の聲に驚いたやうに振り返つた。やゝ面長の蒼ざめた顔には大きな腫がうるんだやうにきらりと光つて、私の心は、はつと痛んだ。寂しさうに微笑んで私の顔を見詰め乍ら佐代は微かに顔を横に振つた。

「顔色がとても悪いやうだけど、ほんとにどうかしたんぢやないかい？」

然し佐代は今度も寂しさうに顔を横に振るだけだつた。晝休みの時の話も忘れて、何となく楽しい氣持で家に歸らうとしてゐた私も、佐代の暗い寂しさうな顔を見ると、何時の間にやら心も閉ざされて胸の塞る思ひがするのだつた。

私も佐代も暫く黙つて居た。やがて佐代は靜かに話し出した。

「私は今迄人生に大した期待をかけて居ませんでしたわ。環境に左右されて人生をつまらなく過してしまふ事を考へると私はたまらない氣持がするのです。けれ共、私は自分が義理とか何とかいふもの等に縛られて自分の

人生を滅茶苦茶にしてしまふのが、私の宿命的な運命のやうに思へてしやうがなかつたんです。そんな弱い氣持ちや不可なりと思ひながらも、この豫感もしよつ中私につき纏つて離れないのでした。時々私はお酒を呑んで酔拂つて、娼婦のやうに滅茶苦茶な生活へ飛び込みたいやうな衝動に驅られる事さへありました。私は自分の人生に見切りをつけたやうな氣持になつてゐたんです。でも私はまだ若いんですし、時には戀愛や幸福な結婚生活を夢見る事もあるんですけれど、直ぐに又、それ等の事は自分の生活と餘りにもかけ離れて居る事を知つて、自分の愚かな空想を嘲笑するのです。私は幸福だと思はれる他人の生活にも、強ひてその下に醜い反面があるやうに自分に思ひ込ませる事に依つて人生の幸福を否定する事さへして來ました。けれど、人生の幸福を否定し切るなんて、そんな事は到底出来ませんわ」

佐代は相變らず溪流の流れを見詰めながら靜かに語り終へた。

佐代の言葉は私にとつて何と意外であつたらう。然し一度は極度に混亂を感じた私の頭は一瞬深淵のやうな靜かな冷い淀みに變つた。冷いものが胸の底から湧き上つて來た。

佐代にも、私の知らなかつた性格があり、生活があつたのだ。あの純眞な佐代にも……私は心の中で冷く呟いた。

夕闇が靜かに流れて來て凡ゆる影をその中に沈めて行つた。溪流は薄闇の底に意味あり氣な響をたてゝ流れて居た。

「すみませんわ、くだらない事を喋舌つて」

立ち上つた佐代の顔にはきらりと涙が光り、寂し氣な微笑は白々と闇を流れて行つた。其處には矢張りあの素直な佐代が立つて居た。ぎゅつと抱きしめてやりたいやうないとほしさが私の胸に溢れた。

佐代の現在の境遇に就いて殆んど何も知らない私は、その晩佐代が私の部屋へ来るのを待つてゐたが、佐代は到頭来なかつた。そしてそれつきり私は永久に佐代を見る機会を失つてしまつたのである。

翌朝、頭が痛いと言つて寝てゐるといふ佐代の居ない食事を済まして仕事に出かけた私が書飯の爲に家に歸つて來た時佐代はもう家には居なかつた。自分の部屋に入つた私は、佐代に貸してあつた二、三冊の書物が机の上にきちんと重ねられてあつて、その上に「さようなら」と大きく書かれてある紙片があるのを見出した。

電報が來て急に家へ歸つたといふ佐代——佐代は何故歸つたのであらう。私はぢつと「さようなら」と書かれてある紙片を見つめて立つてゐた。「さようなら」の文字が段々大きく見えて來て、ぼやけて、見えなくなつてしまつた。

小母さんが入つて來た。

「伊藤さん、きいて下さい。私は佐代が可哀想で、可哀想で……」

彼女は膝をつきながらさう云つたかと思ふと疊の上に泣きぐづれた。私は黙つて彼女の亂れた髪を見つめた。

「伊藤さんはもう御存じかどうか知りませんが、佐代はある親類の家へ養女になつて行つてゐるんです。兩親は最初佐代が可愛かつたからあの家へ養女にやつたんです。小さい時から頭のいい子でしたが、家におけば到底女學校へあげる事も出来ないしするので、丁度あの家から頻りに望まれたものですから、佐代を可愛がつてはゐたんですけれど思ひ切つて養女にやつたのです。ところがあの家では、佐代の義母の里の次男を佐代と一緒にしようとしてゐるのですが、その次男と云ふのが幾分白痴の氣味のある男なんです。土地の農學校を卒業してゐるとは云ふものの、それは知つた人がその學校の校長だつた關係から御情で卒業させて貰つたのです。佐代は勿論そんな者と一緒になるのは厭がつてゐます。けれどあの家ぢや、義理だとか、私の里に融通したお金の事や佐代

の教育費等を笠に被て、どうしても佐代をあゝ白痴と一緒にすると云ふんです。佐代ももう諦めてゐるやうですが、佐代の優しさうな顔をしてゐても勝氣な所のある性質をよく知つてゐる私は、佐代が諦めかけてゐるのを見ると一層不慙でたまらないのです。里の父や母も今更佐代をやつた事を後悔して居るのですが、お金の事もありますし、籍もやつてしまつた今、いくら佐代を可哀想に思つてもどうする事も出来ないのです。

たとへどのやうな譯があらうとも、それを笠に被て、自身の身の爲に氣の好い夫をまるめ込んで、あんな白痴と佐代と一緒にさせようとする義母が憎くてたまりません。

今日も急に電報で佐代を呼返したのは、きつと結婚の事に就いてに違ひありません。向ふぢや一日も早く結婚させたがつてゐるんです。

「ほんとに私は佐代が可哀想でたまりません……」

彼女は泣きじやくりながら疊にうつぶした。

私は黙つて窓越しに青空に屹立する立山連峰の山肌を見つめた。

暫くの間は虚ろになつたやうにぼんやりしてゐた私は、佐代に對するたまらないとほしさが胸の底からこみ上げるのを感じた。それはやがて居たたまらない焦躁と眞暗な絶望感になつて行つた。

今や、私は佐代が私の妹ではなかつたといふ事をはつきり知つた。そして佐代は私の事をどう思つてゐたのかしら？ 然し今そんな詮索は私には必要でなかつた。

その翌日、私は石擔ぎの報酬として貰つた少からぬ金を持つて、たつた一人で立山連峰のある峰を目指して登つてゐた。思ひのまゝに峰から峰へ歩き続ける積りだつた。

何もかも忘れたかつた。

青い空、白い雲、輝く太陽……そして山々が私の生活のすべてだった。かうして私は十日許りも山々を歩き廻つたが、好きな山の懷ろにさへすつかり浸り切る事は出来なかつた。

山路を歩きながら私は自分のだらしなさを考へる事もあつた。如何にも重大な事のやうに思つて悩んでゐた高校入學に對する疑惑も、一人の少女の出現に依つて殆んど忘れた私、佐代が來てからは全然興味の無くなつた石擔ぎを、佐代が、何故そんな事をしてるのか、と訊いた時、人生勉強さ、と平然と答へて、虚勢をはりながら仕事を續けた私、佐代に對する感情を妹に對してのそれだと自分に偽つて、而もそれを佐代の前で偉さうに云つた鼻持ちのならぬ私、そして今佐代の去つた爲にこのやうに打ちのめされた私。然しそのやうな自己を反省して見る事はあつても、次の瞬間私は自棄的な自嘲と共にその反省心をぶち壊して、無茶苦茶に足を速めるのだつた。

鬱々とした心を抱いて山から歸つた私を迎へてくれたものは、ますます悪化した家庭であつた。私はも早そのやうな家庭の中で高校へ大學へと勉強を續けて行く氣にはなくなつた。それに加へて、私は自分の本能にも全く自信を失つてしまつたのである。

それからは思ひ出すのも厭はしい日が続いた。高等學校へ行くのを止めて、親類の映畫監督の下で映畫の仕事をする云ふ私の決心を聞いた祖父は怒りの爲に半狂亂になつた。朝から酒を飲んでは家中の者に怒鳴り散らした。私一人の榮達を楽しみに生きてゐる祖父の心を考へると濟まないやうな氣持になる事もあつたが、凡ゆる事に己の我執を通し、私に對してもまるで人形でも扱ふやうにして自分の好み通りにしようとする祖父に對する大きな反撥心は直ぐそれを打消した。

家の中には毎日争ひが續き、私は飯も碌に食はないで巷を彷徨する日が多くなつて行つた。そしていろいろ複

雜な事情のあつた私の家庭はますます悪くなつて行つた。私は段々絶望的になり、友達の家泊つて二晩も三晩も家へ歸らない事もあつた。

そのやうな生活が續き秋も過ぎて冬となりその年も押し寄せまつた十二月、私は偶然人傳に佐代の事を聞いた。佐代は到頭私と別れてから一月も経たない中にあの白痴の男と結婚したが、一月許り結婚生活を送つた後、遂に實家へ逃げ歸り、どうしても二度と養家へ歸らないと云つてゐるが、然し養家ではどうしても籍を渡さないと云ふから、一生佐代は獨身で暮さねばならぬかも知れぬ。と云ふ事だつた。

その話を聞いて、私は久し振りで微笑む事が出來た。俺もこんな生活をいゝ加減にどうにかしなければならぬ。と私は心の中で呟いた。希望に似た明るいものが微かに心に生じた。

その後、いろいろの経緯を経たが、結局私は今かうして高等學校の生徒になつて居る。

佐代は二年前の春病氣で死んださうだ。

試合開始 四時 主審 島津氏
メンバ― 中井病を押して出場
高工 好則 原本 澤田 良浦 口澤 0 2 15 0
三友 宮秋 杉野 前相 三山 福
LW LCF RI RW LH CH RH LFR GK CK FK GK RK
高知 玖兼 垣橋 田置 上間 井上 6 3 7 0
四可 珠重 西高 飯日 三宅 中稻

前半(2-0)
四高キックオフ、直ちに敵ゴールに迫り濃厚なチャンスに恵まれるも、ものにならず、兩軍共に相守り相攻め、一進一退息詰まる様な戦が續けられてゆく。十八分逆襲に、轉じた四高フオワード、LW可知球を右に送れば、RI西垣シュートして貴重な一点を擧ぐ。これに奮起した福井十五分四

高ゴール深く攻め入るも、ものにならず。卅分逆襲に轉じた四高フオワード、RW高橋球を左に廻すと、可知飛び込んでシュート更に一点を加ふ。氣をよくした四高更にゴールに迫るも、ものにならず、戦は後半に移る。

後半(0-0)
前半二点を奮つた四高意氣大いに上り、八分、十分、十五分と敵ゴールに迫るも、阻まる。廿一分福井の老巧友則輕快なドリブルにて我がゴールに迫り、あはやと思はるるも安田深くタックルして危機を救ふ。この頃、CF重兼傷つき、RWに下り、高橋CFとなる。これより兩軍よく頑張るも得点なく、タイムアップ。大カップ燦として四高軍に輝く。(今村・池田記)

昭和十一年度北辰會費收入支出決算

收入之部

科 目	豫 算 額	決 算 額	比 較	差
經 常 部			増	減
第一款 會費及入會金	五,九九〇.〇〇	六,〇六〇.〇〇	六,〇〇〇	門
第二項 通常會費	五,〇四〇.〇〇	五,〇八六.〇〇	六,〇〇〇	門
第二項 入會金	九五〇.〇〇	九七五.〇〇	一,〇〇〇	門

第二款 特別會員寄附金	七三〇.〇〇	五九二.〇〇	五九二.〇〇	一四〇.〇〇
第一項 普通寄附金	五八〇.〇〇	五八〇.〇〇		
第二項 用途指定寄附金	一五〇.〇〇			一四〇.〇〇
第三項 永久資金寄附金	六〇.〇〇	七〇.〇〇		
第三款 預金	三三〇.〇〇	三三〇.〇〇		八九九.〇〇
第四款 永久資金積立金	三〇.〇〇	三〇.〇〇		三五〇.〇〇
收入合計	七,一九〇.〇〇	六,七五〇.〇〇	六,二〇〇	五九九.〇〇

支出之部

科 目	豫 算 額	決 算 額	流用増額	流用減額	残 額
第一款 各部	四,三六〇.〇〇	四,三六〇.〇〇	二四・六〇	二四・六〇	三三・〇〇
第一項 講演部	五九〇.〇〇	五九〇.〇〇			一・七〇
第二項 音樂部	一七〇.〇〇	一六三〇			一・一五
第三項 文藝部	四七〇.〇〇	四六四・五〇			一・〇〇
第四項 弓道部	四四〇.〇〇	四四九・〇〇			・〇七
第五項 劍道部	二八・八五〇	一〇八・六九			・一六
特別大會費	一六・四〇	一三・四〇〇			三・〇〇
臨時部	三・四五〇	三・〇〇〇			・四〇
經常費	一五・一〇〇	一一・五〇〇		一・一五	三・五一〇
特別大會費	三六・四〇〇	三七・五〇〇			

書評

日本科學發達史

寺島 樞 史著

我々高校文科生の自然科學的知識の水準は諸外國の青年と比して著しく低い事は遺憾ながら事實であり又理科方面の生徒にあつても果して彼等が思想的に科學の役割や科學的精神を認識してゐるかは疑はしい。特に我々の大部分は日本の自然科學の歴史的過程について無智である様である。

此の「日本科學發達史」は主として日本に於ける自然科學(物理・數學・天文・氣象・地理・地質・礦物・化學・醫學・應用化學)の發展變遷を系統的に叙述してゐるが同時に又各部門の歴史ともなる譯である。上古の自然科學的思想の發生より筆を起し中古の支那文明、新佛教の渡來に伴ふ科學の發展、近古の科學空文時代、火器の研究等を述べ愈々近世の科學發展の基礎時代、蘭學勃興時代、純正科學の

擡頭より現代に入つて外國文物の追隨、創業より擴張、科學燦爛時代、獨創時代に至つてゐる。最後に現代の科學政策について「科學の發現力を阻止するもの」、「日本民族の屬領性」、「象牙の塔に籠る人々」につき適切な批判を述べて結びとしてゐるが意味拘すべきものがある。本書の敘述に於ては近世に於て詳細を極めて最も興味が多い。敘述は平明で豊富なる資料を瞭然と整理し日本科學の發展の跡を追ふて分析してゐる。日本の自然科學全般に亘る綜合的智識を興ふる書として一讀に値するであらう。

併し本書に更に價値を興ふるものは當然極まる事であるが最後の章に於て科學を阻止するものとしての「教權的日本主義」を次の様に適切に批判啓蒙してゐる事である。「最近の政治家は口を開けば先づ以て國體明徴を云々し國民に此の相言葉を強要するが此れ程自國民を侮辱した事はない。古來日本民族は國體の本義に不認識であつた例はない……かかる政治家輩の頭から生れ來つた日本主義的

思想精神に支配され教育されようとするのが今日の日本民族なのである。この觀まれる日本主義、觀念的な日本精神家は被害妄想から智識偏重の弊を叫び科學を以て一個の資本主義の機關たらしめ學問の意識を觀念的に墮せしめるものである。教權的日本主義の強調は科學を枯死せしめる毒ガスに等し」と叫び又科學を阻止する學生の智能低下につき「その原因として入試準備の過重、スポーツ・映畫・レビュ・麻雀等の麻痺性娛樂機關の氾濫もその一つで……科學智識の普及に對する當局の怠慢も學生の智能低下の一原因で此の怠慢を鞭撻するものに此處にも亦觀念的日本主義の化物がある」と慨嘆し適切な批判を下し、最後に「科學は東方より」として科學の發展による日本民族の發展こそ眞の日本精神に合致するとしてゐる。此の言は只に自然科學のみならず文化科學にも同様である。我々は此の良心的科學者の熱烈なる辯に頭を下げて我々の智能低下を恥ぢねばなるまい。因みに著者は日本民族科學研究所

長。東京啓文社發行。

「青春彷徨」

ヘルマン・ヘッセ作
關 泰 祐 譯

ヘッセを愛するもの、否ドイツ文學を愛する者の久しく望んでゐた「ピーター・カメメント・ツイント」の邦譯が「青春彷徨」の標題の下に上梓されたことは大きな喜びと云はねばならない。此れはヘッセのイツヒ・ロマンでありエントヴィツクルングス・ロマンである。一人の青年が大都會と物質文明に幻滅感を抱きドイツ人の心のふるさとイタリの青空、自然、アツシジの聖者聖フランシスに救はれ自己の郷土に歸る體驗を素朴な印象風筆致に載せて描いてゐるがその間にヘッセのすべての特徴が滲み出でゐる。南國とワインの芳香、青春の甘美、ヘッセのメタフィジク——譯文は之等を流麗に日本文に移してゐる。

此の小説などからしてヘッセの反文明的思想、東洋憧憬は「シツダールタ」を

生み出すに至るのであらう。「シツダールタ」を読む前に「ピーター・カメメント・ツイント」の一讀は必要であらう。御用文學者の跋扈する現ナチス文壇よりすればヘッセは最早昨日の人であり、本書も充分に古典的な價値を持つものである。岩波文庫版。

フアシズム論

パーム・ダット著
松 原 宏 譯

現代に於ける學生階級の最大關心事はフアシズムでなければならぬ。軍人が威張つてゐるどうもフアシズムの世の中だ、なんて云ふ人々をよく我々の周圍に散見するが、此の様な單純な頭にする力、此れ以上突き込んで眞實を探究させない様にする力もフアシズムの演ずるの一つの役割である。我々の生きてゐる現代が如何なる世の中であるかを正しく科學的に認識する事は高校生徒の最大の義務でなければならぬ。

フアシズムに關して從來我國で發行さ

れたものに、新明正道氏の「フアシズムの社會觀」なる良著があるが、パーム・ダットの「フアシズム論」は、その綜合的批判的敘述を以て、現在の所最良の書と考へられる。内容を見ると第一章、技術と資本主義、第二章、安定化の終焉、第三章、經濟及び政治の新様相、第四章、フアシズムとは何か、第五章、イタリに於けるフアシズム、第六章、ドイツに於けるフアシズム、第七章、フアシズムはいかにしてオーストリーに生じたか、第八章、社會民主主義とフアシズム、第九章、フアシズムの理論と實踐、第十章、フアシズムの本質、第十一章、西歐及びアメリカに於けるフアシズムへの傾向、第十二章、フアシズムの批判、である。最初の第三章に於てフアシズムへの經濟的社會的諸前提を述べ、第四章にフアシズム本質を明らかにしその定義を述べ次の第三章には伊獨塊に於けるフアシズムの成立を記し、第八章には社會民主主義が如何にしてフアシズムの發生を助けたかを明瞭にし、第九章はフアシズムの理論

を究明、科學としてのデマゴギーファシズムと婦人問題等の實證を説明してゐる。最後の章に於て辯證法的にファシズムを批判して終つてゐる。

要約すれば本書はファシズムの發生、發展、本質、役割を批判するに當つて終始一定の立場より論理的に完全なる分析解剖を盡してゐる理論的研究書として略完成したる体系を作つてゐる。最初の三章は現代を完全に究明し盡してゐる点に相當興味を覺えさせられる。序文に於て現代の一つの道が「生産力の壓殺に努力する事、發展を阻止する事、物質的及び人的な力を破壊する事、國際的取引を拘束すること、科學及び發明を阻止すること、觀念及び思想を壓伏すること、そして互ひに戰爭を仕かけ合ひつつある制限的な・自足的な・非進歩的な・教權制的な諸社會の組織に熱中すること」約言すれば社會を一層原始的な段階へおしもどすことだ。これは人類頹廢の道だ」と述べてゐる事が我々の示唆を惹く。その他ムツソリーニ、ヒットラー等が如何にして

ファシズム政權を握るに至つたか等は詳細に論じてゐる。とに角本書は理論的敘述であるから、又辯證法的に一貫してゐるからその積りで讀む事が必要である。

又我々もファシズムの理論並に實證を我が國の諸現實諸必要に比較して適當なる批判を下し得るようにならねばならぬ。叢文閣發行。

教養と文化の基礎

田中耕太郎氏著

本書は序文に示されてゐるが如く教授が過去十年間各種の新聞雜誌に寄稿された文化の諸問題に關する論說やその他の雜文を纏めて一書とされたものです。巻初の諸論說に於て察知し得られる如く現代文化の根本問題に對し教授の「スコラの倫理的宗教的自然法」の立場が基礎をなして教授の世界觀が主張され指導を與へられてゐます。我等無信仰の徒に取つてカトリックは理解し難きもので輕々の批判は容易になし得ない所ですが、我國の現状に鑑みて又資本主義がファシズム

へ移行しつつある頹廢的な現代に於て教授のカトリシズムの實際政治への理論と實證は大いに傾聴すべきものがあり多くの示唆を與へられるのであります。

又教授は商法及び法理學の權威でありますが本書に收められた法律に關する諸論文は我等にとつて啓蒙的役割を充分に果すものと考へられ、誠に有益と云ふべきでありませう。その他の文にしても教へられる所が少くありません。

話は餘談ですが最近の教養漁りのヒーローたる高校生が「教養と文化の基礎」の如き書を讀めば教養がつくと考へてゐるやうであれば（此の様な本を買ふ學生の範疇は一定してゐます）それは憐れむべき妄想でせう。我々は田中教授のカトリシズムの如く身についた良心的な社會的信念こそその人の眞の教養を示してゐると云ふ事を此の際腦裡に留めて置かねばなりません。岩波書店發行。

受贈雜誌短評

詩上に多くの示唆を與へるものがある。
東京白塔會發行。

「白塔」自由律俳句雜誌、その俳句は俳詩と銘打たれてゐて三、四節より成る俳句形の短詩で漢字の表象とをそれに附したルビとのモニタージュによつて短詩の新鮮な味を表現してゐる。荻原井泉水は嵐雪の句にかかる形態のものが見られると云つてゐる。此の振假名の使用によつて詩の未開の原野が開かれた感じがする（特に短歌をやるものにとつて）。「白塔」誌は此等の点に於て可成り高い地位を占めてゐる。例をあげて見ると、

川上雲今日をか 多摩川に釣人けはひ
車窓。男女旅装も 雨ちしどき 馬酔
木家懸れば。眞顔に愚痴す 妻と對座
火鉢に吸殻。背打と街頭で 振向狼狽
顔？ ほふく人込へ。

記念焼却祭

燎火焔々 ここに高校生活の 夜けて
の踊 （白塔より）

此等の俳詩は僅かな一例だが、我國短

後記

御手洗の、聲もすゞしき夏陰や、
糺の杜の梢より、初音ふり行く時鳥、猶
過ぎがてに行きやらで、今一通り村雨の、
雲もかげろふ夕づく日、夏なき水の河
隈、汲まずとも陰は疎からじ、汲まずと
も陰は疎からじ。

賀茂詣りの一シーンを偲びながら早や
夏の感觸に浸る私である。編輯會議を終
へて私は籐椅子に腰を下したまゝ幾らか
疲れた眼差を書架の書籍にしばし注いで
居たが癒てふと顔を上げると、窓に引き
下した卵色のブラインドに夕焼が紅く映
つてそこへ椎の葉が薄紫色に影を落し乍
ら音も無くそよいでゐるのを見たのだつ
た。此の美しい印象を心ひそかに愛しみ
ながら、私は再び夏の雜誌を編み出した
締括りの爲に筆を走らさうとしてゐる。

だが私は今度は只問題を本號のみに限
らうと思ふ。個々の作品については別に
他の委員が書いて呉れるであらうから總

括的に本號及び最近號の諸作品が示す顯著なる傾向に就いて考察しようと思ふ。

①詩歌の僅少なること、②小説は純文學多く傾向文學絶無なること、③研究・論文の無いこと、④隨筆に佳作少きこと⑤戯曲作品の絶無なることなどが北辰會雜誌の此處一、二年の著しい傾向と云ふ事が出来よう。之等の点より歸納的に批判を與へれば、①は本校生徒の詩的精神の缺如を示し彼等の潤ひなき物質的生活や情操陶冶の不足を暗示するが如き感を與へないでもない、②は是れ決して非難すべきことではないのであるが、兎も角も一般の社會的無關心を立證してゐるものと考へ得よう、③は本校生徒の學問的情熱の缺如、研究心の不足を暗示し智能低下をも裏書きするかのやうである、④は教養の淺薄を立證するかの如くである。文學に於ける一ジャンルとしてのエッセイは身についた教養と深奥なる讀書の結果を俟たなくては到底完璧を誇る作品とはなり得ない。又隨筆は飽く迄文學に於ける一ジャンルであつて作文では

ないのである。⑤は勿論當地に於ける演劇觀賞の機會の僅少なることも原因とすべきも、一般に演劇に對する關心の少なきことが、又戯曲執筆の困難が主要なる原因であると云へよう。

本號には以前よりも稍多く原稿が集つたのであるが遺憾ながら種々の事情で掲載し得なかつたものゝあつた事は誠に残念であるがそれ等の人には今後の努力の程を期待したい。又優秀なる作品もないではなく殊に本誌の中ば以上の紙數を占める創作に力作四篇を得たのは編輯者として望外の喜びとする所であり、諸兄の愛讀を切に期待しておく。詩歌欄に佳作少なきことは遺憾であつて將來此の分野に於ける諸兄の活躍を希望する。「四高文化の問題と報告」に於ては各文化團體の主義主張が顯示され四高文化を指導せんとの氣慨に満ちてゐる事は諸兄と共に喜びとする所であつて此れこそ五十周年直前の四高文化團體の駒を並べた記念すべき姿である。之丈では依然として原稿は少ない。そして粒が揃はない。又しても

諸兄の奮起を仰望して止まない。併し諸兄の理想が數年後に於けるパンの獲得にのみ向けられ、それが爲のマキャベリスに終るならば恐らく諸兄は永遠に文化に對する青年の情熱を感じる事は出来なくなつてしまふであらう。學生時代こそ我々が我々の全人間を發見し、思考する人間に限り無き愛着を感じねばならぬ時なのである。我々の一見つもらぬ仕事を他人事と思ひ給ふな。一刻も早く自覺に至りさうして青年の良心の何たるかを理解されん事を心から望んでゐる。(十九日午後六時佐口)

「花たちばな」(谷口陸男)

作者は「花たちばな」は私の港だ、休息所だ、私は其所に横になつて「花たちばな」の香りを愛で懷しんでゐると云つてゐる。幾らか印象風な筆致で作者は此の小説を通して青春の芳香をみながらしてゐる。併しながら作者は素材を只概念的に纏めてしまつた様である。もつと現

實面に即しつゝじつくりと描寫を續けたら讀者に與へる感銘はもつと劇しかつたであらう。それにも拘はらず巧みに纏め上げられた此の小説の好さは全篇に満てる花たちばなの匂である。(佐口)

「奔流」(古小路隆義)

此の作者がものを見る眼は白々しく冷い。此の作者の手にかゝると凡ゆるものが、燐銀の様にくすんだ冷い光を放つ様に見える。時として、情熱を燃す事があるけれども、その情熱は全く衝動的で本能的で、獸じみた相貌をさへ備へてゐる。そして、好んで、金錢に執着する人間の冷酷さを描き、衝動的な感情に弄ばれる人間の醜い姿を描く。「奔流」は矢張り、さうした二つの型の對立を取扱ひ、寫實的な手法で、二人の姿をよく捉へ得てゐる。こゝでも作者は、時に、情熱を燃す。その情熱は、併し、何か據り所のない、白い樺の様な光りを放つてゐる。勿論、未完の作品で、全貌を見るべくもないが、物語の展開の巧みさ、プロットの見

事さ、文章の落着き——斯うしたものは皆、此の作者が幾度も幾度も、水に洗はれて來た證據なのだ。

「奔流」の奥底で、作者は白々しい冷い眼を光らせてゐる。併し、氣になるのは、その冷たさが、藝術家としての眼の冷さでなく、人間としての冷さから出發してゐる様に感じられる事だ。

正しい評價を次の作品に期待し度い。

「推移」(佐守信男)

之は何と云ふ特異な作品であらう。成程、文体は破格であり、形式は不完全であり、構成は混沌として居り、描寫は曖昧であり、告白はヒステリックだ。けれども、此の手記風の作品の中には、一寸他で見られない様な、すさまじい程の感情が渦巻いてゐる。文字で表すのが面倒な程の生々しい感情が流れてゐる。そしてその感情には嘘と云ふものがない。それから、捨て難いのは、作者の華麗な才能だ。小綺麗にまとめ上げられた作品には見られない荒々しい筆觸と若

若しく新鮮な文章がある。用ひられたナラタージュの手法も獨自のものだ。不完全であり曖昧であり支離滅裂であるが、こゝに山嶽の様な情熱があり、豁谷の様な美しさがある。混沌であるが故に將來性を想ふ。

「推移」の名譽はその將來が擔ふであらう。

「山峽から」(樋口幸夫)

佐守君の「推移」と並んで、色んな意味で興味深い新人の作品。第一の欠点として私は、構成の破綻を挙げよう。前半、巧まない筆致で、山峽の生活がなだらかに描かれてゐるのに、後半、少女が現れて來ると作者は山峽から出て了つて、何處か巷の片隅に坐つてゐる、そのために、作者の意圖が前半と後半とで喰ひ違つて來て、別な方向に走つて行つて了つた。第二の欠点は「私」の苦惱のモチーヴの描寫不足である。勿論冗長な必要以上の描寫は退屈だが、之では吾々の心に「私」の苦惱が沁々と迫つて來ない。けれ

ども、此の作品がこんな大きな欠点を有つからと云つて、忘れてならないのは此の作品の底を流れてゐる巧まざる作者の素直さである。何と云はう、例へて見れば、田舎家の背戸を流れてゐる小川の流れたのだ。激る情熱は無いし、逞ましい感情も、新鮮な感覚も無い。けれども銜はず、誇らず、汚れない、淡々とした、何気ないならかさは、巧みな構成よりも、立派な描寫よりも、美事な文章よりも、作家としての強味でなければならぬ。一讀、全体を蔽ふ稚拙の感じは、此の作者の本質のネガティヴなのだ。文章も水の様に無味で透明な好きを持つ。作品として大きな欠点を有つにも拘らず、「山峽から」を愛する所以。(谷口)

「英國労働黨の平和理想」(佐口透)

一月程前に譯したのを編輯前に置いて置いたので充分譯文を推敲出来ず内心忸怩たるものがある。將來北辰會雜誌に此の種ものを投稿されるよう刺戟と云ふ程の意味で掲載した。

短歌は大河教授の選によつたもので此

段御禮申上げます。先づ「光葉」(西野一良)、多くが常識的な自然觀照や身邊記事に終つてゐるのは残念で、青年としての歌人は須らく潑刺たる感情や深刻な時代の惱みを歌ふべきではなからうか。堅實な歌ひ振りで好ましい印象性を持つてゐる。捨てた歌の多くは語句の不洗練不穩當なものであつた。

田の畔に汗をふきつつ見る空や桐の喬木の花匂ふなり

は情趣豊かで作者の素質の良さを示してゐる。これは田のあぜ道に桐の木が一本によきんと立つてゐる景色だらうか。第三句目に「や」のある歌が二三あるが一つのマンネリズムと云へない事はない。最初の歌も好ましいし、「雨蛙鳴きやみし云々」の歌も巧みである。

「卯月抄」(佐口透) 歌壇の何派にも屬せぬ者の歌のサンプルです。下手な歌の自己批評もどうかと思ひますので次。

「詠草」(村上春次) ナイブな点は好ましいがもつと形式的方面に研究されたらどんなものでせう。歌をやるなら一

派に固執されるがよい、さうでないと歌に對する懷疑が生ずる。今後の活躍を切に期待する。

「五月」(館) 久しぶりの館君の俳句だが仲々好ましい。俳味が充分に表はれてゐる。

石見ゆる流れ木ぐらしあやめ草苗代の隣は馬のしづき哉
が面白いと思ふ。

「性格の亡霊」(星野邦彦) 感情が一点に集中してゐるのは良いのだがその表現形式や修辭に再考すべきものがなからうか。だがとも角此の手記は我々の關心を惹くべきものでなければならぬ。

谷口、黒田、樋口の映畫隨想はその素養の深さを示す佳品。教へられる所が少くない。更に映畫評論に於ける今後の研究及び活躍を期待する。

遺憾乍ら掲載出来なかつた原稿、隨筆「このしろ」(西林忠俊)、「隨筆」(老田景三)に就いて一言するに、兩人とも文學の一ジャンルとしての隨筆に對する觀念が不足で、單に思ひつきの事を書いてゐ

るに過ぎないと云ふ感を興へしめる。テーマを一点に集中して純粹な、論說や作文と區別される文學的表現に留意して今後の發展を望む。それにしても私は隨筆執筆の困難さを泌々味つた。

その他城丸の「校内文化の爲に」は諸兄の味ふべき文であり、今後も城丸君の若々しい熱情に期待すべきものがあらう。

最後に當つて、私は本號にも研究・論文の缺如してゐる事を返す返すも残念に思ふ。(佐口)

映研獨立について

梅雨に入つてもう大分になると云ふのに毎日毎日むし暑い天氣續きで、服等はひどく汗くさくなつてしまひました。まるで眞夏の様だと思ひますが、やつぱり六月は六月らしく、田圃ではお玉杓子が大分たつて來たし、畦はあきもせずに毎晩毎晩鳴いてゐます。此の頃では時々其の間に子供達の螢を呼ぶ聲がまちつて來ます。「ホ、ホ、ホータル來い、ホータ

ル來いこつちの水は甘いぞ、あつちの水はにがいぞ。此の聲を聞いてゐると子供の頃が思ひ出されます。此の邊ではたまに一匹二匹見る位ですが、其の頃の私の村の附近では、丁度植多つけを終つたばかりの田へ水を運ぶためにあふれる様に草をひたして流れてゐる小川の筋は何處へ行つても螢の居ない所はありませんでした。私は村の同輩達と毎夜の様にホ、ホ、ホータルルーと歌ひながら畦から畦をつたつて歩いたのです。

さて時候の言葉が思ひ出話におちて大分長くなつてしまひましたが、私は映研の委員の方から映研獨立について何か今度の雑誌に挨拶したやうなものを書くと云はれて是を書き始めたのです。それで先づ映畫會の沿革ですが精しい事は存じません。何でも以前は獨立の會であつたさうですが、數年前例の思想の嵐の當時文藝部と合流したとかさせられたとか云ふ事です。私等が此の仕事をやりはじめたのは別に文藝部から正式に委任されたの何のと云ふ譯ではなく、只先輩の後を

引き繼ぎして映畫館に出入りする様になつたと云ふだけの事でした。ですから只でさへ不活潑でぢきに何でも面倒くさくなる性質の私は一向仕事に熱心でなく、又それでさう責任感を覺えもせず、過して來ました。それで映畫界の事情評判等と云ふものはちつとも知らず、従つて觀賞券發行は頗るだらしない事なり、申し譯的に時々開いてゐた映畫批評會も内容外觀共に貧弱——之は其の時の出席者諸兄には失禮かも知れませんが——ばりかう云ふより他にありますまい——でした。恐らく心ある人々はひそかに嘲笑、憤慨してをられたであらふ事を思つて何れも何れも慚愧に堪へない次第であります。

それで此の様な事をして來た私にとつては、映畫會が今新に確かな基礎の上に立ち、加ふるに會長伊藤先生、委員谷口、樋口兩君と云ふ立派な指導者を得て立ち上つたと云ふ事は——其の事自身としてはいろんな点(例へば映畫藝術の理解、或ひは四高の文化運動を促進等々)から

見てそれぞれ重要な意義のある事でせうが——何やら急に肩身が廣くなつたやうな氣がするのです。(其の辯映研誕生には私はちつとも働いてゐず、一から十まで他の諸兄の力で出来たのです)委員の方の話によるといろいろ計畫があるらしく、そして其の實行に對して大變熱心に努力してをられる様です。私も其の恩恵を受ける一人として今後の活躍を期待するものであります。一番働かねばならぬ位置にゐて何もせず、而も事成就して二

重三重の恩恵を受けてゐる私は只有難い
と感謝するばかりであります。(館)

本號編輯に際して私は又しても種々の不満を味はなければならなかつたが、一つの雑誌を *schaffen* することはかけがへが無い喜びであると云ふ事を永久に記憶に留めて今度こそは新しい人に編輯をまかせて、本誌の發展を見守らう。特に二年の部員に私は多大なる期待をかけてゐる。次號こそすべての人が進歩する。

(佐口)

足引の山の雲に妹待つとわれたちぬれぬ山のしづくに	大津皇子
小竹の葉はみ山もさやにさやげどもわれは妹思ふ別れ來ぬれば	柿本人麿
宇治川を船渡せをと呼ばへども聞えざるらし雷の音もせず	讀人不知
緣先に玉巻く芭蕉玉解けて五尺のみどり手水鉢を掩ふ	正岡子規
今朝の朝の露ひやひやと秋草やすべて幽けき寂滅 <small>おとろけ</small> の光	伊藤左千夫